

## 「モノと情報」班全体報告

**アジア・熱帯モンスーン地域における生態史のなかのモノと情報**  
 —時空間軸をベースとするマルチメディア・生態誌アーカイブズの構築を目指して—

秋道智彌（総合地球環境学研究所） 久保正敏（国立民族学博物館） 田口理恵（総合地球環境学研究所）

1. 目的と展望<sup>1</sup>

モノと情報班は、平成15年度の途中からスタートした作業や研究会等の活動のなかで、徐々に形作られてきた班である。班立ち上げのきっかけは、プロジェクト・リーダーより投げかけられた一つの課題にある。生態史プロジェクトの目的が、1945年から2005年の60年間の、東南アジア大陸部メコン河流域地域にみる人間集団と環境との相互作用の複合的な歴史を明らかにすることにあり、その目的に対して、1. 資源管理、2. 生業複合、3. 栄養と健康と、それぞれの軸に即して個々のフィールド調査が進められる。それらフィールド調査からは、生物資源研究における従来からの方法と視点による有力なデータ収集と解析の成果が期待できるだろう。が、しかし、三つの軸からの収集データと成果を、相互に関連づけ連動させていくには、どうしたらいいのか。そのための具体的な手段と方法を考えることが与えられた課題である。

プロジェクト・リーダーからの課題を踏まえつつ、1945～2005年という時間の幅でメコン河流域地域の生態史を再構成するプロジェクトの目的を斟酌した際、われわれは物質文化や有形の資料の分析が鍵となる重要な研究対象となるものと考えた。つまり、同地域における諸民族集団は、周囲の生態環境や外部の社会・政治・経済的な条件との相互作用を通じて、生活や文化に根ざしたさまざまな道具・技術を生みだしてきた。そのなかには、東南アジア・熱帯モンスーン地域に特有の稲作農業や狩猟および淡水漁撈に不可欠な技術、食料の運搬・加工・保存技術、布・染色・織物の技法、疾病や感染症の治療に関する治療技法、遊びや娯楽の道具、土着のアニミズムや上座部仏教の実践に関わる呪具・儀礼用具などが含まれる。しかも、生活の多面的な領域で利用される技術とそこで用いられる諸道具は、民族集団の同一性や文化的な伝統に根ざしたものであるとはいえ、歴史や地域を超えてまったく何の変化もなく持続してきたのではかならずしもない。生態環境に大きく規定された技術から、外部の経済条件や他集団との接触、人の移動や技術移転などを通じて変化、変容を遂げてきた技法・技術やモノ（道具）、新たに外部社会から導入され、従来のモノを駆逐し浸透したもので、個別ローカルな生活空間内で利用される技術とモノそれぞれに多様な履歴が内在しているといっていよう。そして個別のモノへの詳細な観察から、個別のモノを構成し、もしくは利用にみる諸要素間の関係とその分析を組み合わせることは、モノに刻まれた多様な履歴を引き出し、全体として理解しようとする試みとなる。こうした試みは、生態史理解に向けた新たな方法を提案することにもつながるものと考えている。

むしろ個別のモノが全体をすべからく表すものであるかは、議論すべきところだが、それでも物質としてのモノ、言い換えればモノという存在の個性、独立性は明らかである。同時に、その材料、製作、流通、象徴的利用などをめぐる知と身体技法や観念などは、個別のモノのなかにはいわば埋め込まれ（embedded）、宿っている（nested）と見なすことができる。モノと情報班では、主に稲作農業や狩猟採集、淡水漁撈に不可欠な技術および、食料の運搬に関わる道具・技術に注目し、研究会を通してそれらの道具の検討を重ねてきたが、それらのモノの多くは、本来、生態環境に由来し、また人と自然環境の相互作用の具体的な場面・場面に介在するものであるからだ。したがって、それらのモノを詳細に観察するということは、人と自然環境の相互作用の具体的な場面の痕跡を扱うことであり、さらに、人々の営為も生態環境も、双方の変化の動態を展望することにもなる。モノ研究と生物資源研究を統合化する可能性はきわめて大きいといわなければならない<sup>2</sup>。

また、上述の問題意識にたてば、すでに国内に現存する収集資料もきわめて重要な研究対象となることを指摘しておきたい。というのは、モノの変容・変化に注目するならば、過去の収集資料は、調査地の状況を時系列に沿って分析するために不可欠な情報を提供してくれる。これを現地調査から得られる分析結果と比較対照することにより、個別のモノがもつ意味を立体的に提示することが可能になるだろう。

実際に東南アジア大陸部では、日本人調査団による調査収集活動が積極的に行われてきており、その収集資

料と関連情報が国内各地の博物館に蓄積されている。例えば、日本民族学協会による東南アジア稲作民族文化総合調査（1957～58年実施、国立民族学博物館所蔵）や、それとほぼ同時期に実施された大阪市立大学による学術調査、あるいは上智大学西北タイ歴史・文化調査団（1969～74年実施、南山大学人類学博物館所蔵）がある。特に、生態史プロジェクトにおいて、生物資源研究のフィールド調査が多角的に実施されるラオスの場合、1975年の政変以降、1980年代末まで事実上の鎖国状態となる。政変直前に実施された故渡辺仁博士によるラオス調査（1974年実施、東京大学総合研究博物館所蔵）や、天理教によるラオス伝道と巡回医療隊派遣（1970～78年実施）にまつわる資料は、政変直前の状況を知る上で貴重な資料となるだろう。さらにラオスへの外国人入国が解禁となった直後に国立民族学博物館によるラオス資料収集調査（1989～90年）が実施されている。1990年代後半には鹿児島県歴史資料センター黎明館の川野和明氏による収集調査および奄美大島の原野農芸博物館による収集調査が精力的に行われている。また、上記にあげた活動に関して言えば、モノだけに限らず、写真、動画、紀行文、研究論文からフィールドノートなど、さまざまな関連情報が残されている。上記に挙げた調査研究の遺産たる博物館コレクションを、プロジェクトのもとで実施されるフィールドワーク調査地それぞれの現状を時間的・空間的に関連づけ、同地域の生態史の動態を把握するための指標として扱っていきたいと考える。

上記の先行学術調査の動向は、国内博物館の収蔵資料情報を調査収集しつつ、モノの背景を検討していくなかで得た知見でもある。モノと情報班では、こうした博物館収蔵資料の情報収集からはじめ、関連資料の所在調査とともに、関係博物館所蔵のモノの分析や収集活動の背景を検討する作業へと活動内容を広げてきた。同時に、個別のモノに埋め込まれた情報を引き出し複眼的に精査していくためには、モノそのものへの理解を深め、モノへの視点を鍛える必要があると考え「道具の検討会」等の研究会も実施してきた。こうした活動は次年度も継続していくが、次年度では、さらにモノのもつ情報を補完し、充実するうえで、文献資料情報およびフィールド調査によるデータを組み合わせて、データベース化していく作業を目指す。モノの製作年代、収集時期や文献の記載時期が異なる上に、対象とするのが東南アジア大陸部の多くの少数民族であることを勘案し、時間軸と空間軸を変換しながら検索可能なデータベース「生態誌アーカイブズ」を策定することが本班の中心的な課題であり最終目標となる。

もともと、モノと情報班が扱うモノは、さまざまな博物館に分散しているため、モノの調査や分析・検討には、資料を所蔵する博物館との協力・連携が不可欠である。また、本研究の成果となるデータベースは、生態史プロジェクトによるフィールド調査のみならず、関係資料を所蔵する博物館との共同研究と協力連携の上ではじめて実現する成果でもあるため、関係博物館それぞれにとって、所蔵資料の新しい利活用にも寄与できるような、共有データベースとしての「生態誌アーカイブズ」の構築を構想している。

（文責：田口理恵）

## 2. 活動経過と次年度の予定

今年度のモノと情報班の活動は、＜博物館コレクション調査＞、＜ワーキング・セミナーの実施＞、＜フィールドワークとのインターアクション準備＞と、大きく3つにその内容をまとめることができる。以下では、それぞれの軸について、今年度の活動内容概要と次年度の予定について述べていく。なお、以下の2章の2]節は田口の、4]節は久保の個人報告の代わりでもある。2]節および3]節は、田口、清水が共同でまとめた内容となる。以下の2-2節ではワーキング・セミナーの実施経過のみを報告しており、研究会での議論やそこからの展望等については、別途、清水が個人報告（活動報告1）のなかで論じているので、そちらを参照されたい。

### 1] 博物館コレクション調査<sup>3</sup>

メコン河流域で収集された生業道具を所蔵する博物館にあたり、博物館標本台帳データ等、所蔵品に関する基礎情報を入手。その後は、収蔵品の基礎情報から関連する資料情報を取り出し、モノ情報の整理と分析などの手順で作業を進めてきた。

博物館コレクション調査は、まずは国立民族学博物館資料から着手し、上記の手順で作業を進めながら、民博以外にどんな博物館があるかを調べ、対象博物館を広げていったことになる。以下では、博物館コレクション調査で対象とした対象博物館の資料および情報整理作業の進捗状況を述べ、続いてこれらの博物館資料を扱う意義、

問題点等をまとめる。

#### (1) 博物館コレクション

##### 【国立民族学博物館】

国立民族学博物館には、タイ 5093 点、ラオス 1103 点と、雲南 1017 点と、プロジェクト関連地域で収集された標本資料がある。膨大なタイ資料から手がけるよりも、森林班、医学班、ズブズブ班の調査地がラオスをメインとすることから、博物館コレクションのモノ情報整理の手順の模索とモデル作りも兼ねて、ラオス資料を中心に扱うことにした。

作業経過について簡単に説明する。民博より博物館収蔵品台帳のラオス資料分をコピーし、さらに KWIC データをいただいた。総数 1103 点と数えられるラオス収集資料も、その内容を見ていくと、収集地や現地名がわかるもの、そうでないもの（例えば、業者経由で購入、寄贈等々）など、標本資料に付された情報には偏りがある。台帳に記録されたモノの情報を確認していくと、【03-014】シリーズの 530 点、【02-026】シリーズの 94 点、【C50-174】シリーズの 97 点のみが使えるものとして残った。この 3 つのシリーズに属する資料は合計 719 点となるが、そこから布資料を除いた生業道具約 500 点を分析対象候補とした。

さらに、同じ用途の道具として括られるもので、標本数も比較多く、ラオス各地から集められているものが、カゴ類、漁具類、狩猟道具、刃のある道具（利器）類となり、その総数は 366 点となる。これらの道具類は、農業、漁業、狩猟等の活動で、生物資源の採集に利用され、あるいは採集した資源の運搬、加工に利用されるモノともいえ、相互に関連した道具のカテゴリーと捉えることもできる。カゴ類、漁具類、狩猟道具、利器と、これら 4 つの道具のグループについては、「道具の検討会」にてそれぞれを取り上げ、いかに見るべきか、これまでどんな視点からどのような研究がなされてきたのかなどを検討してきた。「道具の検討会」実施前には、取り上げる道具グループに属する全資料を、民博収蔵庫にて実際に点検、観察、検討する機会をもった。

さて【03-014】、【02-026】、【C50-174】<sup>4</sup>の 3 つのシリーズだが、【03-014】シリーズは平成 3 年（1991 年）に標本登録されたもので、1989 年から 2 回計画で実施された収集調査の成果となる。ラオスが外国人解禁となった直後に行われた収集調査であり、常にモノは 2 対で集め、ワンセットを民博、ワンセットをラオス国立博物館に納めてきたという。

【02-026】は平成 2 年登録のもので、現地エージェントからコレクション購入したものである。【C50-174】シリーズは昭和 50 年（1975 年）登録の資料だが、実際は日本民族学会の前身である日本民族学協会時代に収集された資料となる。民博設置に伴い、日本民族学協会附属博物館から文部省資料館に移管され、そこから民博に移管された経緯を持つ。このシリーズに属するラオス資料は、日本民族学協会によって 1957～58 年に実施された第一次東南アジア稲作民族文化総合調査団の成果に関連したものとなる。

東南アジア稲作民族文化総合調査は、1954 年に協会創設 20 周年を迎えた日本民族学協会が、その記念事業として企画したものである。第一次調査は 1957 年 8 月から約 8 ヶ月でベトナム、カンボジア、ラオス、タイを舞台に、第二次調査は 1960 年 2 月から約 3 ヶ月で東部ジャワ、バリ島、ロンボク島に、第三次調査は 1963 年 6 月から約 10 ヶ月で、中部インドやネパールに調査隊を送り出したとされる [伊藤 1988: 297]。

旅行記『メコン紀行：民族の源流をたずねて』にまとめられた、東南アジア稲作民族文化総合調査（以下では、稲作調査団と略す）の第一次調査団によるタイ、カンボジア、ラオス調査は、松本信弘を団長とし、農学から浜田秀男、長重九の参加も得て、言語学（浅井恵倫）、民族学（河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄）、考古・歴史学（清水潤三、江坂輝弥）、技術文化（八幡一郎）の専門家が参加している。さらに讀賣新聞報道班と映画班が同行し、現地では和田格（医師）、石井米雄（外務省）などが参加している。

民博には稲作調査団の関係資料として、モノだけでなく写真資料も所蔵されていることがわかった。写真ネガ特別収蔵庫には日本民族学協会コレクションとして 7661 枚の写真が死蔵されており、そのうち第一次稲作調査団による写真は 2535 枚となる。写真資料は、台紙に写真を貼り付けたもので、撮影日時、撮影者、撮影場所、写真タイトルもしくは撮影対象に関する説明等が記されている。とはいうものの、台紙ごとに記載内容にばらつきがあり、撮影者によっては撮影日時が月のみであったり、撮影場所も国名のみものから村の名前まで記されているものもある。撮影場所等が不明な写真を除くとタイ 786 枚、カンボジア 786 枚、ラオス 955 枚となる。

非常に貴重な資料のため特別収蔵庫からの持ち出しができず、一枚一枚を台紙ごとデジカメで撮影し、その画像をもとに台帳情報をエクセル入力し、写真リストを作成するという作業手順をとった。しかしこの段階では、被写体に関する情報にばらつきがあり、一覧データとしては不備事項も多く使えない。今後は調査団メンバーによる研究報告や、動画、その他関連資料の情報を参照しつつ、関係者への聞き取りもあわせて、情報の穴埋めと、補足情報を追記していくことで、データとして精微していく予定である。実際に、第一次稲作調査団による採集資料品目を見る<sup>5</sup>と、タイ資料 199 点、ラオス資料 72 点、カンボジア資料 25 点とある。民博【C50-174】シリーズのラオス資料 97 点には、稲作調査団として収集した資料のみならず、調査団メンバー個人による収集品で、後に民族学協会附属博物館に寄贈されたものや、もしくは、ほぼ同時期に実施された市立大調査による成果が紛れている可能性もある。

関連資料の所在等を調べていくと、稲作調査団に同行した読売新聞映像部製作の記録映画『民族の河メコン』は読売映像に保管されていることがわかった。記録映画（複製）はすでに入手済みである。さらに編集前のネガフィルムも入手できれば、モノ、写真資料の背景について、より詳細な資料検討が可能になるだろう。

稲作調査団送りだし当時の状況を知る手がかりとなるのが日本民族学協会事務局関係資料であり、現在、神奈川大・日本常民文化研究所に保管されている。同協会事務局関係の文書資料の現物は、日本民族学振興会の解散に伴って日本常民文化研究所に移管された。ただし日本民族学会事務局は、移管前に事務局関係資料の内容を整理し、デジカメで撮影し、デジタル資料として保管しているとのことである。

さらにつけ加えるならば、第一次稲作調査団に参加した浜田氏が現地採集した稲の品種 1200 種の全サンプルを、佐藤洋一郎氏が所持している。

#### 【原野農芸博物館】

原野農芸博物館の収蔵品目録〔原野農芸博物館 2000〕を見ると、タイ 1176 件、ラオス 1125 件、ベトナム 406 件、ビルマ 168 件と、民博に勝るとも劣らない豊富な資料を所蔵していることがわかる。原野農芸博物館については、8月に大西が視察に出かけ、その折に収蔵品カード形式のデジタル・データ資料をいただいた。民博のラオス・モノデータとあわせていくことも考えて、収蔵品カード形式のデータをエクセルに入力しなおし、原野農芸博物館収蔵品リストを作成した。3月にはモノと情報班メンバーで、原野農芸博物館に赴き、展示場や収蔵庫にて収集資料を直接観察し、収集に関わった関係者からの聞き取り等を行った。原野農芸博物館の沿革やコレクションの背景・意義等については小島摩文報告に譲る。

日本、東南アジアからオセアニアまでと、農業、生業道具資料を積極的に集めてきた原野農芸博物館では、1995年よりラオスでの収集調査をはじめている。1996年までは北部を中心に、1997年より南部へ、その後はさらに国境を越えてベトナムや雲南へと、収集の対象地を広げている。原野農芸博物館による収集調査旅行には、1996年から川野氏も合流しており、川野コレクションの収集地と重なる部分もある。

#### 【鹿児島黎明館保管の川野和明コレクション】

川野和明氏は、東南アジア大陸部での調査収集活動を 1996 年より始めた。今年度 12～1 月のラオス調査は、川野氏にとって 7 回目の調査となる。1996 年よりこれまで、ラオス北部を中心に中国国境付近、ベトナムと回り、実に 600 点以上におよぶ生業道具関係の資料を収集してきている。川野コレクションは、黎明館収蔵庫に保管されているものの、あくまでも個人のコレクションである。標本台帳の作成等まで手が回らないこともあり、資料情報の整理は十分ではない。モノと情報班では川野コレクションのデータ化に向け、まずは標本に付されたタグ（モノ情報のメモ書き）をもとに、台帳的な基礎リストを作成するために、黎明館にてコレクションの点検、観察、撮影等の作業を行った。次年度では、ベタ打ちされたタグ情報リストに対して、空欄を穴埋めし、モノ情報の捕捉等をしていくことで、台帳データとして整備し、川野コレクションのデータ化を進めていく。

川野コレクションの背景や意義は、橋村修報告および川野自身による個人報告に譲る。

#### 【東京大学総合研究博物館の渡辺仁コレクション】

東京大学総合研究博物館には、渡辺仁氏（1919-1998 年）の研究業績資料があり、それらは渡辺氏が亡くな

った1998年に、ご遺族により同博物館に寄贈されたものである〔西秋 1999〕。そのうち、ラオス関係はスライド写真が293枚、フィールドノートや、科研書類等の文書資料および漁具実物3点がある。渡辺仁ラオス調査資料は、1974年（昭和49年）12月から翌年1月にかけて実施された「ラオス国考古学調査」の関係資料となる。

調査団（渡辺仁、重松和男、安斎正人からなり、現地から麗澤大学関係者および文部省考古学局のダラ氏等が参加）は12月8日にビエンチャン入りし、12月中はヴァンビエン（12月14日～21日）、ルアンプラバン（12月22日～29日）、年が明けて1月4日から11日まではタケク周辺の洞窟を回り遺跡調査を行っている〔安斎 1985〕。この間、渡辺は「土俗考古学（生態）の立場から、ヴァンビエン周辺の現生民族の一端について」観察・聞き取り調査も行っており、「ヴァンヴィエン地域は・・・野生動植物の採集活動（狩猟、漁撈、植物採集）の調査に適していること」<sup>6</sup>から、昭和51年度から先史考古学（発掘調査）と土俗考古学（生態調査）による本格的な調査の実施を計画していた。

調査計画書によれば、昭和51年度からの本格的調査は、10人（渡辺仁代表、重松和男、大塚柳太郎、安斎正人、五十嵐忠孝、口蔵幸雄、鷹野光行、新田英治、プラシット・スーリサク、ダラ・フォームスーヴァン）で組織され、第一回調査（昭和51年8月10～52年1月23日まで）から、56年度までに3度の海外調査を実施する長期調査計画を予定していた。ところが、ラオスの政変により調査計画そのものを断念せざるをえなくなったという経緯をもつ。

渡辺仁資料については、12月に田口がスライド写真のスキャナーでデジタル化し、また写真のリストを作成。同時に事務関係書類の内容を調査し、文書の一部コピーと事務関係書類リストを作成した。組み立て式漁具3点の実測・撮影は次年度に実施する。またスライド写真も、フィールドノート等とあわせながら、撮影場所の特定、内容等を詳査していく必要がある。なお、渡辺仁氏の土俗考古学への視点、意義等は後藤明の報告に譲る。

#### 【天理大学附属天理参考館】

天理大学附属参考館では、基本的に標本管理は標本カードと台帳によってなされている。地域によって、台帳およびカード情報がデジタル・データ化されているところもあるが、東南アジア大陸部資料についてはなされていない。12月に清水、田口、大西が参考館に赴き、吉田の協力のもと、1986年までの資料について、台帳から東南アジア大陸部関係の部分ピックアップしていく作業を行った。つまり台帳は、参考館に搬入され登録された順に資料情報が書き込まれているからである。1月に再度赴き、付箋をした大陸部関係部分をコピーし、それをもとに記載事項をエクセル入力し、大陸部資料リストを作成する作業を行った。

特に1986年までに登録された東南アジア大陸部資料は全部で768点あり、ラオス資料は35点、タイ576点となる。49点あるカンボジア資料には、第三次大阪市立大（カンボジア）調査団（石井健一代表）収集の、農具に関係した道具資料35点が含まれている。

ラオス資料35点には、1958年に岩田慶治氏から得た2点や、1965年10月27日登録の8点および1968年4月登録の4点など、名古屋教会長森井敏晴氏寄贈のものが含まれる。森井氏は1969年6月、1975年4月にもラオス資料を参考館に寄贈している。この森井氏が、1975年1月からの3ヶ月におよぶラオス巡回医療隊（第一次）の派遣を橋渡し、同年9月にはラオス王国宗教省より「布教許可」を得て実施された天理教ラオス伝道を指揮した中心的人物でもある。参考館所蔵コレクションの概要や、70年代の天理教ラオス伝道の概略やその関係資料およびラオス伝道の意義等は吉田裕彦の報告に譲る。

#### 【その他】

以上のほか、1969年～1974年に実施された上智大西北タイ歴史文化調査団（白鳥調査団、第一次～第四次）の成果となるコレクションが南山大学人類学博物館にある。このコレクションは、2000年に上智大・量研究室から南山大学人類学博物館に寄贈されたもので、モノ、写真、動画から構成される。しかし、未だ十分な資料整理が進んでおらず、資料活用での協力・協同をお願いできる状態にはない。

次年度では、これまで作成してきた博物館コレクションごとのモノの基礎データ<sup>7</sup>を整備していく。博物館ご

とにモノの分類等が異なるため（表-1を参照）、標本情報管理の様式を調整しながら、分類項目を再編成しつつ、一つのモノデータとしてまとめていく作業を進める。そこでは、写真・映像、フィールドノート、文献資料情報等の関連資料を精査し、資料間相互の関連性を明らかにしつつ、さらに関係者からの聞き取りを組み合わせ、モノ（および写真）のもつ情報を補完し充実をはかっていく。

表-1：「モノと情報」班で扱う博物館資料（モノ・写真）

	対象博物館	雲南	ラオス					タイ	カンボジア	ベトナム	ビルマ
モノ資料	(編作)		(197)					(219)	?	?	
	民博	1017	1103					5003			
	(林資料)		カゴ	刀物	漆器	竹	銅				
			117	119	43	47	727				
原野調査		185	199	122	34	308	1176		406	168	
		1125									
天理参考館	19		35 (38)					576 (573)	49	13	66
写真	編作写真		955					786	786	8	
	渡辺仁写真		293								

注) 民博モノ資料のなかで、収集時期が古いものは、雲南関係が、鳥居龍三収集の2点 (C50-519)、ラオス資料は日本民族学協会＝編作調査団 (C50-174)、タイ資料の場合、EMS による佐々木高明 (C49-007) や石毛直道 (C50-026) 収集、編作調査団 (C50-174) などとなる。

以上に述べた収集調査それぞれの踏査地と行程については、清水が資料化を進めてきた。今後は関連資料からの情報とつぎあわせつつ、踏査地の詳細を明らかにしていく。さらに、調査行程およびモノの収集場所に関する情報を、メコン GIS を活用しつつ、地図上におとしていくことで、モノの収集地分布を示す地図資料を作成することを予定している。同時にメコン河流域地域全体の各種地図を広く集め、既存地図の利点、問題等、地図資料情報の活用を検討しつつ、生態史プロジェクトのフィールド調査拠点を、モノ分布地図にマッピングしていけるような、時間と空間の表現に配慮したデータベースの作成準備を進める。

モノデータとモノ分布地図からなるモノのデータベースは、生態史プロジェクト内で共有できる基礎的データベースであり、フィールドツールとしても活用しうるものになるよう構想している。このモノのデータベースに対して抱くイメージは、渋沢の言葉を引用することで説明にかえたい。渋沢敬三が「絵引きは作れぬものか」と構想し、編集を試みた絵引きの意義を以下のように述べている。「この仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチャの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点でも誰でもいいから一度は完成しておくで後から勉強する方々の助けになると思う。」[澁澤 1984 (1954) : viii - ix]。

モノのデータベース自体の完成は、生態史プロジェクトの3つの研究軸からみれば、その専門分野内での最先端の成果に直接的に寄与するものではないだろう。また各班メンバー個々にとっても、即効の業績生産につながらないかもしれない。が、しかし、プロジェクトメンバーが、フィールド調査にて個々の研究対象・テーマを掘り下げていくときに、いったん視点をかえて眼前の対象をちがった視点から見直すようなきっかけに利用してもらえるような、思い思いに意味を引き出すような共有データになればと考える。そのためにも、モノ情報のデータベース化では、様々な専門（地域文化、人類学、地理学、生態学、農学など）や生態史プロジェクトの研究軸からみて重要となるインデックスや視点も取り入れつつ、モノのデータを精査していく準備作業を進めていきたいと考える。

## (2) 博物館コレクションのコレクション

モノと情報班が扱う上記の博物館コレクションは、上述の通り、1950年代末、1970年代、1990年代に、

表-2 モノから探るラオス60年間の変化

ラオスでの学術調査、研究活動など		資料の所在地 (博物館)	
●東南アジア稲作民族文化総合調査団 (1957～58年)	鎖 国 状 態 73-86	国立民族学博物館 モノ、写真	
●大阪府立大学調査 (1957～58年)		?	
●上野大西北タイ歴史・文化調査団 (1969～74年)		南山大学人類学博物館 モノ、写真、動画	
●天理教巡回医療録・伝道活動 (1970～1978年)		天理参考館、関係者個人 による所蔵	
●暹羅(ラオス)調査 (1974年)		東京大学研究総合博物館 スライド、フィルム	
		●民博ラオス収集調査 (1989年～1990年)	国立民族学博物館 モノ
		●原野島立博物館収集調査 (1995～1997年)	原野島立博物館
		●川野氏ラオス調査 (1996～)	鹿兒島黎明館(川野個人)
		●生態史プロジェクト(～2005年)	

それぞれの学問的関心や背景をもって実施されたエクスペディション(学術調査)の成果であり遺産でもある。表-2に示すように、1957～58年の稲作調査団から生態史プロジェクトまでを並べれば、過去の収集資料は調査地の状況を時系列に沿って分析する上で、参考となる一つの指標を提供してくれる。つまり、1975～1980年代末までの政変に伴う鎖国状態の期間をはさみ、その以前と以後、およびプロジェクト進行中の現在と、時期を大きく3つにわけた場合に、上記の学術調査が残したモノは、それぞれの時期の時代状況に対し、われわれが想像し近接するための手がかりにすることができる<sup>8</sup>。ある時期にある場所で収集されたモノは、当時そこにあったのだということを示す。フィールド調査において、あいまいな内容に翻弄されつつも、彼/彼女の経験の蓄積と時間経過を推察していく際に、“当時そこにあったモノ”は、相手の記憶を引き出す手がかりとなる。その意味で、モノのデータベースは一つのフィールドツールとして利用することもできるのではないだろうか。

さらに、上記博物館コレクションのモノデータに対して、Pavie Mission(1879-95)などのフランス植民地時代になされたエクスペディションの関連資料を組み合わせれば、生態史プロジェクトが扱おうとする1945年から2005年までの時間の幅とその間での変化の動態を、インドシナ近現代史の流れの中に位置づけ、相対化するための視点を得ることにもつながるだろう。

上記の博物館コレクションを一まとまりの資料として扱う場合に、「そのモノは確かにそこにあった」という事実、モノの実在性を根拠とし、モノを時間指標あるいは空間指標として活用することが可能になる。以下では、博物館資料とその関連情報を集めてきた過程で見えてきた、上記コレクションの意義や問題について、2点のみを指摘しておきたい。

#### ① 稲作調査団から生態史プロジェクトまで

モノに刻まれた多様な履歴には、モノが作り出され使われてきた、フィールドにおける人と自然環境の相互作用の痕跡という側面と、それぞれのモノが博物館におさまるまでに辿ってきた経緯という側面とがある。特にここでは後者の側面から博物館コレクションおよび関連資料を扱う問題と意義について考える。

モノの移動とその経緯が最も複雑な例が民博の【C50-174】シリーズとなる。先に述べた通り同シリーズのモノは、日本民族学協会時代に収集された日本民族学協会附属博物館の収蔵資料だったが、それが民博設置に伴い、いったん文部省資料館に移管され、そこから民博に移管されたという経緯を持つ<sup>9</sup>。さらに日本民族学振興会の解散とともに、日本民族学協会および振興会の事務局関係文書は、現物が常民研に移管され、デジタル版が日本民族学協会事務局に保管されることになった。現在、日本民族学協会に関わる諸資料は、複数の研究機関に分散した形で保管されているが、移管を繰り返したことで、移管の経緯や権利関係が不透明となり、それぞれの所

蔵先では扱いの難しい問題資料となっている。博物館コレクションとなったモノの履歴を探るということは、このように、モノの移動過程に関わった人々や、関係者がとった対応の一つ一つを辿り、絡み合った糸をほぐしていく作業でもある。

対象とする博物館コレクションについて、収集に関わった人について見てみよう。第一次稲作調査団のメンバーは、松本信弘、浜田秀男、長重九、浅井恵倫、河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄、清水潤三、江坂輝弥、八幡一郎からなり、讀賣新聞報道班と映画班メンバーに加え、現地から和田格、石井米雄などが参加している。この第一次稲作調査団派遣当時の資料を見ると、日本民族学協会は東南アジア稲作民族文化総合調査委員会を組織して記念事業を進めたことがわかる。その委員長には岡正雄、幹事に馬淵東一、白鳥芳郎、河部利夫、松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、岡正雄、宮本延人、西村朝日太郎、山本達朗、蒲生正雄、委員には古野清人、牧野巽、盛永俊太郎、今西錦司、浜田秀男、岩田慶治、須田昭義、川喜多二郎などが名を連ねている。また調査団東京事務局は、上智大学白鳥教授研究室に置かれていた。当時の民族学協会は、協会役員に渋沢敬三、理事長が岡正雄、理事を松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、須田昭義らが務めており、第一次稲作調査団には、当時の日本民族学のお歴々がメンバーとして参加していることがわかる。また、渋沢敬三は稲作調査団の後援会会長にもなり、広く財界から寄付を募って稲作調査事業をサポートし、文部省からの補助金 4,000,000 円に加えて、寄付金 13,668,240 円（予定額？）の規模で実施された。

稲作調査団が文部省の補助金を得て、すでに外貨割り当てを受けていたこともあり、ほぼ同時期に調査を計画していた大阪市大学東南アジア学術調査隊は、「一日四ドル、百日分」の外貨割り当てしか得られなかった。同調査隊の隊長をつとめた梅棹初代民博館長による調査紀行『東南アジア紀行』[梅棹 1979]を読むと、稲作調査団をライバル視するような複雑な心境が見え隠れする。この大阪市大東南アジア学術調査隊は、1957-58年の第一次調査では梅棹忠夫を隊長に、小川房人、依田恭二（植物生態学）、川村俊蔵（テナガザル）、吉川公雄（ハチ）、藤岡喜愛（人類学）からなり、現地から石井米雄らが参加している。1961年からの第二次調査では岩田慶治を隊長とし、小川、依田、荻野（森林研究）、松岡（栽培植物学）、今立（昆虫学）に、四手井網英、吉良竜夫が参加している。さらに地質学の石井健二を団長に第三次調査隊としてカンボジア調査が実施されている。

第一次稲作調査と市大学術調査の双方に、岩田慶治と石井米雄が関わっている。また、稲作調査団の東京事務局を務めた白鳥芳郎は、1967～74年と4次に渡って実施された上智大西北タイ歴史文化調査<sup>10</sup>を組織し、そこには稲作調査団のメンバーでもあった八幡一郎も参加している。単純にそれぞれの学術調査について参加者名のみを取り出すだけでも、モノと情報班で扱う博物館コレクション同士に、なにがしかの関連性や重なり、連続性を見出すことができる。より詳細を確かめていかねばならないが、関係資料を散見すると、稲作調査団と市大隊に参加した岩田慶治が個人として収集したモノには、天理参考館に渡った2点の他、日本民族学協会に買い上げられて附属博物館資料となり、そして民博資料におさまったものもあるようだ。また、市大隊カンボジア調査での収集品は天理参考館に所蔵されている。

蛇足として、人のつながりから博物館コレクションと生態史プロジェクトとのつながりをこじつければ、1974年のラオス国考古学調査を指揮した渡辺仁は、プロジェクト・リーダー秋道の大学院時代の指導教官でもある。また天理教ラオス巡回医療団で1972年の第4次から、第5次、第6次と、第8次（1976年）の隊長医師を務めた天野博之医師の長年の活動が、人類生態班によるラオス調査の礎にもなっているというのは言い過ぎだろうか。吉田報告が述べるように、天理教が1970年代に開始したラオスでの巡回医療活動の意義は、ラオスもしくは東南アジアでの国際医療援助の歴史<sup>11</sup>とあわせて、「人類生態」班のかたがたにお教えいただければと考える。

博物館コレクションを通して、上記にあげた稲作調査団からの先行学術調査を眺めると、生態学、農学、医学、地理学、民族・人類学などが集まり、総合的な取り組みを目指した当時のフィールドワークに対する熱意と、それぞれの専門分野に細分化していくその後の過程とを改めて考えさせられる。こうしたモノや人の重なり、つながりを踏まえると、稲作調査団からの先行の学術調査は、＜人と環境の相互作用＞の総合的理解を目指した学際的な取り組みの流れとして見直すこともできるだろう。生態史プロジェクトもまた、その連続の中に位置づけることができる。特に、生態史プロジェクトと類似した分野構成からなる稲作調査団の遺産は、日本民族学協会時代の民族学の再検討、日本の東南アジア研究の展開や学際的研究調査のあり方などを考える上でも重要な資料・史料となる。

「持続的発展」「環境資源の持続的利用」が声高に強調されるほど、そのことを主張する研究者サイドに、問題関心や研究体制の持続性や、研究データと成果の「持続的発展」は果してあるのだろうかと考えさせられる。稲作調査団から生態史プロジェクトまでの連続性を意識することは、これまでになされてきた研究者の営みとその蓄積から、われわれは何を引きつぎ、受け継いできたのか、そして、現在の取り組みをこの先どのように持続させ発展させていくのかを自問する契機にもなるだろう。

## ② Diffusion と Region

次に、「モノはそこにあった」というモノの存在性を根拠とし、その情報を集積させ空間的に捉える、“モノの分布”を見ることの可能性について考えてみたい。

図-1は民博林収集資料の釜の収集地をラオス地図に落としたものである。1989～90年のラオス収集調査では、町で買い集めるのではなく、村の情報を得て、そこまででかけ、数日滞在しながら使われている道具類を収集していくという方法をとったという。収集を担当した林行夫氏によれば、ラオス南部での収集では、主にモン・クメール系の村を訪れ、

また、他には見られない、その場所で特徴的なモノを集めたという。それぞれの収集地で特徴的なモノということで、釜のみでも、それらを県別ではあれ実際に地図に落としてみれば、魚をとるために使われる道具が、いかに場所によって違うのかという多様性が明らかになる。と同時に、実際に現物を手にとって見ると、サイズの大小はあっても道具の構成（素材の組み立て方）自体が似ているものあり、そこから共通した製作加工技術の、複数の地域での利用と分布として考えることもできるだろう。つまり、モノの分布図によって、われわれはモノの地域差と多様性を同時に見渡すことができる。同時に、モノそのものに対する疑問・問題関心も果てしなくひろがっていく。

例えば、ワーキング・セミナー（道具の検討会「漁具の会」）でも確認され、また秋道が強調したように<sup>12</sup>、釜の多様性の背景として、それぞれの釜がどこに設置されて、どのように用いられているのかを考えなくていけないだろう。設置場所は、メコン河の本流、支流なのか、あるいは水田、水路、川沿い、流水か泥に差し込むの

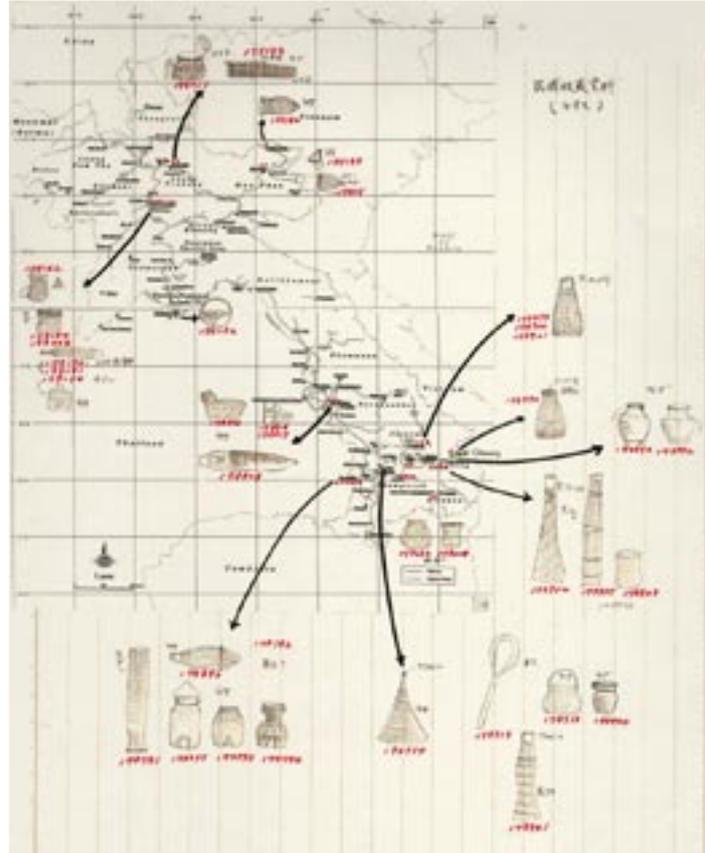


図-1：民博釜資料の収集地（作業用メモ、田口作成）

か、雨季のみ、乾季のみの使用か、通年で用いられるものか、そしてその道具で採る魚の種類と生態はどうなのか、などである。素材で用いる植物（竹）の利用でも同様のことが言えるだろう。水田での罠設置ならば、田んぼの所有者は、獲った魚の所有者の問題はどうなっているのか。仮に使用時期や使用期間に伴う道具の耐久性や消耗の問題から、取替えのサイクル、修繕、保管の方法はどうなっているのか。自家製なのか、商品なのか。素材はどのように入手されるのか。あるいは資源の商品化に伴い、捕る量や人が増えたり、鮮魚を運ぶために道具の利用量が増える、巨大化するとか、代替品（バケツ、ポリタンク、発泡スチロール製の容器など）の登場など、利用面での変化があるかもしれない。



写真－1



写真－2

民博罠資料の中で、サバナケット収集のネズミ捕りのような道具サンプルについて取り上げてみたい。竹と木の板で作られた小型の罠（写真－1を参照）は、台帳によればラオ語で“CHUN”と呼ばれるものである。ラオスの漁具の多様性を扱った図説によれば、魚が入るとドアが落ちるタイプの罠を jun (drop-door traps, ラオ・ルム使用) としており、それには、幅1 m×長さ2 mから60 cm×長さ1.3 m位までの竹で編んだ枠に、ネットがけたした巨大なタイプのものと、幅20 cm×高さ20 cm×長さ40 cmほどの木製箱型のもがあるという。そして後者のタイプは、カムムアン県近辺で使用されるものという [Claridge, Sorangkhou and Baird 1997:41-44]。民博のサンプルと同じものが対岸のタイ側でもよく見られるといい、また巨大化したタイプのものがメコン河岸に並べられているのを、昨12月ビエンチャンにて目撃した（写真－2を参照）。この巨大タイプのものは、昨年11月に北タイ・イン川流域での利用も観察されている。この場合、ラオス出身の住民がラオスより取り寄せて使用していたとのことである。

モノの分布図は、収集地からかけ離れた場所、予期せぬ場所での、同じタイプの道具利用の発見から、さらにその利用実態や背景を知る手がかりになるだろう。モノの分布資料情報を現実に照らした際、むしろギャップばかりが目立つだろう。しかし、それらのギャップは、微妙で些細な地域差と多様性のほかに、道具利用にみる季節性や、モノの移動を生み

出す人・社会的要因を追求していくきっかけにもなる。さらに、個別ローカルな一点で考えれば、ある道具が一体どんなモノとセットになって使われているのか、あるいは、あるタイプの罠が特定期間しか使用されないのならば、それ以外の時期に人々はどんな活動を行っているのか、通年で見た生業複合のなかで、どのような道具がいっしょに利用されるのかなど、好奇心は広がっていく。個別のモノを扱う場合、そのモノを位置づけるために、いっしょに利用される道具複合とその全体を、地域比較もあわせて考えていく必要もあるだろう。

モノの分布を考えることは何も新しいことではない。むしろ古い伝統がある。しかし、従来の物質文化研究が、人類史のなかの文化史解明という関心をもとに展開してきたこともあり、それを跡付けるために取り上げられるモノ・対象は少なく、しかもモノ自体を細かくみてこなかったという問題を含んでいる。そのために、モノの分布を見るための網の目（文化項目）をより細かくしようとする試みもなされてきた。その代表的な試みとして、HRAFの文化項目や文化クラスター研究をあげることができるだろう。

文化クラスター研究は、昭和56年（1981）～59年（1984）に実施された民博共同研究の成果でもあり、1988年からのデータ入力作業を経て、1990年に刊行される [大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 1990]。ここでは、アジア、オセアニアという広域での文化比較を目標にしており、取り上げられた民族は237（東南アジアで138）で、当初33分野で486項目と挙げた比較の基準を、最終的に27の大項目と343の項目に絞り

込んだ成果でもある。ひろく民族誌にあたり、記述内容に該当する項目内容があるかないかをチェックしていった地道な作業の成果でもある。そこで設けられたインデックスは、モノだったり、その機能だったり、社会構造、親族関係、神話などの類型までと多岐に渡る。モノは文化要素として分析の対象にされたが、あくまで当該社会における文化要素の分布と要素間の機能的・非機能的関係の分析や系譜に焦点が当てられていた。表-3にまとめたように、例えば、カゴ類、狩猟具、漁具類や利器に関連しそうな事項を、文化クラスターの項目に照合させピックアップし、さらにラオスという枠をはめて考えれば、文化クラスターが提供してくれる分布情報は、実はほとんど意味をなさない。それでも、モノと分布を見ることは、個別ローカルなフィールドを越えて、分布から見える地域間のつながりや、モノの移動から見える広がりの中の一点として、フィールド調査地をいろいろな角度から見渡せる縦横な視点の重要さと楽しさを教えてくれる。

(文責：田口理恵)



## 2] ワーキング・セミナー

これまで「モノと情報」班では、モノそのものへの視点を鍛え、具体的な調査方法やモノ研究の可能性を議論するための機会として、ワーキング・セミナーを実施してきた。ワーキング・セミナーのなかでも、「道具の検討会」と称する研究会は、モノについての理解を深めることを目的に、環境と人間の相互作用に介在する道具・モノとして、特にカゴ、刃物、漁具、狩猟具を中心に上げ、それらの道具を多角的に検討してきた。「資料検討会」は、コレクションの背景（時代状況、学史的意義等）の検討から、モノが使われる地域文化、地域社会の文脈理解を深める機会、或いは撮影・実測等の作業とともに、モノ班メンバーが実際に収蔵庫にてモノを見ながら、観察・検討する機会として実施してきた。次年度も引き続き、ワーキング・セミナーを定期的実施していく予定である。

具体的な実施経過や研究会での報告者などは下記に挙げる通りである。ワーキングセミナーの議論から得られた知見や、確認された可能性の広がり、問題意識等の詳細は、清水報告および、モノと情報班メンバーの個人報告のなかでも、直接・間接に触れられているので、そちらを参照されたい。

## 「モノと情報」班ワーキングセミナーの実施経過

(道具の検討会、研究打ち合せ会議、博物館資料の实地の見学を合わせた資料検討会、その他を含む)

## 7月14日 道具の検討会「漁具の会」

<報告者およびタイトル>

秋道智彌「モノとしての漁具研究の可能性」

後藤明「釣り針、筥に見る使用時や製作者の創意工夫—モノ収集時の注意事項として—」

橋村修「漁具・漁法へのまなざしのメモ—モノを通じて歴史をみる—」

## 10月3日 道具の検討会「カゴの会」+稲作調査団記録映画上映会

<報告者およびタイトル>

秋道智彌(挨拶)「生態史プロジェクトにおけるモノと情報班の位置づけ」

田口理恵「モノと情報班で扱う博物館標本資料」、

「記録映画『民族の河メコン』の資料的位置づけ」

川野和昭「(竹の世界—カゴ類コレクションの資料解説)」

## 11月5日 道具の検討会「利器の会(1)」(穂摘み具の会の準備)

<報告者およびタイトル>

大西秀之「(鎌と穂摘具、考古学的な利器の検討ポイント)」

清水郁郎「北タイの山地で使用される利器—とくにアカの建設道具について—」

木村裕樹「木地挽体験—技能習得の実践を通してみた木地挽職人の技能に関する若干の覚書—」

## 11月12日 道具の検討会「利器の会(2)」

<報告者およびタイトル>

清水郁郎「モノへの視点—民博資料から：とくに刃物に関して」

大西秀之「鎌と穂摘み具—機能論的視点から」

川野和昭「(穂摘み具コレクションの提示と、資料解説)」

佐藤洋一郎「ラオス調査報告(稲の品種と特性の解説と、ビデオ映像)」

## 11月14日 研究報告、於『名古屋タイ・雲南研究会』

田口理恵「東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料再活用の可能性」

## 11月26日 資料検討会

「タイ北部山地民社会からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」(コーディネーター：清水郁郎)

<報告者およびタイトル>

田口理恵(挨拶)「モノと情報班の活動説明と、東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の解説」

清水郁郎「タイ社会研究および北タイ山地社会研究を踏まえたモノ研究の視点について」片岡樹「タイ国のラフ文化についての背景知識：ラフの物質文化」

稲村務「ハニとアカ」

大島新人「語るモノ、語らないモノ、語られるモノ：モノにたいする視点に関する試論」

2月3～5日 川野コレクションの基礎データ収集、撮影、検討

参加者：川野和昭、田口理恵、清水郁郎、大西秀之、宮脇千絵

2月5日 モノと情報班・研究打ち合わせ会議

参加者：久保正敏、川野和昭、吉田裕彦、小島摩文、橋村修、田口理恵、清水郁郎、大西秀之、宮脇千絵

2月20～24日 海洋文化館所蔵・東南アジア関係資料の調査と検討会

参加者：秋道智彌、後藤明、田口理恵、山田仁志、角南聡一郎

2月20日 天理教名古屋大教会の森井敏晴氏への表敬訪問と懇談

参加者：吉田裕彦、久保正敏、西村雄一郎

2月28日 データベース研究会

「データベースとフィールドワーク・ツール」（コーディネーター：久保正敏&野中健一）

<報告者およびタイトル>

野中健一「フィールド情報の即時取得とデータベース化に関する研究」

西村雄一郎「天理教ラオス伝道に関する聞き取り」

田口理恵「資料紹介：遠藤庄治氏と沖縄国際大学・沖縄伝承話資料センターによる伝承話データベース」

参加者：久保正敏、野中健一、西村雄一郎、田口理恵、清水郁郎、橋村修

3月4～7日 原野農芸博物館での資料調査および研究打ち合わせ

参加者：川野和昭、後藤明、吉田裕彦、田口理恵、清水郁郎、大西秀之

3月26日 70年代天理教ラオス伝道の関係者（森井氏、金森氏、菅原氏）との懇談

参加者：秋道智彌、久保正敏、吉田裕彦、田口理恵、清水郁郎

### 3) フィールドワークとのインターアクション

モノと情報班にとってのフィールドワークとは、国内での博物館コレクション調査とラオスでのフィールド調査の二つを意図している。もっとも、今年度のモノと情報班は予算つきの正式な班ではなかったこともあり、川野和昭がラオス調査（12月～1月）を実施した以外は、国内博物館調査とワーキング・セミナーが活動の中心となった。次年度も引き続き国内博物館調査を実施していくが、これまでの活動のなかで深めてきた問題意識をもとに、モノと情報班メンバーによるラオス調査も計画している。

モノと情報班では、大陸部でのフィールド調査経験の差を踏まえて、メンバーによるラオス調査への関わりを大きく二つに分けている。

- ① 広域トレース調査：関係博物館コレクションの背景理解を深めるとともに、収集調査当時の状況と現在との違いをはかり記録し資料化する。
- ② 東南アジア大陸部での、これまでの調査経験と研究蓄積をもとに、その発展・延長として行うインテンシブ調査（清水、川野）。

また、博物館コレクションにあるモノを踏まえつつも、現地・現在でのモノの利用の実態理解を深める目的もあり、メンバーそれぞれが、個々の問題関心に依拠して調査の対象とするモノ（および関連事項）を絞り込んでおり、それをラオス調査での焦点であり各自の分担とする。もっとも、メンバー個々が取り上げるモノは、人々が日常生活のなかで用いるモノ・道具複合の一部でもある。したがって、特定のモノがある活動のなかで利用される際に、いっしょに用いられる道具類（モノの連鎖）、もしくは生活空間を占める道具類の全体（モノの複合）を捉える必要がある。生活空間を占めるモノ複合の全体を把握するために、現地での全品調査を構想している。次年度の現地調査は、モノ班メンバーによる共同調査（全品調査）を具体化するための準備期間とも考えている。国内調査を含めて、各メンバーの役割分担、問題関心等は上記の表-4にまとめた。個々の報告が、それぞれの問

表-4: モノと情報班メンバーと分担

		国内 (博物館)	国外 (ラオス調査)	
			トース	焦点となる道具・モノ
モノ と 情 報 班	久保正敏	民博、データベ ース	○	土産物
	川野和昭	川野コレクション		竹の焼畑
	後藤明	東大・渡辺仁	○	漁具を中心に製造技術、利用
	吉田裕彦	天理参考館	○	座るモノ (椅子などを中心に座ること)
	小島摩文	原野農芸博物館	○	馬具を中心に運搬の問題と交通
	橋村修	川野コレクション	○	漁具の利用と多様性
	田口理恵	民博 (稲作・林)	○	竹製品 (織道具、編みカゴ) の製造加工 技術と製品の販売・流通
	清水郁郎	川野・原野農芸		家屋・建築
	宮脇千絵	研究補助、データ ース		(雲南の民族衣装とエスニック・アイデンティティ)
医	大西秀之	(宮川・野中調査)	医学班	

題関心や研究展望等を踏まえたものとなるので、そちらを参照されたい。

#### 4] フォーラム型のデジタル・アーカイブズとしての「生態誌アーカイブズ」

##### (1) 文化資源のアーカイブズ

国立民族学博物館をはじめとする各地の民族学・人類学系の博物館は、人類社会の多様性の発見とその知的遺産の継承をめざして研究を進めると同時に、民族誌資料・情報センターの役割も果たしてきた。収集されてきた民族誌資料の形態・種類は多岐にわたっている。モノ (生業用具、生活用具、儀礼用具、などの人工物)、写真、映像、音声・音響記録、フィールドノート、など、フィールドワーク途上での様々な記録や収集物が含まれ、表現メディア形態 (文字、画像・映像、音声・音響) や情報の回数も様々である。

こうした資料類は、各文化に対する外からの理解だけでなく、内からの理解にも役立つ資料類であり、文化の継承・復興、あるいは創成にも寄与する資源と捉え直すことができ、その意味では、「文化資源」と呼ぶのがふさわしい。しかし、一旦文化資源と捉えなおすならば、上記に挙げたような有形の資源、あるいは外在化が容易な資源だけではなく、より広い対象を資源に含めることができると、我々は考えている。すなわち、個人が持つ技術、知識、記憶、ノウハウなども、その文化成員に「身体化された文化資源」と見なすことができる (第2の категория)。さらには、個人が持つ様々な人的ネットワークや組織、制度、概念なども、「制度化された文化資源」と言える (第3の категория)。例えば、知的財産権の概念について見れば、オーストラリア・アボリジニ文化においては、個人の顔を具象化したイメージや写真は、本人の死後、外部にさらすことが禁じられている。これは西欧流の「肖像権」とは異なる、宗教的な背景を持つ「文化人格権」と見なすことができよう。そこで我々は、文化資源として下図に示すような3つの категорияを設定したい。

もっとも、第2、第3の categoria の文化資源も、最終的には第1 categoria の外在化された資源に転換されることによって、理解や共有が容易となるのであり、第1 categoria の文化資源の重要性は言うまでもない。特に、文化資源自体を現地に保留する、あるいは所有権を現地に保留しつつ、文化資源の共有を図る上では、デ

デジタル化が欠かせない。これは、次に述べるような、研究倫理の転換が求められ、現地との共同化の推進が強く求められている現在、現地の権利確保と共有・活用の両者のバランスを図る最良の方法であろう。ここに、客体化された文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する意義がある、と我々は考えている。



## (2) フォーラム型のデジタル・アーカイブズ

他方で、文化人類学分野では、従来のような民族誌資料収集や記述に対する見直しが生まれ、J. クリフォードのように「文化を語ること」「文化を翻訳すること」とは何かを突き詰めて考える動きがある。従来の民族誌は、書き手とテキストを権威付けて客観性を謳うためのレトリックに満ちているが、そもそも客観的なテキストはあり得るのかという問題<1>、書き手と対象文化出身者の間には、政治的・経済的・文化的権力がもたらす非対称性（しばしば植民側が被植民側を記述する）が厳然と存在する点<2>、西欧言語という強い言語で口頭文化を文字化することによる固定化や権威化<3>、などを問いかける。ポスト構造主義と呼応し、既存の権威や、自己と他者の区分について脱構築を提唱するものと言える。

これは、民族誌記述に重点を置いた見直しだが、資料収集や取材、写真撮影についても同じ事が言え、特に<2>に関しては、資料の持ち去りや非現地語のみによる記述は、現地からは「文化の剥奪」と見なされても仕方がない状況である。こうした反省に立って、今後の資料収集や情報化の指針を打ち立てることが必要であろう。また、集積された資料数や情報量が膨大化した事態に対処するドキュメンテーションの方法論も確立せねばならない。

上記<1>、<2>の問題の解決方法の一つは、「共同性」の徹底であろう。<1>に対しては、「一次収集、一次記述とその後の参照・活用との間での共同性」の推進である。記述や収集はいずれも現実の切り取りの一つに過ぎず客観性を謳うことは無理だと認め、その代わりに、どの時点でも、収集や記述の責任は署名によって明確化されるべきことを前提とする共同性である。それに伴って、知的所有権保護や認証制度を充実させる必要がある。

<2>に関しては、「現地と非現地との間の共同性」を追求することが解決法の一つである。例えば、資料は現地に残し、それに関する記述を共同で行い、その結果の共有を推進する、と言った方向性である。

こうした共同性を保証できる情報化の運営体制とシステム構成を考えることが、今後、文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する上で推進すべき方向性の一つである。いうならば「フォーラム型デジタル・アーカイブズ」である。これが実現すれば、次のような効果が得られるであろう。

### ● 専門家占有から共有・共創へ

民族学研究者のみが専門性を持つという傲慢が否定される今、現地研究者・現地関係者・異分野研究者・非専門家が集い合うフォーラム型共同作業と知の共有の中にこそ、互恵的な成果が得られる。

### ●研究倫理の転換

研究者が一方的に現地から文化剥奪を行ってきた従来の手法から、現地の知的所有権を保証する研究手法へ転換し、一方的な剥奪から、現地との共有・共同型の情報収集と人類共通の知的財産形成へ、という流れを確立する。

### ●共有による情報の高精度化

現地関係者との共同による現地情報処理方式、いわば「ポイント・オブ・フィールド方式」情報化によって、情報収集・処理が高品質化される。利用者の serendipity（発見能力）を発揮させる手法である。さらに、精度の低い過去の民族誌記録に対しても、それを現地にフィードバックすることにより、現地から情報が追加され情報の質が高まる。

### ●現地への文化的還元

過去に集積された情報の現地との共有は、失われた現地文化の復元・伝承・復興に寄与できる。特に、グローバル化の進行と共に、既存文化の急激な変化が進む一方で、自文化表象・主張の手段として、失われつつある文化の復興に努める集団も増加している現在、現地への研究成果還元のかなき大きなチャンネルとなり得る。

### ●知識データベース構築の中から人類智発見へ

実世界の情報の宝庫である民族誌データに、データマイニング手法を適用すれば、人類智を表現する概念モデルとしての、人類智オントロジーの構築の可能性もある。

### ●文理融合の効果

もっぱら民族学研究資料としてのみ捉えられてきた民族誌資料は、環境・開発・平和など世界的な問題解決の糸口となる情報を含んでいる。人文系の情報を社会科学系や自然系の分野の人々とも共有するなかから、人文系と理科系の学問融合への架け橋となる。

### (3) 生態史デジタル・アーカイブズと時空間軸

生態史研究を推進するうえで、文化資源のデジタル・アーカイブズを構築する意義は大きいだが、地域相互の関係性を、通時的に把握するためには、デジタル・アーカイブズを記述する基本要素として時空間軸を設定することが望ましい。すなわち、テキスト、画像、映像、音声等々、アーカイブズを構成する各マルチメディア・データを記述する基本項目として、時間値・空間値の2項をセットとして必須とすることである。言い換えれば、時空間値をデータベースの基本項目とすることにより、地図表現から各データへの展開、年表表現から各データへの展開、という二つの方向でのデータ提示が可能となり、それは、集積されたアーカイブズを共有化し、フォーラム型でデータ記述や修正を可能とする際のインタフェースとしても最適であるばかりでなく、様々な新しい知見を発見するうえでのインタフェースとしても極めて有効であろう。

こうした考えは、他の研究機関でも構想されており、例えば、カリフォルニア大学バークレイ校は、Electronic Cultural Atlas Initiative を立ち上げ、既存の文化資源データベース・サイトを全世界的に横断検索して、そこに含まれる時空間値を元に地図上に各データを展開するシステムを試作している。もっとも、時空間値を標準化することは極めて難しいことが指摘されており、未だに限定された地域のデータに対して試作されているに過ぎない段階である。全世界を対象とするならば、時間値についても、空間値についても、各地域・各時間における個別の表現形式（地名や暦年法）と標準表記との相互翻訳が可能で、地名シソーラス（地名自体も歴史的に変遷しており、時間軸と組み合わせねばならない）及びカレンダー・シソーラスが必須となり、その開発が容易ではないからである。さらには、多言語対応機能が必要となる。

本研究プロジェクトにおいては、地域と時間の両者に一定の限定条件を付し、実用的な時空間アーカイブズを構築することを狙いたい。壮大な全世界向けシステムを構想する前に、時空間アーカイブズの実用性と効果を示

したいためである。

年表、あるいは地図、両者の表現それぞれから、個々のデータへの参照や相互リンクをたどることのできるインタフェースを持ったアーカイブズ検索システムを用意することは、構築された既存アーカイブズからの発見・分析手段に有効であるばかりでなく、フィールドでのデータ収集や修正においても、威力を発揮し、特に、生態史という研究分野が持つ異分野融合の効果が発揮される事が期待できよう。こうしたインタフェースを備えたフィールドワーク・ツールを開発すれば、先に述べたポイント・オブ・フィールド方式によるフォーラム型のデータ収集が可能になるだろう。さらには完成したアーカイブズを目的別に編集して、時空間インタフェースを備えておけば、生態史あるいは広く地理・国際政治・歴史等に関する学習教材への展開が可能となるであろう。

#### (4) デジタル・アーカイブズ構築のための検討課題

文化資源をデジタル・アーカイブズ化して文化資源の共有を図るには、有形資源の蓄積とデジタルな無形資源の流通とを、有機的に結びつけるための課題を明らかにすることが肝要である。

##### ①領域専門アーキビスト

資源化の流れの最上流の段階から考えてみると、まず、生（なま）の資料や情報を、共有に耐えるレベルにまで整理・分類などの処理を施し、文化資源化するには、原資料や情報の領域ごとの特性に応じた適切な処理が必要である。そのためには、各フィールドに関する専門的知識、および、資料・情報の組織化に関する専門的知識、の両者が必要となる。これらを合わせ持ち、各領域ごとの専門性を備えた「領域専門アーキビスト」の養成が、今後ますます重要性を増すであろう。当然このアーキビストには、デジタル化の光と影に対する深い認識が求められる。しかし残念ながら、日本ではアーキビストの重要性に対する認識が低く、専門性の社会的位置づけも未だ低い。これを改めるには、いわば「アーキビスト市民権」を確立するための、制度的、法的な整備が必要となろう。

##### ②文化資源リテラシー

他方、民族学調査の場合のように、研究者がフィールド・ワーク途上で様々なメディアを用いて情報収集を行う際には、その後のアーカイブズ形成を見越した処理を施しておくことが望ましい。こうした資源化のためのノウハウやスキルおよび様々な資源利用のスキルの両者、すなわち「研究資源リテラシー」が、今後の人文社会科学研究者には求められる。このリテラシー向上を研究者に奨励するためには、資源化の作業が、正当な研究活動の一環として過不足なく評価される仕組みを導入することも検討されるべきである。

##### ③文化資源の長期保存と利用の両立を図る手法としてのデジタル化

いったん形成された研究資源の長期保存に対する認識が低いことも大きな問題である。有形資源のみならず、デジタル化された無形資源についても、長期保存体制の整備が必要である。ただし、デジタル化にのみ焦点が当たり、原資料の保存が軽視される事態に陥ってはならない。デジタル化は、保存と利用を両立させる手法と考えるべきである。特に貴重な資料については、劣化を考慮した保存管理の体制を保証するような、法的・予算的な制度の確立が求められる。原資料の所有者との関係についても、十分な制度設計が必要である。文化資源として貴重な資料については、例えば、寄託制度や補償金制度などを確立すべきであろう。

デジタル化された資源の長期保存における問題点は、長期保存に耐える記録媒体に関するものよりはむしろ、コンピュータ本体やOSの変化にある。これらの変化にあわせて、データ形式の異なるデータへの移行（data migration）を確実にできる体制が必須となる。

すなわち、有形資源、無形資源の両者について、長期的に「持続可能な保存管理」という視点が必須と言えよう。

##### ④データベースの個別多様性を担保する横断検索の手法

デジタル化された文化資源の流通に関連して、しばしば文字コードや検索手法等の標準化が語られる。しかしながら標準とは、あくまでもその時点での大勢に過ぎず、未来永劫続くことは保証されていないものであり、相互利用のための手段の一つである、と割り切る必要がある。個別データを標準に統一することはむしろ危険であり、個別領域でのデータの多様性を許容すること、および、複数の標準の間での inter-operability を確保すること、の二点を原則とするべきだろう。横断検索の手法に関する技術開発についても、ダブリン・コアや Z39.50 などの標準を活用する動きがあるが、ここでも、領域毎の個性・特殊性を確保しつつ、標準への翻訳

機能を付加する方向性が妥当と考える。

#### ⑤知的財産権の保護と共有のトレードオフ

文化資源の公開・流通は、知的財産の保全と切り離して扱うことはできない。財産権の処理を個々の機関が行うことにも限界がある。一種の知的財産権処理センター的な組織の整備も必要である。しかし、現在の大勢である著作権保護を強化するプロパテントの流れは、資源共有とは相容れない部分の多いことも事実である。共有を促進するためには、Public Domain の考え方に基づく制度の整備も、考慮すべきではないか。例えば、研究資源の Public Domain として公的に認定された機関は著作権の一部、例えば、公衆送信権、貴重資料に対するデジタル複製権などを、免責される制度などもあり得るだろう。

#### (5) 博物館ネットワーク

モノと情報班が扱うモノは、さまざまな博物館に分散しているため、モノの調査や分析・検討には、資料を所蔵する博物館との協力・連携が不可欠である。また、本研究の成果となるデータベースは、生態史プロジェクトによるフィールド調査のみならず、関係資料を所蔵する博物館との共同研究と協力連携の上ではじめて実現する成果でもあるため、関係博物館それぞれにとって、所蔵資料の新しい利活用にも寄与できるような、共有データベースとしての「生態誌アーカイブズ」の構築を構想している。

そのための準備作業として、関係博物館所蔵の標本資料の利活用を検討する共同研究会を、国立民族学博物館・文化資源研究センター（平成16年設置）をベースにして開催する。この共同研究会（久保正敏代表）では、以下の3つ問題に取り組んでいきたい。

- 1) 標本資料の収蔵経緯や調査収集時の背景等、モノの歴史的背景の調査・検討。
  - 2) 共同利活用のための博物館ネットワーク構築。
  - 3) 協力連携の成果でもある「生態誌アーカイブズ」の公開および共有に向けたガイドライン作成とその協議。
- （文責：久保正敏）

#### 3. さいごに

過去の調査資料とその蓄積が、今回のような枠組で活用されたことはいまだかつてない。従来の物質文化研究では、モノの個性がもつ意味が看過され、また、モノが、文化全体との関連や社会経済変化、あるいは生態環境との相互作用などの動態を読み解く契機として扱われてこなかったことによる。こうした背景を踏まえれば、モノと情報班の試みは、以上に述べた偏向を是正するだけでなく、新たなモノ研究の地平を開拓し、その大いなる展開を目指すものということができる。

なお、本報告以下にモノと情報班の個人報告がつづくが、そこには全体報告（モノと情報班の活動計画）へのコメントとして寄せられた、沖縄でのワーキング・セミナー参加者（講師）角南聡一郎氏、山田仁史氏からの寄稿も含まれる。また個人報告の執筆者それぞれが、方法論検討、対象コレクションの検討、事例検討・先行研究紹介の3点に目配りしつつ内容をまとめているが、3点のどこに力点を置いているかに応じて個人報告を大別し、以下の目次のような構成・順序に個人報告をまとめた。

#### 個別報告 目次

##### Ⅱ. 取扱い注意！－視点と方法

「東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性

－「モノと情報」班ワーキング・セミナーの活動を通して－ …… 清水郁郎

「物質文化情報化のための方法論再考」 …… 後藤 明

「モノはいかに保存・活用するべきか－近現代物質文化を題材に－」 …… 角南聡一郎「Diffusion をめぐって

－人類学と歴史について若干の補足－」 …… 山田仁史

##### Ⅲ. コレクションの背景を探る－資料解説と活用可能性

「天理参考館収蔵のラオス標本と天理教ラオス伝道について

－ 1965年～1978年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡－」・・・吉田裕彦

「生態誌アーカイブズ構築における原野農芸博物館コレクションの活用」・・・小島摩文

「黎明館川野資料の成立背景とその内容－漁具を中心に－」・・・橋村 修

IV. モノから見える世界の広がり－事例と解題

「建築研究の可能性－家屋・モノ・人間－」・・・清水郁郎

「ミャオ族の民族衣装が結ぶ文化－モノ研究の視点から－」・・・宮脇千絵

「竹の焼畑と稲作儀礼－竹林文化論への試み－」・・・川野和昭

#### 参考文献

安齋正人 1985 「補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号：55-101。

Claridge,G.F., Thanongsi Sorangkhou and Ian G. Baird 1997 Community Fisheries in Lao PDR: A Survey of Techniques and Issues. IUCN-The World Conservation Union, Vientiane, Lao PDR.:41-44.

原野農芸博物館 2000 『原野農芸博物館収蔵品目録 I－東南アジア大陸部』、財団法人奄美文化財団・原野農芸博物館。

伊藤幹治 1988 「日本の文化人類学の歩み」伊藤・米山編『文化人類学へのアプローチ』291-299。

Murdock, G.P., Ford,C. S., Hudson, A.E.,Kennedy, R.,Simmons, L.W.,Whiting,J.W.H

1982 Outline of Cultral Materials.(5<sup>th</sup> edition),Human Relations Area Files,INC.

西秋良宏 1999 「ニューギニアの弓矢」東京大学総合研究博物館ニュース『Ouroboros』第8号。

大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 1990 「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」『国立民族学博物館研究報告別冊』11号。

笹原亮二 2003 「量の可能性」(特集「モノ世界のフィールドワーク」)『民博通信』No.101：14-15。

佐藤健二 2002 「図を考える / 図で考える－形態資料学と「絵引き」」『文化資源学』第1号、文化資源学会：7-16。

澁澤敬三 1984 (1954) 「絵引きは作れぬものか」澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』、平凡社：viii - ix

田口理恵 2002 『ものづくりの人類学－インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』、風響社。

2003a 「マテリアル・ワールドとの格闘」(特集「モノ世界のフィールドワーク」)『民博通信』No.101：11-13。

2003b 「人類学の教科書・概説書リストについて－プロジェクト基礎資料の作成から」、『概説書の分析を通して見る戦後日本の民族学・文化人類学教育の再検討』(平成14年度公益信託渋沢民族学振興基金・民族学振興基金プロジェクト助成研究報告書)、TIGAR 研究会。

2004a 「岐阜・祖父江の竹箴 その2 箴羽のできるまで－製造の手順」『月刊染織α』No.274：37-40。

2004b 「博物館コレクションをコレクションする－モノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性－」、『Asian Studies Watching 論集～アジア学の最前線』(アジア研究情報 Gateway、東京大学東洋文化研究所 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html>)

東南アジア稲作民族文化総合調査団 1959 『メコン紀行：民族の源流をたずねて』読売新聞社。

梅棹忠夫 1979 『東南アジア紀行(上)(下)』中央公論新社。

山本利雄 1971 『メコンの渇き－ラオス巡回医療班の記録』講談社。

#### 注

<sup>1</sup> ここで述べる「目的と展望」は、関係博物館に対して資料に関する情報収集利用への協力をお願いするために作成した「研究計画書」の内容に即しつつ、修正、加筆したものである。「研究計画書」は、秋道智彌によるた

たき台をベースに、田口理恵がその骨子に沿いつつ、説明を補足し加筆修正を加えて全体を作成した。計画書の草稿をもとに、久保正敏、秋道、田口で内容を協議しつつ、完成させたものとなる。

<sup>2</sup> 生物資源研究のなかでも、生態人類学や民俗植（動）物学等の研究蓄積は、生物資源利用にみられる“土着の知識”の豊かさを明らかにしてくれる。ただしそこでは、生物資源の利用が有用性という観点から分析されるために、多様な用途が羅列的に提示されることになる。もっとも、モノと情報班のメンバーがこだわるのは、食料、薬、衣料用、建築用材、換金用等々で大きく括られる用途のより詳細な内容である。例えば、竹を割る、削る、編みあげる等々、採集した素材を加工し竹製品を作り上げていく一連の過程は、その作業段階ごとに、素材が内包する異なる特性を引き出し利用していくプロセスでもあるといえる [田口 2004a]。そうした、人の手で加工し道具として使ってきた経験のなかに見る、素材・対象がもつ複合的な特性の理解とそれらの利用に固執するからこそ、モノ研究として、天然物、生物資源ではない、“人工物 artefact”を対象にするのだということ強調したい。

<sup>3</sup> 本節に述べる内容一部の概略は、構成を少し変えまとめたものを、別紙にて発表している [田口 2004b]。

<sup>4</sup> これらの番号は標本管理上の整理番号で、一点一点に付された標本番号ではなく、例えば【02-026】ならば、02 は平成 2 年登録を意味し、026 はその年度内に、収集、購入、寄贈された一まとまりの標本群に、収蔵された順に付される整理番号である。

<sup>5</sup> この採集資料品目リストは、日本常民文化研究所にて閲覧させていただいた。

<sup>6</sup> 「ラオス国考古学調査」の「昭和 51 年度科学研究費補助金計画調査」より引用。野生動植物の採集、その道具・技術への興味関心は、フィールドノートおよび 1975 年 2 月 20 日付けで書かれた「ラオス調査所見、特に食物について」と題するエッセイ草稿からもうかがい知ることができる。

<sup>7</sup> 博物館所蔵資料の基礎的データの作成作業では、上記博物館の関係者をはじめ、さまざまな方にご協力をいただいた。特に、稲作調査団写真資料では、写真台帳の撮影作業に中尾知恵さん、佐々木万珠さんに、稲作写真資料の情報入力作業では、佐々木さん、吉村恵美子さんに、原野農芸博物館、天理参考館、川野コレクションの収蔵品リストの入力作業等では吉村さんに、ご迷惑をおかけするとともに、多大なるご協力をいただきました。今年度の作業を進めるにあたってご協力くださいました方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

<sup>8</sup> フィールド調査で出会うラオスの人々にとっての人生の節目や、暮らしぶり、生活環境や時代の変化のきっかけとして記憶し認識している出来事というものも当然あるだろう。それらを人々がどう語るのかを含めて、個別のライフヒストリーを集め、そこから、彼らにとっての転換期を再構成し、変化を辿るための時間軸を設定する方法もある。もっとも調査者の側が、聞き取りからそうした認識に接近する、あるいは分析し抽出するためには、当然ながら調査者の側に、聞き取り情報を比較対照し、俯瞰するための何がしかの基準が必要となる。モノと情報班が扱う博物館コレクションと関連資料は、そのための時間指標として便宜的に用いることができるだろう。

<sup>9</sup> 第一次稲作調査団資料ではなく、日本民族学協会コレクション全体として考えると、そこには戦前のアチックミュージアムの活動の遺産から、昭和 17 年に財団法人日本民族学協会の設立以前の日本民族学会附属民族学研究所時代の収集品、戦後の日本民族学協会による諸活動の遺産が含まれる。同コレクションは、さらに複雑で多様な履歴を抱え込んだモノのコレクションとなる。

<sup>10</sup> 海外学術調査『メナム河上流（メーピン河）地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査』（白鳥芳郎代表）。

<sup>11</sup> 70 年代の天理教巡回医療団派遣やその当時、および 80 年代後半以降の日本政府によるラオスへの医療援助との関わりなど。それ以前では、東南アジア稲作民族文化総合調査団メンバーが、1957 年当時プロベン高原開発のからみでパクソンにて活躍していた、フィリピンのオペレーション・ブラザーフッドの医師団の動向を書き留めている [東南アジア稲作民族文化総合調査団編 1959：112、浅井、河部、松本他 1959：128]。このオペレーション・ブラザーフッドは 1957 年から 1975 年まで、ラオスにて医療、技術、教育面支援のために活動していた。1965 年までに約 900 人のフィリピン人スタッフが、ラオスに滞在して活躍していたという。

<sup>12</sup> 道具の検討会（漁具の会）における秋道智彌の報告「モノとしての漁具研究の可能性」。

「モノと情報」班 C

東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性  
—「モノと情報」班ワーキング・セミナーの活動を通して—

清水郁郎（総合地球環境学研究所・技術補佐員）

キーワード：東南アジア大陸部、モノ、移住、国境、キリスト教（改宗）

調査期間と場所：国内、2003年9月～現在

**Possibility of the Study on Things Viewed from the Context of Mainland Southeast Asian Societies:  
Preliminary Report from “Material Culture and Digital Archives” Research Group’s Working Seminar**

**Ikuro SHIMIZU (Research Institute for Humanity and Nature, Technical Assistant)**

Keywords: Mainland Southeast Asia, Things, Migration, Border, Conversion, especially to Christianity

Research site and period: Domestic, 9/2003-

要旨：昨年度おこなわれた「モノと情報」班の第4回ワーキング・セミナーでは、東南アジア大陸部社会に特徴的な事象を人類学的、民族誌的に踏まえたモノ研究の可能性が議論された。この報告書は、そこで議論された諸問題を再度整理し、同地域におけるモノ研究の今後の方向性について検討するものである。

1. はじめに

2003年度に立ち上がった「モノと情報」班（以下モノ班）では、これまでに「道具の検討会」と題するワーキング・セミナーを開催してきた。とくにその第4回目におこなわれたセミナーでは、東南アジア大陸部の諸社会においてモノの調査、研究をおこなう場合に有益な視点が得られた。本稿の目的は、このセミナーがどのような問題意識のもとにおこなわれたのかを報告するとともに、そこで論点となった諸問題を再度提起、検討し、ラオスでの現地調査においてどのように活用できるかを探ることである。

2. ワーキング・セミナー

1) 「道具の検討会」の目的<sup>1</sup>

モノ班が立ち上がった当初、モノ班班員のあいだでは、①東南アジア大陸部の物質文化に関する共通理解を構築すること、②個々の班員が将来、東南アジア大陸部で調査活動をおこなうことを想定して、当該地域の物質文化をとらえる視点を獲得することの必要性が議論された。それは、モノ班の活動のひとつが、日本国内各地の博物館に収蔵されている東南アジア関係の収蔵資料の把握と分析であることからして<sup>2</sup>、必然であった。「道具の検討会」と題するワーキング・セミナーは、こうした問題意識からはじめられた。そして、このセミナーは、今日までにモノ班の活動の重要な一部となっている。セミナーでは、当該地域の多様な物質文化のうち、とくに生業に直接関係する道具としてカゴ、刃物、漁具、狩猟具を取り上げ、そのそれぞれに関して議論されてきた<sup>3</sup>。このセミナーは、当該の道具に関する専門的な知識を有する研究者を招いてレクチャーをしてもらうという形式ですすめられた。また、会によっては、国立民族学博物館に収蔵されたラオス資料の調査から班員みずからが得た知見を発表し、地球研内外の研究者と意見を交換したり議論をしたりするというかたちをとった。

本稿は、これらのワーキング・セミナーのうち、とくに第4回における議論を踏まえて、東南アジア大陸部におけるモノ研究の可能性を探るものである。

## 2) 第4回目セミナーの位置づけ

本稿で下敷きとする第4回目のワーキング・セミナーは、その位置づけが他の会とは異なる。第4回目に招聘したのは、特定のモノに関する専門家ではなく、東南アジア大陸部の山地や平地の諸社会においてフィールドワークをおこなってきた人類学者である。実際のセミナーでは、個々のフィールドの事例（チェンライのラフ、雲南のハニ＝アカ、タイ中部のモン）に即してその集団の物質文化の特徴を紹介してもらい、あわせて物質文化をとらえる視点を提示してもらった。

このセミナーで人類学者を招いた理由は複数ある。ひとつは、モノ班がおこなっていた博物館の収藏品調査に関係する。先に述べたように、モノ班の活動のひとつに、国立民族学博物館をはじめ、奄美大島の原野農芸博物館や鹿児島県歴史資料センター黎明館に収蔵されている資料を調査し、共有可能なデジタル・アーカイブをつくることがある。これらの収蔵資料を調べる過程で、大陸部山地社会で収集された資料がかなりの数を占めていることがあきらかになった。モノを理解する前提として、これらの社会について知見を得ることが必然的に要求されたわけである。また、同時に、将来的な調査の展開を予測して、山地社会への理解、低地の人びとと山地の人びとの社会経済的諸関係を視野に入れる必要性も想起された。

もうひとつの理由は、中心的にワーキング・セミナーをおこなってきた班員たちに共有された問題意識による。筆者を含む班員たちは、モノそのものの詳細な情報を知ることとは別に、モノを分析することからいかに社会の様態やその背景にある文化的事象にアプローチするかを問題として立てていた。モノの分析から社会にアプローチし、そこでの人びとの生活を理解する筋道を得ようとしたわけである。そう考えるならば、第4回目は、フィールドで生起する「現実」とモノとを結びつける思考訓練の場であり、なおかつフィールドワークの想像力を獲得するための場でもあったといえるだろう。

## 3. モノの位相：地域社会の文脈からの把握

第4回目セミナーの問題意識は、民族誌的な事象を将来の調査においてどこまで射程に入れたらいいかという問題につながる。これは、東南アジア大陸部に限らずいえることだが、ある地域において調査研究をおこなう場合、背景知識として、その地域なり社会、集団、個々人の諸活動について概略を知れば、より多様な切り口を獲得できることは間違いない。その素材となるのが民族誌的記述である。

民族誌的な事象とからめてモノをみるという発想は、いってみればモノの背景を微視的に探求することにほかならない。モノそのものを詳細に調べると同時に、モノが存在する社会的文脈を読み取ることもモノ班の活動においては重要である。モノそれ自体の詳細な検討や伝播論のような鳥瞰的な視点からのモノの位置づけに加えて、モノを扱う人びとがどういう人びとなのか、どのような背景を持って生きているのか、モノをどのようなどきにいかにか使うのかという、まさにモノと人の相互関係を射程に入れようというわけである。

さて、以上のような問題意識にもとづいてこれからいくつかの論点を検討する。ここでは、第4回ワーキングに沿いながら問題を整理することになる。東南アジア大陸部にはさまざまな社会があり、個々の社会に生きる人びとの文化的背景も多様だが、現在の広く共有された問題意識に即していえば、自律して閉じた社会は考えられないし、そこにいる人びとも静態的ではない。国家との関係や他集団との関係を常に想定しなければならないし、モノもそれを踏まえて布置させて考えるべきである。こうした観点から、移住、国境の越境、エスニックな境界の越境、改宗またはキリスト教の受容という問題系を設定して、モノの様態を考察してみた。これらの問題系は、当該地域の人びとが置かれた現在の状況とも密接に関連する。モノを社会とそこに生きる人びとの諸活動との関連からとらえることを目的とするモノ班の活動にとって、重要な意味を持つだろう。

### 1) 移住（マイグレーション）

歴史的にみれば、大なり小なり大陸部のほとんどすべての社会が移住を経験している。現在は低地に政体を組織して国家を形成する集団も、移動のはてに現在の場所に居住しはじめた。ひとつの集団の移動は、既居住集団に多大な影響をもたらした。たとえば、現在のタイにおける主要な集団であるタイ系の人びとは中国の南部から南下したが、その影響により、先住の諸集団は周縁に追いやられたり同化したりしていった。この例として

は、ラワやモンがいる。現在はタイ北部の山地に居住するラワは、7～8世紀頃にタイ系集団が移動してくるまでは低地に住んでいた。しかし、チェンマイを中心とするランナータイ王国の勃興により周縁部の山地に押しやられた<sup>4</sup>。モンもまた、タイ系諸集団の南下前には、チャオプラヤー川流域にドヴァーラヴァティ王国を、北部のランプーンにハリブンチャイ王国を興していた。前者はどこに所在したのかいまだに明確になっていないが、後者はランナータイに滅ぼされた。現在、その末裔の人びとは、タイの政体に飲み込まれ、タイ社会に同化している。

メコン河やチャオプラヤー河流域に展開して覇権を争った諸政体は、当初からその領域を明確にしていたわけではない。当時の大陸部では、「ムアン」と呼ばれる小規模で自律的な政治・地理単位が各地方にあり、それらが衝突を繰り返していた<sup>5</sup>。そして、クメール王朝を滅ぼしたスコータイのように、覇権を握ったムアンが在来の政体を駆逐してその領土を拡大し、王国を建立していった。こうしたムアンには中心となる王都があり政治権力は存在したが〔石井他 2001: 405〕、近代国家のように明確な領域観はなく、またその具現である国境は不明瞭のままだった。

移住は大きくは大陸部の巨視的変遷と関連するが、近年においても移住を経験した人びとが大陸部には数多くいる。この場合の移住にはいくつかの要因が考えられ、また、当の集団が大陸部においてどのような立場にあったかということも移住の特質と関係してくる。たとえば、移住が積極的におこなわれたのかそれとも消極的あるいは強制的におこなわれたのかということも考慮しなければならない。大陸部の山地民は、しばしば、農地を求めて南下を繰り返して移動してきたとみなされる。この場合は、移動が積極的におこなわれたというべきだろう。また、戦争のような人員の大規模な移動をとまなう場合にも、既居住者はゆるやかに周縁に押しやられるのか、それともひとつの地域の人員がそっくり入れ替わるのかということや、移動の後に在来の集団と後着の集団とのあいだに友好的に貢納関係が結ばれるのか、それとも強権的な支配がおこなわれるのかといった違いも考慮しておくべきだろう。吉野が報告するタイ北部のミエンは、他者の戦闘に巻き込まれるかたちで移住を余儀なくされた事例である〔吉野 1991〕<sup>6</sup>。さらに歴史をさかのぼれば、中国におけるラフのように、中央政権に対する反乱とその敗北から逃走を余儀なくされたという事例もある〔片岡: 1998, 2003a〕。

本稿では、このように移住という多様な現象とモノとの関連を、近年に移住を経験した人びとの事例からみていく。具体的には、アカやミエンのようないわゆる山地民と呼ばれる人びとである。東南アジア大陸部の山地民は、その多くが中国南部を故地として、ラオスやタイ、ミャンマー（旧ビルマ）に移住してきた。現在でも、ゆるやかになったとはいえその南漸運動は続いている。

白鳥や常見は、北タイのヤオの村落における調査において、彼、彼女らがどのような理由で移住を繰り返してきたのかを詳しく報告している。それによれば、①耕作地の枯渇、②人口の増加、③疫病の流行、④異種の集団の侵入と占拠、⑤村落内の不和から一部の家族が離脱する、などが移住の理由としてあげられている〔白鳥 1978: 67-97; 常見 1980: 186〕。「山地民」の内実は多様であり、その移動の経路も多様であるが、これらの指摘は異なる言語集団に属する山地民にも、かなりの部分当てはまると考えてよい。たとえば、北タイのアカの村落における筆者の調査経験によれば、村人たちはこのうちの④に当てはまる出来事をきっかけにして移住をはじめた。この集団は、もともとはミャンマーのシャン州にある山地にかなり長いあいだ住んでいた。しかし、中国国民党軍やミャンマー軍などの闘争に巻き込まれ、やむを得ず村落を放棄して離散した。そして、数年ごとに別々の村を経由しながら南下を続け、最終的にタイに越境したのは20数年前である。この移動の過程で、①、②、③および⑤が複合的におこっている。

ここで移住一般の特質を、モノとからめて考えてみる。移住は、人びとの多大な労力を要する。また、山地における移動では、基本的に人員の数も限られ、また肉体的な労力を多大に費やすものだから、多くの所有物をつぎの移住先に運ぶことはできない。そこで、移住を契機にあるものは捨てられたり、移住先で新たに購入されたり、作りだされたりすることが考えられる。移住先で他集団と隣接して暮らすならば、そこからの影響を受けるといえる可能性がある。ワーキング・セミナーでは、片岡が、北タイのラフの事例をもとにこの点を指摘した。北タイのラフには、数多くのサブ・グループがあり、そのサブ・グループごとに移住の経路もタイへの流入過程も異なる。当然、移住先における他集団とのあいだに、言語や物質文化などの多様な文化接触がある。たとえば、ミャンマー経由でタイに流入したラフ・ニ（赤ラフ）の場合、そもそも中国での改土帰流前<sup>7</sup>に中国からの南下

をはじめた。そして、タイに流入するまではシャンなどのタイ系の集団と隣接して暮らすことが多かったので、シャンの影響が強いとされる。一方、ラフ・ナ（黒ラフ）の場合は、改土帰流後に中国を脱出し、戦後、国民党軍とともにタイに流入したので、一定の漢化を受けていると考えられる。こうした移動の経験の違いが、モノに具現される。ひとつの例が、食事におけるレンゲと箸の違いである。ラフ・ニはレンゲを使い、ラフ・ナは箸を使うことが多いことを、片岡は報告している [片岡 2003b]。

ラフのこの事例は、皮相には飲食の道具の違いにしか見えない事象が、移住という経験と関連していることを端的に示すものである。そして、食事の作法や食されるものの違いにまで、両者の違いは拡大しているかもしれない。レンゲや箸という単一の道具を道具として詳細に探ることからは、こうした視点は生まれない。サブ・グループの存在やその移動の過程とあわせてモノを並置して、それを使う人びとや集団の様態にアプローチしたとき、モノへの新たな視点が生まれる可能性が開かれるのである。

## 2) 越境 (トランス・ボーダー)

移住とも深く関係するが、越境もまた大陸部を特徴づける事象のひとつであり、モノを社会との関連で考えるうえで視野に入れておくべきだろう。この越境という現象を、ワーキング・セミナーではふたつの視点から議論した。ひとつは、文字通りに国境を越えておこなわれる交易などの諸活動であり、もうひとつは、エスニックな境界の越境という局面において、モノがどのように変化するかという問題である。

前者は、近年になって提唱されたいわゆる「国境の人類学」とも深く関連するが [Wijeyewardene 1990; 綾部 1993, 1998]、モノ研究の文脈では、国境をまたいでモノがどのように流通、交易、売買されるのかがとくに問題になるし<sup>8</sup>、資源の違いを利用した商売の可能性という点で、人びとによる国境の「戦略的」活用も考えられる<sup>9</sup>。

後者は、ある種のモノがエスニック・アイデンティティ<sup>10</sup>と結びついていると仮定したら、エスニックな境界が揺らぐとき、そのモノはどのように変化したり、モノの使い方が変化したりするかを探ろうという視点である。たとえば山地社会の人びとが経済活動の拡大などで低地社会の経済活動に参入したり、強制的に移住させられたりしたことで、モノがどのように変わるかという問題が考えられる。また、集団内部において、サブ・グループ間の差異を識別するさいに、モノがどのように機能するかという問題にも展開できるだろう<sup>11</sup>。

### (1) 国境

東南アジア大陸部に限らず、一般に、国境は所与のものではない [cf. Thongchai Winichakul 1994]。それをもっとも明確に認識できる場所のひとつに北タイの山地がある。中央 (政府) の統制からは距離をおき、近年まで取り立てて強く国家に統合されてこなかった社会である。北タイの山地では、現在でも、ミャンマーからの越境者は後を絶たない。たとえば、アカの村落では、ミャンマーや中国の雲南省からの移住者に会うことがある。彼らは、仕事を求めて越境してきた若者であったり、ミャンマーからさまざまな理由により越境してきた家族であったりする。そして、既存のアカの村落に住み着く。かつてミャンマーのシャン州で生き別れた親類が、タイ側の親類の家を拠点にして長期間滞在することもある。そのあいだに、ミャンマーや中国のモノを北タイの山地で売るわけである。

アカに限らず、こうした越境をともなう経済活動は今にはじまったことではなく、昔からおこなわれていた。たとえば、雲南のイスラム教徒の漢人 (Yunnanese Muslim) は、19世紀までに、大陸部のかなり広い範囲で、隊商を組んで商売をしていた [Hill 1983]。こうした国境を越えてくるモノとその売買、それに従事する商人やモノを購入する人びとが、この場合の考察対象になるだろう。ここでは、フィールドにおける筆者の知見と照らし合わせてみよう。

北タイのアカの村落では、先述のように、ミャンマーから商売に来るアカがいる。そこで売られるのは、山刀に代表される刃物、アクセサリーやビーズ、銀製品、衣類などの布製品、中国やミャンマー産の膏薬や漢方薬などが主である。市街の市場でも山刀は売られているが、仕上げが粗いと評される。たとえば柄の部分は竹製だが、芯が中空になっている。また、刃の部分と柄の部分の双方が粗雑なつくりをしていると語られる。山地の製品は、一振りが120～200パーツほどだから、値段は市場のものと同じく変わらない。しかし、市場のものに比

べて丁寧につくりこまれている。市場品と同じく竹の柄を使うが、表面が丁寧に加工されているし、中空ではなく繊維が密に詰まった部分を使っている。また、大きな違いは、市場品は鞆がついていないが、山地の品は鞆つきである。村人のほとんどは、こうした理由から商売人が持ち込んだ刃物を購入する。

銀製品は、おもに女性の装身具や頭飾りなどだが、タイの市場で購入することはほとんどできない。アカの村落には従来、銀製品の製作を手がける細工師が少なからずいたというが、現在ではまれである。そうしたこともあって、女性にとっては、ミャンマーから越境してくる商売人の存在は貴重である<sup>12</sup>。

## (2) エスニシティ

大陸部には、それぞれに異なる文化的背景を持つ多様な集団が隣接して生きている。これもひとつの特徴といえるだろう。これに関連して、この地域の人類学的研究で議論されてきた問題のひとつにエスニックな境界とその越境や揺れがある。その嚆矢となるリーチが描いたのは、ミャンマーのカチンにおける動態であったし [リーチ 1995]、北タイの山地では、しばしばエスニシティを使いこなす人びとがみられる [綾部 1999]。そのようなエスニックな境界とモノとの関係について、ある集団が他の集団に隣接したり、あるいは完全に包摂されたりしたときの事例から考えることが可能だろう。

ワーキング・セミナーでは、ラフにおいて宗教的なモノ（儀礼道具や儀礼小屋）に漢人の影響がいかにあられるかということが話された。ラフには、一般にトポーと呼ばれるシャーマンがいる。このシャーマンがおこなう宗教儀礼の中では、多様な超自然的存在について言及される。その中には、漢人出自と考えられる存在がいる。病気治療の場などで、このような存在から託宣を得るわけである。いわば、ラフにとっては、超自然的な力と漢人の表象が結びついているのである。儀礼的行為という特殊な場合の他に、現実にラフの日常を構成するモノに関しても、同じように漢人からの影響がみられる可能性がある。

稲村は、エスニックな境界とモノとの関係について、大陸部とくに中国の「ハニ＝アカ」<sup>13</sup> 集団に関する研究から報告している。稲村によれば、「土司制度」<sup>14</sup> をめぐるハニ＝アカ集団の特徴とモノ（家屋など）の性向とのあいだには関係が認められる [稲村 2003]。たとえば、地域によって土司がどのような集団を志向するかには違いがある。紅河のハニでは土司は漢族を志向する。また、元陽や緑春のハニでは土司は「イ語系」を、西双版纳のアカでは土司はタイ系を志向するという。そして、たとえば紅河のハニでは、土司の家屋は漢族のそのように地床式で建てられるという特徴がある。家屋は、しばしばそこに住む人びとの権力認識と結びつけられ、権力を表象する装置となるが<sup>15</sup>、中国においてもそのような事例がみられるわけである。

ワーキング・セミナーでは、稲村が提示した事例の他に、山地民の低地社会（タイ社会）への参入や山地での異集団間での婚姻（アカとヤオ、雲南系中国人と山地民）などの局面とモノの様態があわせて議論された<sup>16</sup>。この他に、中国の少数民族における漢化の影響<sup>17</sup> や、山地民が職を求めたり低地での居住を目指して都市や都市部近郊に移住したりする局面において、モノはどのように変化するのかといった<sup>18</sup>、現代的な状況にも目配りしながらモノの分析をすすめる必要があるだろう。

## 3) キリスト教の受容と改宗（コンバージョン）

ある種の現象をモノの変化からとらえることは、モノ班の活動においてスリリングな議論をもたらすに違いない。言語によって表現される以上のことが表現される可能性があるし、なによりも人びとの日常は言語と同等あるいはそれ以上にモノによって組織されているからだ。冒頭に述べたように、東南アジア大陸部には、文化的背景の異なる多様な人びとが、それぞれに社会を組織して生きている。そうした社会組織のひとつの「動力」が宗教や、広く「民族宗教」とくられる在来の観念であることは間違いない。最後の問題系は、宗教の変化、具体的には在来の宗教的事象からキリスト教や仏教などの世界宗教への「改宗」やその受容<sup>19</sup>、または共産化のような国家の政治体制の変化により宗教または宗教的事象が変化したり放棄されたりする局面で、モノがどう変わるかということである。ただし、これを知るためには、当該社会における在来の宗教または宗教的事象がどのようなものであったのか、人びとの社会生活が改宗をへてどのように変わったのかを詳細に知っておく必要があることはいうまでもない。ここではその点を認識したうえで、ひとつの例として大陸部の山地社会において、宗教的事象の変化がモノと人の在来の関係にどのように影響するのかを述べる。

山地社会における世界宗教への改宗またはその受容という現象は、一見して明確に切り取れるわけでも直接に観察できるものでもない。その宗教の教義を詳細に知らなくても、人びとは容易にその宗教の信者になることができる。また、ある日を境にたとえばキリスト教徒になったとしても、その日から当人の生活が大きく変化するというものでもない。それは、日々の暮らしの中で徐々に進行していく。そして、人びとの語りの中にその兆候がさほどみられないという反面、人びとの生活を構成するさまざまなモノにその変化の兆しを求めることが、場合によっては可能となる。

北タイのアカの村落では、近年、キリスト教徒になるものが多い。しかし、彼、彼女らがキリスト教の教義や知識を知悉しているわけではない。彼、彼女らがキリスト教徒であることを理解するには、キリスト教徒になることによって集合表象的なものからどのようにして解き放たれるかという視点が必要である。ひとつの例として家屋について述べる。

慣習的な世界に生きるアカはロウチと自称する。ロウチにとって、自分の祖先や、その上位世代にいてアカを生み出した始祖である超自然的存在との紐帯は非常に重要である。現世での自身の出自を保証する、すなわち自身の存在の根拠となるものだからである [清水 2002, 2003, 2004]。アカは、この紐帯を維持するために、祖先をまつる祭壇を大切に扱う。また、主食である稲の育成の折々に祖先祭祀をする。家屋は、祭壇が設置される場所であり、祖先祭祀がおこなわれる場でもある。家屋は、アカにとって祖先との紐帯を維持するうえで重要であり、祖先から伝えられた知識が具体的なかたちをとって表出していなければならない。それゆえに家屋は一定の形式を持っているし、祖先から伝えられた慣習的な知識に沿って家屋での日々の生活を送るわけである。

キリスト教徒になることは、祖先との紐帯を放棄することである。だから、キリスト教徒になるための手続きは、家屋から祭壇を取り出し、それを捨てていくという儀礼的行為からはじめられる。しかし、その後は、日曜日に礼拝に行くことや年に数回キリスト教の儀礼をこなすということの他に、生活上に取り立てて目立つ変化はない。ところが、彼、彼女らが家屋を新築したり改修したりするときに、キリスト教徒であることの証左が明確にあらわれる。

キリスト教徒にとっては、祖先との紐帯はなんら意味を持たないのだから、家屋とそこでの生活の形式が保持される必要はない。キリスト教徒がロウチのそれに比べて極めて自由に家屋をつくるのはそのためである。たとえば、ロウチの家屋の屋内は一枚の壁によって二分されており、男女はそれぞれ、ひとつの居室でまとまって寝食をおこなう。しかし、キリスト教徒の家屋では、壁が取り払われ一室空間となり、男女同衾も可能になる。

ロウチの慣習的知識とは、儀礼や日常生活の多様な活動だけでなく、リネージ分節や婚姻規則、姻戚の役割にまで関与するいわば社会文化的なサブシステムである。北タイにおいて、キリスト教徒のアカの村落で調査したカメラーは、この慣習的知識とキリスト教との「交換 (replacement)」により、どのような変化がアカのあいだに起きたのかを検証した [Kammerer 1990a, 1990b]。カメラーによれば、プロテスタント派の信者のあいだでは、祖先祭祀や米をめぐる儀礼、「母方の兄弟」が関与するような儀礼のすべてが放棄されていた。一方、カトリックの信者のあいだでは、祖先祭祀はおこなわれないが、「母方の兄弟」が関与するいくつかの儀礼は残されていた [Kammerer 1990b: 335]。また、アカにはもともと、婚姻の規則に関係し、なおかつ系譜上で分枝して新たな下位集団をつくるいわゆる「サブリネージ」があるが、カメラーによれば、キリスト教徒のあいだでは、ロウチのようなサブリネージの機能が失われつつある [ibid.: 333]。さらに、結婚において結ばれる妻の与え手と妻の受け手の関係、すなわち姻戚関係も変化する。

ロウチのあいだでは、「母方の兄弟」に代表される姻戚は、「幸福」をもたらしたり災厄のときに加護を求めたりする対象であり、特別な意味を持った関係である。カメラーは、こうした姻戚関係は、少なくともプロテスタント派の信者のあいだではすでに構築されなくなっていることを報告する [Kammerer 1990b: 334]。筆者が調査をおこなった北タイのアカの村落では、プロテスタント派の信者とカトリックの信者の双方とも、ロウチがおこなう祖先祭祀や全村的な祭礼、治療儀礼、結婚式や葬式などは完全におこなわない。つまり、姻戚との関係を確認しうる儀礼の機会はずでに存在しなくなっている。従来、姻戚関係は、おもに儀礼的な諸行為と関連してきたが、こうした関係の消滅により、儀礼において使用されてきたモノ（「母方のオジ」のために用意する特別な食器やプレゼント）などにも変化がみられることになる。

改宗という現象のこのようなモノへの発現が、他の集団や社会においてみられるのだろうか。改宗において

捨てられるモノや使われなくなるモノ、その逆に、改宗後に新たに使われたりつくられたりするモノはなんだろう。もっとも最初に想起されるのは、アカの事例にみられるような儀礼的行為に使われるモノ＝道具の変化だろう。たとえば、従来使用されていた儀礼道具が放棄される代わりに、キリスト教の儀礼道具が揃えられることが考えられる。また、聖書のように、従来みられなかったモノが使われるようになるということも考えられるだろう。

#### 4. おわりに：総括

本稿では、「東南アジア」や「民族集団」への還元という陥穽にとらわれることなく、社会とそこに今生きている人びとのモノとの関係にアプローチする視点を提示しようと試みた。そのひとつは、モノが使われる社会やそれを使う集団の背景を動的に把握する視点と言い換えることができる。その集団がどのような歴史をたどってきたか、国家がその集団にどのようにかかわってきたのかという視点である。また、たとえばタイにおける国民統合の過程、ラオスにおける国家成立の歴史、中国における「民族識別工作」などと、集団がその中でどのような立場におり、どのように扱われてきたのかを把握することが肝要になる。

もうひとつの重要な点は、人びとや集団への微細な視点、換言すれば民族誌的な視点の必要性である。動態的な問題系とは逆のベクトルになるが、対象となる集団に関する民族誌的な理解が、その集団のモノを理解するうえで大きな意味を持つことは、ワーキング・セミナーから示された。

最後に、人びとの「語り」を中心としたモノ研究の可能性について述べる。これは、モノそのものの物質的な理解に加えて、人びとの諸行為や社会をモノを通して理解しようと試みようとする場合には避けては通れない問題であるし、現地調査において、現地の人びとがモノをどのように考え、解釈しているのかをとらえるさいのテクニカルな部分とも関連する。タイのモン社会を事例として、大島は、この問題を認識論的に対象化した [大島2003]。大島によれば、人類学における従来のモノ研究では、モノに対する3つの視点がある。①モノそのものを持つ客観的事実＝語るモノ、②モノと生活している人びとの語り＝語られるモノその1、③モノに対する研究者の分析視点＝語られるモノその2、という3つである。従来のモノ研究にみられるアプローチと問題点は、視点①による理論化において視点③が入り込むために、科学的客観性が希薄になる可能性があること、③において時代相や研究者の置かれた社会的文脈も考慮する必要があること、視点②+③の例としての象徴分析において②と③が混同されること、②そのものが時代相や社会的文脈の変化に伴い変わる可能性があることとまとめられる。これらのうち、とくに②に関連していえば、フィールドワークでは、ひとつのモノについても必ずしも一様に語られるわけではないことが予想される。人びとの「語り」という本質的に多様なものを対象とする場合の宿命ということもできるが、現地調査では、モノと生活している人びとの語り自体に多様性（多声性）があることにも留意していかなければならないだろう。

Summary: In November, last year, “Material Culture and Digital Archives” Research Group’s 4<sup>th</sup> working seminar was held at RIHN. In that seminar, possibility of the study on things in social contexts of Mainland Southeast Asia was argued from anthropological and ethnographical points of view. This paper picks the subjects that were argued there up again and examine the future directionality of field research in the area.

## 文献

## 綾部真雄

- 1993 「タイ北部山地民社会と平地政体—〈国境〉の成熟へ呼応した〈チャオ・カオ〉の形成—」『社会人類学年報』19:65-90。
- 1998 「国境と少数民族—タイ北部リス族における移住と国境認識—」『東南アジア研究』35(4): 171-196。
- 1999 「民族への帰属とクラン・イデオロギー—リスであることの論理的整合性をめぐって—」『社会人類学年報』25: 55-87。

## Carsten, J. and S. Hugh-Jones

- 1995 Introduction: About the House-Levi-Strauss and Beyond, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.

## Chupinit Kesmanee

- 1988 Hill Tribe Relocation Policy in Thailand, *Cultural Survival* 12(4): 2-6.

## Elawat Chandraprasert

- 1997 The Impact of Development on the Hilltribes of Thailand, in D. McCaskill and K. Kampe (eds.), *Development or Domestication? Indigenous Peoples of Southeast Asia*, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 83-96.

## Eudey, A. A.

- 1989 14 April 1986: Eviction Orders to the Hmong of Huai Yew Yee Village, Huai Kha Khaeng Wildlife Sanctuary, Thailand, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), *Hill Tribes Today*, Bangkok: White Lotus, pp. 249-258.

## 速水洋子

- 1992 「カレン族における周縁の力と宗教・社会変動—19世紀ビルマから今日のタイまで—」『民族学研究』57(3): 271-296。
- 1994 「北タイ山地における仏教布教プロジェクト：あるカレン族村落群の事例」『東南アジア研究』32(2): 231-250。

## ハイネ＝ゲルデルン, R.

- 1972 「東南アジアにおける国家と王権の観念」大林太良訳 大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店, pp. 263-290。

## Hill, A. M.

- 1983 The Yunnanese: Overland Chinese in Northern Thailand, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), *Highlanders of Thailand*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 123-134.

## 星野龍夫

- 1990『濁流と満月 タイ民族史への招待』弘文堂。

## 稲村務

- 1994 『ハニ族（アカ族）の動態的民族誌への試論—雲南省西双版纳のハニ族の村落から—』筑波大学地域研究科修士論文。
- 1996a 『「アカザン」の構築—北タイ・ビルマ・中国における「アカ種族」の文化の実体化—』筑波大学博士課程歴史・人類学研究科中間評価論文。
- 1996b 「アカ族・ハニ族・アイニ族—中国雲南省西双版纳州における『アカ種族』の国民統合過程—」『東南アジア—歴史と文化—』25: 58-82。
- 2003『ハニとアカ』『モノと情報』班第4回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』討論資料, 11月26日, 総合地球環境学研究所。

## 石井米雄

1991 『タイ仏教入門』 めこん。

石井他監修

2001 『東南アジアを知る事典』 平凡社。

Kammerer, C. A.

1988 Of Labels and Laws: Thailand's Resettlement and Repatriation Policies, *Cultural Survival* 12(4): 7-12.

1990a Customs and Christian Conversion among Akha: Highlanders of Burma and Thailand, *American Ethnologist* 17: 277-291.

1990b Transformations in Kinship among Akha (Hani) Christians of Highland Northern Thailand, *Proceedings of the 4th International Conference on Thai Studies* 1, Kunming, pp. 330-338.

1996a Discarding the Basket: The Reinterpretation of Tradition by Akha Christians of Northern Thailand, *Journal of Southeast Asian Studies* 27(2): 320-333.

1996b Begging for Blessing among Akha Highlanders of Northern Thailand, in C. A. Kammerer and N. Tannenbaum (eds.), *Merit and Blessing in Mainland Southeast Asia in Comparative Perspective*, Connecticut: Yale University Southeast Asia Studies, pp. 79-97.

片岡樹

1998 「東南アジアにおける〈失われた本〉伝説とキリスト教徒への集団改宗—上ビルマのラフ布教の事例を中心に—」『アジア・アフリカ言語文化研究』 56: 141-155。

2003a 「悪魔の神義論—タイ国の山地民ラフにおけるキリスト教と土着精霊—」『民族学研究』 68(1): 1-22。

2003b 『タイ国のラフ文化についての背景知識』 「モノと情報」 班第4回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』 討論資料, 11月26日, 総合地球環境学研究所。

Keen, F. G. B.

1983 Land Use, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), *Highlanders of Thailand*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 293-306.

Keyes, C. F.

1971 Buddhism and National Integration in Thailand, *Journal of Asian Studies* 30(3): 551-567.

リーチ, E.

1995 『高地ビルマの政治大系』 弘文堂。

McKinnon, J.

1983 Behind and Ahead, in J. McKinnon and Wanat Bhruksasri (eds.), *Highlanders of Thailand*, Kuala Lumpur: Oxford University Press, pp. 326-335.

1987 Resettlement and Three Ugly Step-Sisters Security, Opium and Land Degradation: A Question of Survival for the Highlanders of Thailand, Paper presented to the International Conference on Thai Studies, The Australian National University, Canberra, 3-6 July.

1997 The Forest of Thailand: Strike Up the Ban? in P. Hirsch (ed.), *Seeing Forest for Trees: Environment and Environmentalism in Thailand*, Chiang Mai: Silksworm Books, pp. 117-131.

大島新人

2003 『語るモノ、語らないモノ、語られるモノ：モノにたいする視点に関する試論』 「モノと情報」 班第4回ワーキング・セミナー「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」『総合地球環境学研究所 アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究』 討論資料, 11月26日, 総合地球環境学研究所。

Sanga Sabhasri

1978 Opium Culture in Northern Thailand: Social and Ecological Dilemmas, in P. Kunstadter, E. C. Chapman and Sanga Sabhasri (eds.), *Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in*

Northern Thailand, Honolulu: The University Press of Hawaii, pp. 206-209.

関本照夫

1987「東南アジア的王権の構造」『現代の社会人類学3 国家と文明への過程』東京大学出版会, pp. 3-34。

清水郁郎

2002「家屋空間と家屋の所有者—北タイの山地民アカとその家屋（その1）—」『日本建築学会計画系論文集』559: 103-108。

2003「神話の中の家屋—北タイの山地民アカとその家屋（その2）—」『日本建築学会計画系論文集』570: 71-77。

2004（印刷中）「家屋に埋め込まれた歴史—北タイの山地民アカにおける系譜の分析—」『日本建築学会計画系論文集』。

白石隆

1984「国民統合をめぐる」大林太良編 岡・江上・井上監修『民族の世界史6 東南アジアの民族と歴史』山川出版社, pp. 301-350。

白鳥芳郎

1978「第1章 傜族の移動経路と種族史」白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』講談社, pp.67-97。

Tambiah, S.J.

1976 *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*, Cambridge: Cambridge University Press.

田口理恵

2004「博物館コレクションをコレクションする—モノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性—」『Asian Studies Watching 論集〜アジア学の最前線』アジア研究情報 Gateway, 東京大学東洋文化研究所, [http 文書 http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html](http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html)。

Tapp, N.

1989 *Sovereignty and Rebellion: The White Hmong of Northern Thailand*, New York: Oxford University Press.

Thongchai Winichakul

1994 *Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Toyota, M.

1998 *Urban Migration and Cross-Border Networks: A Deconstruction of the Akha Identity in Chiang Mai*, *Southeast Asian Studies* 35(4): 197-223.

常見純一

1980「ヤオ族の移住と村落の形成—マーン=ラーン=トン（＜国見＞）を中心として—」山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『山本達郎博士古稀記念 東南アジア・インドの社会と文化（下）』山川出版社, pp. 185-211。

内堀基光

1997「序 ものと人から成る世界」『岩波講座 文化人類学 第3巻＜もの＞の人間世界』岩波書店, pp.1-22。

Vithoon Pungprasert

1989 *Hill Tribe People Blamed for Deforestation*, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), *Hill Tribes Today*, Bangkok: White Lotus, pp. 363-367.

Wanat Bhruksasri

1989 *Government Policy: Highland Ethnic Minorities*, in J. McKinnon and B. Vienne (eds.), *Hill Tribes Today*, Bangkok: White Lotus, pp. 5-31.

Wijeyewardene, G.

1990 *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

吉野晃

1991「タイ北部、ミエン族の移住—移住による村落形成過程—」『社会人類学年報』17: 149-162。

注

<sup>1</sup> ワーキング・セミナーの内訳についてはモノ班の全体報告の中で述べられているが、重複を承知でここにも記しておく。第1回(2003.7.14)「漁具の会」、第2回(2003.10.3)「カゴの会」+稲作調査団記録映画上映会、第3回準備会(2003.11.5)「利器の会:刃物を中心に」、第3回(2003.11.12)「利器の会:穂摘み具を中心に」、第4回(2003.11.26)「タイ北部山地民社会研究からみた東南アジア稲作民族文化総合調査関連資料の多角的分析」。

<sup>2</sup> これにかかわる調査のメタ人類学的な意義は、田口が詳しく述べている [田口 2004]。

<sup>3</sup> 狩猟具に関しては、2004年度中に開催する予定である。

<sup>4</sup> ラワは、その後、ランナータイやハリブンチャイとのあいだに朝貢関係を結ぶなどした [星野 1990: 178, 191, cf. McKinnon 1983: 332; Wanat Bhruksasri 1989: 8-9]。ラワの他に、カレンとランナータイとの貢納関係も指摘される [速水 1992: 274; 綾部 1993: 70]。

<sup>5</sup> ムアンにおいては、仏教が統治と統合の力学としてはたらいだ。現在のタイの各地方にはそれぞれ有力なムアンが存在した。19世紀のバンコクにおいて中央集権的な統治機構が確立されるまで、同地域の全体に一元的支配が及ぶことはなく、各ムアンは独立した統治機構を維持していた。タンバイアはこうしたムアンの特徴を「銀河系政体 (galaxy polity)」と呼んだ [Tambiah 1976, cf. 関本 1987; ハイネ=ゲルデルン 1972]。

<sup>6</sup> タイに限っていえば、いわゆる「山地民政策」のもとでおこなわれた低地への強制移住や、1990年代の初頭におこなわれた「国外退去」なども広い意味での移住ととらえてよいだろう。1960年以来、現在まで、タイ政府による山地民の移住計画は数回実行されている。最初の計画は1960年から1961年にかけて、山地民福祉委員会 (Hill Tribe Welfare Committee) によって主導された。また、内務省公共福祉局 (Department of Public Welfare) は、政治的、環境的に国土の保全を図るとともに、教育分野などの政府側の支援を容易に受けられるよう、低地に近い場所に山地民を集合させるという定住化計画を唱えた [Kammerer 1988: 7]。1969年には、山地に潜伏する共産勢力の排除を目的に、共産ゲリラと関係があるとみなされた村や、その疑いがあるとされた地域の村に居住する山地民は、強制的に低地に移住させられた。このときには、多くの山地民がいわれのない疑いをかけられて、強制移住の対象になった [Chupinit Kesmanee 1988: 4]。また、1986年の3回目の移住計画では、その名目はおもに森林保護にあった。この時点で、森林保護を国策として明確に打ち出したタイ政府は、山地の森林破壊と山地民を結びつけたことになる [cf. McKinnon 1997]。また、1986年の移住政策では、あくまで国立公園や野生鳥獣保護区に住む山地民が対象だったのに対して、1987年に再び同様の政策が施行されたときには、その対象は不法入国とみなされた山地民にまで広がり、そうした山地民の村への放火とビルマ側への強制送還などがおこなわれた [McKinnon 1987]。

<sup>7</sup> 土官を流官に改めること、つまり非漢族の土着首領に統治を委ねる間接統治から清朝の派遣する官吏による直接統治へ切り替えること [片岡 1998: 147]。

<sup>8</sup> 国境に関するタイの現在の状況を大島はつぎのように説明する。タイにおいて、山地民などの諸集団は交易などにおいてもともとトランス・ボーダーの状況であった。現在は、むしろ国家がそうした状況を制限していると考えられる。少数民族であっても、タイ国内に居住するかぎり、すべての民族は王のもとで等しく臣民であり、その意味では、タイに少数民族問題は存在しなかったが [白石 1984: 315]、現在のチャクリ王朝が興ってから徐々に、その周縁に位置する諸少数民族を、タイ国民として統合する方向へと向かっていった。それは、国民統合や国土開発という、タイの近代国家への道のりの過程と重なり、また、その過程で、山地民がさまざまな社会問題—ケシ栽培、共産主義への傾倒、森林破壊、不法入国—の当事者としてとらえられるようになった [Sanga Sabhasri 1978; Keen 1983; Eudey 1989; Vithoon Pungprasert 1989; Elawat Chandraprasert 1997]。

<sup>9</sup> ワーキング・セミナーにおける稲村の指摘による。

<sup>10</sup> もちろん、これらのことを議論するには概念定義が必要であり、またエスニシティを実体化することについての議論も必要だが、本稿ではそれが主眼ではないので触れない。

<sup>11</sup> ワーキング・セミナーでは、この点についていくつかの事例が提示された。たとえば、ラフにおける手織りバッグは、ラフ内においても他人がどのサブ・グループに属するのかを識別するための重要な指標となる [片岡 2003]。アカにおいても、衣装や装身具のデザインの相違の他、祖霊をまつる祭壇の形態や素材の違いも、アカ自らが他のアカが属するサブ・グループを識別する指標となる。

<sup>12</sup> こうしたモノへの視点は、人類学のモノ研究、とくに「商品」としてのモノへの視点ともリンクする。現代のモノ研究においては「商品」としてのモノが重要な研究課題となる [内堀 1997, cf. Appadurai ]。モノの「商品状況」すなわちあるものが時として「商品」として売り買いされたり、時として交換され得ない「非商品」としてあらわれたりするようなモノの全体的な状況が、当該の社会の構成と文化的意味によって規定される [内堀 1997: 12]。このようなモノの存在履歴をあきらかにすることから、社会とその背景にある「文化」を理解する筋道が示される。

<sup>13</sup> 稲村は、北タイとミャンマーのアカを、中国雲南省南部のハニと同一の出自と文化を共有する「ハニ＝アカ」ととらえて [稲村 1994: 6]、動態的な視点からの民族誌を記述した。最近では、国家の国民統合の過程や周辺政体との関係の中で、この集団が「民族」として成立する過程、および汎地域的にアカとしての連帯意識が醸成される過程を論じている [稲村 1996a, 1996b]。

<sup>14</sup> 明代以降、中国においてとられた間接統治の政策。いわゆる「辺境」部には、古来、多くの少数集団が居住しており、中央政府の支配を受け入れず、また、中央からも辺境の民として放置されていた。しかし、地方の中央への統合と重なるように各地域の少数民族の酋長を土司・土官に任命し、独自の慣習に従ってそれぞれの集団を統治させた。

<sup>15</sup> 家屋は、住み手のアイデンティティや富、権力を表象する。特定の家屋には霊的な力や資産が集約され、また、その外貌が精緻に飾られたりする。それは、人びとが、社会のヒエラルキー、制度やイデオロギーの形成と維持を、家屋を通して表現するためである [Carsten and Hugh-Jones 1995: 12]。

<sup>16</sup> もちろん、エスニシティの越境を過度に図式化することには十分に注意を要する。たとえば、モン社会の研究者である大島は、長い歴史の過程でタイ社会に同化していったモン人とタイ人のエスニシティについて、仏教文化を例にとり、なにがモン文化でなにがタイ文化なのかすでにその境界があいまいになって久しいと述べる [大島 2003]。

<sup>17</sup> 中国のハニ＝アカ集団に関して、稲村はつぎのように報告する [稲村 2003]。「伝統的」なアカの村落には、通常、2ヶ所に（村落の前と後ろ）に「門」がつくられる。従来は、生木を組んで使っていたが、近年、中国のハニ＝アカ集団では、この門にも漢化の傾向がみられる。また、家屋に関して、北タイのアカのような男女の部屋の分割はなくなり、2階建て（高床の床下部分を囲って居室とした形態）に変わる傾向にある。

<sup>18</sup> 北タイでは、最近、山地から地方都市へ移住する山地民が増加している。豊田は、アカの都市移住民に関して、慣習的知識や村落への帰属意識といった側面ではとらえることのできない新しいアイデンティティの生成過程を分析する [Toyota 1998]。従来の研究では、慣習的知識や村落への帰属意識は、アカのアイデンティティと集団の組織化の重要な部分を構成すると考えられてきたが、都市移住民のあいだではそれらにとらわれない個と集団の枠組みが生起していることを、豊田の研究は示している。

<sup>19</sup> ひとつの例として、タイにおける仏教布教がある。タイでは 1960 年代の中期以降、タイ国家への帰属観、忠誠心の醸成とタイ的な価値観の導入を目的として、法の巡歴（タンマ・チャーリック）として知られる、公共福祉局と仏教教団（サンガ）による仏教普及計画が北タイの山地民に対してすすめられた [e.g. Keyes 1971; Tapp 1989: 85-91; 石井 1991: 172-175; 速水 1992: 286-287, cf. 速水 1994]。

物質文化情報化のための方法論再考  
後藤 明 (同志社女子大学現代社会学部)

キーワード：物質文化、民族考古学 (エスノアーケオロジー)、オスグッド

**A Reconsideration on Information Management for Material Culture**

**Akira Goto (Doshisha Womens' College)**

key words: material culture, Osgood, ethnoarchaeology

1. 序論

博物館資料および今後フィールドで収集するであろう物質文化資料の情報化において、まずその記述 (description) のシステムを検討、共通化する必要がある。そのたたき台として本稿以下ではアメリカの民族学者 C. オスグッドの著作『インガリックの物質文化』[1940] を中心に検討を行う<sup>1)</sup>。

ちなみに筆者とこの本の出会いは今から 30 年前に遡る。当時、東京大学考古学研究室の 3 年生であった。教養部を終えて考古学の専門課程に進み、演習で使われたのがこの本であった。考古学の専門演習のテキストがこの民族誌であった。指導は故・渡辺仁教授であった。いうまでもなく教授は人類学・民族学と考古学の双方で優れた業績のある研究者であり、人類進化的な視点を取り入れた生態人類学と同時に、土俗考古学 (民族考古学) の提唱者でもあった<sup>2)</sup>。70 年代のラオス調査もその延長で行われたものと思われる。

考古学の専修過程に進んだ学生に、最初に専門教育を施すために考古学ではなく、民族学の書物を与えた渡辺教授の意図は、安易な民族学的アナロジーを推奨するのではなく、民族学と考古学の資料を扱う共通の土俵を作り、そして考古学資料の解釈に民族誌を役立てる物であったと思われる。

筆者は今日、逆にオスグッドの著作を読み直している。別稿でも書いたが [後藤 2004]、考古学的な視点を民族誌研究に取り入れるためである。それは特に、人間行動の変異の重要性を民具資料の調査収集に役立てるためである。

調査でいつも悩むことのひとつが、同じ型式の民具であっても、そこに見られる変異 (variation) をどう扱うかである。同じムラの民具、時には同じ人が作り、あるいは使う民具の間に見られる違いをどう扱うか。また収集する際、いったいそれらを何個集めればいいのか。あるいは集める資料はどのような変異を保った資料 (たとえば最小から最大の幅をカバーできるような資料が必要か、など) を収集してすべきなのか? このような点においてである。

人間行動の変異は「適応」のためにまず必要である。環境条件が変化したときに、行動変異の中から、特定の行動が選択されるからである [e.g. Kirch 1980]。さらに筆者が示してきたように、特定個人の「物作り」でも一回一回正確には変異があり、どの程度の変異が許容されるのか、あるいはある段階で生じた変異を、次の製作段階でどのように軌道修正するのかが、物作りの研究には重要である。

既存の記述システムは基本的に「代表的」資料 (があると仮定して) を描くための物であることが多い。その点で『インガリックの物質文化』は古典でありながら今日にも通ずる先進的な問題提起を行った書である。

「生態史プロジェクト」は環境と人間行動の長期的関係を探るという共通目標がある。さらに「物と情報班」はそれを物質文化・民具から捉えてゆくという個別目標がある。この両方の目的のために、次に示したオスグッドの枠組みは一つの出発点として検討すべき題材である。

1). 外観 (appearance)

2). 名称 (name)

- 3]. 製作 (manufacture)
  - 3.1. 材質 (material)
  - 3.2. 組み立て (construction)
  - 3.3. 変異 (variation)
  - 3.4. 製作場所 (where made)
  - 3.5. 製作時期 (when made)
  - 3.6. 製作者 (maker)
- 4]. 使用 (use)
  - 4.1. 用途 (utility)
  - 4.2. 使用方法 (method of use)
  - 4.3. 使用における変異 (variations in use)
  - 4.4. 使用場所 (where used)
  - 4.5. 使用時期 (when used)
  - 4.6. 使用者 (user)
  - 4.7. 使用寿命 (length of life)
  - 4.8. 所有権 (ownership)

以下、オスグッドの枠組みを見るが、〔 〕の記述は今日の物質文化研究あるいは民族考古学の視点からした筆者のコメントである。

## 2. 説明

### 1] 外観

イラストや写真で外観を示す。イラストは実物のスケッチと模式図である場合の両者がある。調査者あるいは話者でさえ見たことのない品目の場合、模式図は誤解を招く可能性がある [Osgood 1940: 57]。

### 2] 名称

現地語の名称とその訳。部分の名称。〔(1) 民俗語彙論でいう一次的名称、二次的名称等の区別。その語彙の原義の示す象徴性、二次的名称に使われる語彙の特徴。すなわち色、大きさ、形、用途等、どのような範疇の語彙で話者はひとつの道具を細別しているのかという問題。(2) また名称聞き取りの時、本来の名前か、あるいはそれを忘れたためにただ説明的に名前を付けているのかなどの区別。あるいはこちらの理解力のレベルに話者が合わせて回答する場合の注意。(3) さらに部分名称というより、話者による道具の「解剖学 partonomy」、すなわちどのように道具の部分を認識しているのかの認定 [van der Leeuw 1994]。〕

### 3] 製作

#### 3.1. 材質

製作に使われる材料の種類や名前。〔材料の多くは自然素材であるから、いわゆる動植物や鉱物などの民俗分類と密接に関わる。単なる種類だけでなく、特定動植物の成長段階、あるいは材料の微細な違いに対する製作者の評価が重要な問題であろう。材料自体が下ごしらえや準備が必要となるなら、民具の製作過程の記述は何重の入れ子構造になるであろう。〕

#### 3.2. 組み立て

製作における技術的な詳細に関する項目である。含まれる物は、一方で製作者の身体の動きに関する情報、もう一方では製作に関連してもたらされる物質的な結果、すなわち音、におい、味そして熱などである。〔今日的には製作における身体技法の問題が含まれている。このような視点は下記の道具の使い方も同様であるが、かつてフランスのルロワ＝ゲーランが、道具の動かし方あるいは体の動きと、特定の道具の特性を捉えようとした学問

的潮流に平行する [Leroi-Gourhan 1940]。さらに今日では言うまでもなく動画撮影が製作工程を記録するための必須の媒体であろう。技術は日進月歩であり、小型カメラでも良質の映像が撮影できるようになった。この点に関して筆者は映像作家・門田修と「物作り」に特化した映像制作の試みを行っている [門田・後藤 2004]。]

### 3.3. 変異

製作における材料、サイズ、組み立て方の変異。同じ道具でも二つの製作方法があり、どちらかが一般的ないし好まれているわけではないという場合は、変異というより、異なった組み立てとして記述する。また変異には個人によって所有されている個数の違いや、汎用性・希少性などの区別を行う。装飾も変異に入れるが、その装飾が組み立ての本質的な部分であれば、組み立てで記述する。[製作における材料選択や製作工程の変異、またその選択は今日の操作連鎖論の基本事項として重要 [Lemmonier 1992]。]

### 3.4. 製作場所

家の中や外、あるいは家も冬家と夏家など、製作場所の特定。

### 3.5. 製作時期

季節性の中で生きる北米先住民の製作活動は当然季節と密接に関わる。[それは特定の道具が必要となる季節あるいは特定の材料が利用可能となる季節、さらに道具製作の時間が取れる季節などの点においてである。]

### 3.6. 製作者

道具を作る人の性別や年齢。共同するか否か、また特に顕著な場合は製作者の他の属性（たとえば技能、使用者との関係など）にも言及される。

## 4| 使用

### 4.1. 用途

一般的な用途や使用法。

### 4.2. 使用方法

民具を使うにあたっての身体の動き。またその結果として生じる音、におい、味、熱、光など。

### 4.3. 使用における変異

道具の機能の変異、使用法の変異。可能な場合は道具を使用する技法の変異、また適応可能な場合は道具を研ぐことに関するデータ。[研ぐこと sharpening とは使いながらの調整、再加工、あるいは修理などを広く含むと考えて良いだろう。]

### 4.4. 使用場所

どこで使うかだが、さらに使わないときにどこに置いておくか、あるいはどのように運ぶかも可能なら含める。

### 4.5. 使用時期

使用する時期。[人間に関わる様々な時間サイクル、すなわち日周期、週周期、季節周期、年周期、世代周期など異なった時間的脈絡で考えるべきであろう。また使用の頻度なども関連項目ではないか。]

### 4.6. 使用者

製作者と同様性別や年齢、あるいは様々な個人的な属性との関わり。タブーや使うことの威信にいつても言及する。

#### 4.7. 使用寿命

道具の寿命。話者の寿命に関する認識も重要だろう。〔考古学における組成形成論では use life がクリティカルな要因のひとつである。管理財と消費財の対比など。〕

#### 4.8. 所有権

誰が所有するか。実際にはどちらの性が持つかということに関する情報が多かった。可能な場合継承の問題も言及する。

### 3. 記述例

次は具体的な記述例を一つあげる。事例は原著の最初にあげられている女性用の突き錐 A 型式 (woman' s awl A) である [Osgood 1940: 61-62]。

#### 1] 外観：図参照



2] 名称：wa・wa gane・yang：原義は「何々で」・「はぎ取る」。名称は紐を作るときに外から木の皮の内皮をはぎ取るのに共通に使われるところから来る。

#### 3] 製作

##### 3.1. 材質：カリブーの足骨

3.2. 組み立て：カリブーの大腿骨か頸骨を選び、割る。製作者は破片を選び、それを石の骨きりで切って、長さ 5 インチ、幅 3/4 インチ、厚さ 3/8 インチで端が丸く尖った形になるように、砥石で研ぎおろす。骨を石で研ぐ間、研ぎ音が続く。研ぎ終わると製作者は魚の脂に浸す。この道具を作るためには一日半費やされる。というのは骨を切るのに時間がかかるからである。

3.3. 変異：この種の突き錐はサイズに変異があり、話者は長さが 7 インチまでであると話す。ときには先端が丸いかわりに、幅 1/2 インチのねじ回しのように描かれる。柄がつけられることはない。ときどき尖っていない側に小さな穴が開けられ、道具バックの中から取り出すときつかみやすいように、革ひもが結ばれる。女性は代替の突き錐をもつことがある。おそらくひとつは母から継承した物、もうひとつは夫ないし父が作ってくれた物である。装飾はなされない。

3.4. 製作場所：男小屋 (kashim)。

3.5. 製作時期：骨が新鮮な冬から春、それはその時期、骨が容易に切断できるからである。

3.6. 製作者：男性。

#### 4] 使用

4.1. 用途：柳の樹皮内部の繊維をはぎ取るため（外側の樹皮の繊維ではない）。

4.2. 使用方法：内部樹皮をはぎ取るために、親指の端を道具の先端に近い所の窪んだ側面にあて、そして他の指は指先がやはり窪んだ表面に届くように、道具を包み込む。根に近いところを折り返した柳の樹皮（これは繊維を緩くするため）の内部繊維の中に先端が挿入される。道具の先端は前に押し出される（体から数インチ離れる

方向、柳の根の方へ)。端にゆるくひっかかった繊維はそれで手ではぎ取ることができる。この過程で音も熱もでないが、はがれたばかりの新鮮な樹皮の臭いがするであろう。

4.3. 使用における変異：個人個人は使用法に変異はない。先端がおれるまで、とがらされることはない。

4.4. 使用場所：家の中や外。使わないときは皮を縫って作ったバッグの中に入れて置かれる。

4.5. 使用時期：春に靱皮繊維を作るために柳の樹皮が集められるとき。

4.6. 使用者：女性（すべての年代）。

4.7. 使用寿命：長く保つ（重い仕事には全く用いられない）。

4.8. 所有権：女性（この道具は母親から継承される）。

さて上記は道具の範疇ごとの記述であるが、オスグッドは全体の考察の中で横断的な議論も行っている。たとえば組み立ての項目の比較ではインガリックが使用する紐の結び方の各種が抽出できた。このように範疇毎の議論のあとに、横断的な議論も必要である。たとえば「竹素材」の加工という視点のように、である。

## 5. 考察

以上見てきたように、オスグッドの記述システムはきわめて実践的であり、そのままだでも今日の物質文化調査に十分適応可能である。今後はこれをたたき台にして、静止画像、動画の添付、また資料のデータベース化の具体策などについて検討することが必要となる。さらに、物質文化の製作や使用の社会的脈絡に関する情報収集の戦略を練る必要があろう [e.g. 後藤 2002; 田口 2002]。実はオスグッドはこの点に関しても先駆的な業績をあげている。それは『中国人——香港社会の研究』全三巻である [Osgood 1975]。

紙面がないので簡単に紹介する。この民族誌は従来のように、中国人社会を経済、社会、宗教などの面にわたって「規範的」に記述した物ではない。たとえば一巻ではある地区の 18 軒の世帯を選び、その家屋、生計、家族構成などを比較している。加えて個々の世帯の調査にさいしての問題点についてコメントしてあるのも<sup>3</sup>、後進の調査に資するものである。

また様々な小商売や工芸職人についても、世帯や個人あるいは工房を複数取り上げて、その比較を行い、共通性と変異の双方を捉える努力がなされているのが特筆される<sup>4</sup>。この点でインガリックのような先住民研究と香港社会のような都市型社会に共通する方法を提示している。

このようにオスグッドは、われわれが今後展開すべき調査研究戦略を構築するための「要マーク」研究者であると思われる。

## 引用文献

Ammes, Kenneth L.

1977 Beyond Necessity: Art in the Folk Tradition. Delaware: The Winterthur Museum.

後藤 明

2001 『民族考古学』、勉誠出版。

2002 「技術における選択と意志決定——ソロモン諸島における貝ビーズ工芸の事例から」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 513-359.

2004 「考古学的なモノの見方」『考古学ジャーナル』513: 1.

Kirch, Patrick V.

1980 The archaeological study of adaptation: theoretical and methodological issues.

Advances in Archaeological Method and Theory 3: 101-156. New York: Academic Press.

Lemonnier, Pierre

1992 Elements for an Anthropology of Technology. Anthropological Papers Museum of Anthropology, University of Michigan, No. 88.

Leroi-Gourhan, André

1943 L'homme et la Matière. Paris: Éditions Albin Michel.

門田 修・後藤 明

2004 『パプアニューギニア・ニューアイルランド島から』、海と森の映像シリーズ  
『バハリ』、No. 1、海工房。(DVD 作品)

Osgood, Cornelius

1940 Ingalik Material Culture. Yale University Publications in Anthropology 22.

1975 The Chinese: A Study of Hong Kong Community. 3 Volumes

Tucson: The University of Arizona Press.

田口理恵

2002 『ものづくりの人類学—インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌』、風響書房。

Van Der Leeuw, S.E.

1994 Cognitive aspect of 'technique'. In: C. Renfrew and E.W. Zubrow (eds.), Ancient Mind:

Elements of Cognitive Archaeology. Cambridge: Cambridge University Press. pp.143-151.

注

<sup>1</sup> インガリック族は北米に住むアサパスカン系の先住民である。オスグッドの著作は『インガリックの社会文化』、『インガリックの精神文化』とともに三部作を構成している。

<sup>2</sup> 今日的には民族考古学(エスノアーケオロジー)の方が一般的なようだが、渡辺は、戦前・台北帝大にあった土俗学研究室の名称などから土俗考古学の名称を提唱したと語っていた。またオーストラリアのキャプテン・クック大学に物質文化講座というものが開設されているのを評価していた。渡辺は民族史的情報が考古学資料の解釈に単に役に立つということではなく、物質文化研究が独自の文化科学となるべきだと考えていたように思われる。

<sup>3</sup> たとえばある世帯はどう猛な犬がいて近づきにくかったとか、家族はこれこれの仕事をしているために、昼間の訪問ではなかなか時間がとれなかったなどのコメントである [Osgood 1975, Vol 1: 188]。データの質を判断するため、このような情報も何らかの形で「データベース」に含めるのも一考であろう。総じてオスグッドはインガリックの研究でも香港の研究でも、調査時の問題点(例 インフォーマントとの関係、語学の問題、その他調査に伴う諸困難)に関して随所で明示的な議論している。「秘技」化しがちな人類学の調査方法の相互提示と共有化は、「物と情報」班にも求められる姿勢である。

<sup>4</sup> この点に関し、アメリカの物質文化研究者 Ammes [1977] の提起している、「手工芸」に関する5つの「神話」の検討も必要であろう：

(1) 個人性という神話 (the myth of individuality)

(2) 貧しいが幸福な職人という神話 (the myth of the poor but happy artisan)

(3) 手工芸という神話 (the myth of handicraft)

(4) 抗争から無縁の過去という神話 (the myth of a conflict-free past)

(5) 国家的独自性という神話 (the myth of national uniqueness)

## 「モノと情報」班コメント寄稿

### モノはいかに保存・活用すべきか —近代物質文化を題材に— 角南聡一郎 ((財)元興寺文化財研究所)

#### 1. はじめに

筆者は平成16(2004)年2月20～24日に開催された、「モノと情報」班ワーキングセミナー「海洋文化館蔵の東南アジア関係資料の検討」に参加させていただいた。本稿では、この機会に得た知見をもとに、文化財として、博物館・資料館資料としてのモノが、どのように保管・保存されるべきか、また資料はどのように活用されるべきかについて私見を述べてみたい。

昨今は市町村合併問題や少子化問題など、博物館・資料館にとって直接的・間接的に影響を及ぼす可能性の高い社会問題に直面しつつある。特に市町村合併問題は、市町村が運営する博物館・資料館に大きなダメージを与える要素が多い。かつて箱物行政と言われた形で誕生したこれらの館は、平成の現在、各々の独自性を見出すことができなければ、存続は困難となり合併した他の市町村の館への吸収という結末を迎えかねないだろう。館の独自性を引き出すのは、ハードとソフトである。ソフトとはここでは館蔵資料である。資料の独自性を引き出すことよりも、むしろ資料とその地域との関係性を強調することに、活路が見出せるのではないと思われる。そこで、本稿では、地域との関係性を語りやすいであろう、近現代資料に焦点を当てて議論を進めていくことにしたい。

また、筆者は日常的に文化財、博物館資料の保存修復や取り扱いと関わっている(業務的に保存修復を行い、また博物館相当施設である世界遺産・元興寺の収蔵庫資料も取り扱うことがあるという意味で)。この中で感じた疑問、問題点などについても言及してみたい。

#### 2. 文化財というモノのくくり

一般的に文化財＝モノと考えられがちであるが、実はそうではない。文化財保護法による無形文化財が含まれるためだ。しかし、モノが文化財の大部を占めていることは間違いない。モノとしての文化財は、文化財保護法という法令によって保護されているものを指すばかりではなく、文化価値を有する歴史資料、民俗資料などのことを指して文化財と呼ばれることもある(段木1999)。ここでは、前者を狭義の文化財、後者を広義の文化財と呼ぼう。法令により守られている前者は安泰であるかの印象を与えるが、これには弊害もある。例えば本プロジェクトでも指摘されているごとく、モノをめぐる有機的關係については、保護の対象となっていない点などがあげられよう。また、指定については政治性を帯びることがしばしばあり(角南2000)、狭義と広義の文化財の境界線をどこで引くかには明確な判断基準は存在しない。これらの問題は狭義の文化財という概念の限界を意味しているものと考えられる。

視点を変えて近現代のモノについて考えてみよう。近現代のモノには、民族資料、民俗資料、考古資料、美術工芸品、建造物、文献などが含まれる。これらの一部は狭義の文化財にも含まれるが、ほとんどのモノは広義の文化財にも含めて考えられない場合が多いのが実状である。例外的に平成6(1994)年に提示された近代化遺産という概念により、一部の近現代建造物が登録文化財に指定されている。しかし、これらは公の近現代史と関係したものが指定の中心である。民衆と関係するモノは民具と呼ばれている。民具(民俗資料・民族資料)とされるものの多くは近現代の産物である。つまり、民具は近代物質文化資料という、より広い枠組みの中で捉える必要があるだろう。

日本国内の博物館などにおける民族資料収集・収蔵という行為は、近代国民国家成立以降に日本が領有した植民地との関連が深い。しかしながら、植民地以外の民族資料は珍奇なものとして捉えられることが多かった。それは内国博覧会などに端を発する、内なる異文化への関心などの事例などに顕著である。博物館成立の一要素として、前近代以来の見世物的な部分、つまり自分たちとは異なるモノへの興味が、民族資料収集へと誘った可能性も捨てきれないのではなかろうか。こうした意味でも、日本における民族資料収集は近現代に特徴的な現象

であると言える。

### 3. 近現代のモノ展示を中心に据えた博物館の実例

次に博物館でのモノの取り扱いと活用の可能性を、保管・保存の問題と関連させながら、現代物質文化の展示が中心である東京の博物館の実例を幾つか示し、若干の私見を述べてみたい。

昭和館は千代田区九段下に平成11(1999)年3月開館し、主に戦没者遺児をはじめとする戦没者遺族が経験した戦中・戦後(昭和年頃から昭和年頃)の国民生活の苦労についての歴史的資料・情報を収集、保存、陳列し、後世代の人々にその苦労を提供することを目的とした施設である。館の所在地が靖国神社の目と鼻の先であること、運営を日本遺族会が行っていることなどからも、名称や展示内容から歴史観に関するものを避けた形で開館したとの批判もある。昭和館は設立の経緯や運営の状況から、イデオロギー型の博物館であると言えるだろう。

江戸東京博物館は江戸川区両国に平成6(1994)年に開館し、江戸から東京への移り変わりに焦点を絞った展示が売りである。建造物については都立小金井公園内に、分館江戸東京たてもの園を設置している。文明開化東京にはじまり、開化の背景、産業革命と東京、市民文化と娯楽、関東大震災、モダン東京、空襲と都民、よみがえる東京といった順にテーマを設定している。さまざまなテーマについて次々と見せていく手法は、例えるならばテーマパークに近い印象で、命名するならばテーマパーク型と呼べるのかもしれない。海洋文化館の展示はこの類に属するだろう。ある一つのテーマを追いかけるとするならば、このタイプの博物館・資料館のニーズはあるだろうが、それぞれの資料についてコンテキストを補足説明することが望ましい。

昭和のくらし博物館は大田区久ヶ原に平成11(1999)年3月開館し、戦後の庶民のくらしを語り伝えて生活資料を残すことを目的としている。施設のメインは昭和26(1951)年に建設された初期公庫住宅である、木造2階建ての「小泉家住宅」である。開館後の平成14(2002)年に国の登録有形文化財(建造物)となった。運営はこの「小泉家住宅」で育った館長の小泉和子個人で、収蔵資料は小泉家の家財道具類と、館長が研究過程で収集した資料が中心である。ここでの資料展示の特徴としては、モノの使用様式を重視している点であろう。これは、モノの本来の意味を理解してもらうためには、ガラスケースの中にコンテキストを読み取れない状況でモノ詰め込む展示方法ではなく、使用状況を明確に提示することが必要であるという展示の哲学の現れだ。このような展示は、実際に近現代を生き、思い入れのある世代には共感と呼び、理解しやすいであろう。当館は設立の経緯や個人経営の博物館であるという点などから、思い入れ型と呼ぼう。しかし、モノの維持管理という観点からすると、このような展示方法は、モノの劣化を促進するという難点がある。海洋文化館の展示方法は、昭和くらしの博物館と類似した露出展示中心である。露出展示は来館者が資料に対して親しみが持てるというメリットはあるが、海洋文化館での調査では資料の劣化や落書きなどが目立ち、リスクも大きいことがわかる。

イデオロギー型と思い入れ型には幾つかの共通項が見出せる。その一つは排他性である。特定のイデオロギーや思い入れに偏ってしまうと、共感できる人、そうでない人が必然的に生じる。戦争体験者とそうでない世帯とのギャップ、昭和ノスタルジアムーブメントに共鳴する世代とそうでない世代などもその実例と言ってよさそう。

ではバランス感覚についてはどうなのだろうか。バランス感覚の点ではテーマパーク型が無難であるということに落ち着くことになるかもしれないが、あくまで江戸東京博物館は中央の歴史を展示しているのであり、地域には適用できる部分とそうでない部分がある。江戸東京博物館は、日本の正史を学習する場としてふさわしい展示かもしれないが、東京という地域史の展示として考えた場合には、伝統的側面のみが強調されており、現代における東京住民(ニューカマーや在日なども含めて)との有機的関係は希薄であるのではなからうか。江戸東京博物館に限らず、中央の歴史と地域史を並列に扱えること、現代社会と博物館資料の関係性が明らかであることなどが、真のバランスが取れた資料の取り扱いであるのではなからうか。

一般的に文化財に指定されている民衆の建造物は民家であり、民家の屋外展示の中でモノの果たす役割は極めて重要である。この種の展示は、モノを様式として捉えることが可能であるが、伝統的側面ばかりが強調されており、前述した昭和のくらし博物館でのような、現代に生きる人々の記憶に強く訴える日常的要素は少ない。このような現実には博物館・資料館のハード面を再考する際に、留意していただきたい点の一つである。

#### 4. モノ研究の倫理観と希少性

狭義の文化財について現状変更する場合もある、保存科学・保存修復学という学問の世界では、倫理が存在しているのだろうかという疑問がその現場に携わる一人として湧く。元来、科学には倫理があり(内井 2002)、保存科学と称するからには保存科学という学問の倫理が存在するはずである。サンプリングなどでどこまで壊すか、現状をどこまで修理するかなどということについては多少の議論があるが、倫理と呼ぶには程遠いのが実態ではないか。ヒトでなく、モノであっても文化財はかけがえのないものであると規定するのであれば、倫理について議論がなされ、基準が設定されるべきではないだろうか。モノの倫理について言及しようとするのであれば、保存科学者・保存修復学者？たちは、具体的に取り扱う資料が有する情報を適切に理解する必要があるだろう。

前述したように近現代のモノの中には、異文化と自文化の資料が存在する。これらが博物館・資料館で取り扱われる際には珍しいという希少性からか、異文化のモノ(民族資料)が重視され、自文化のモノ(民俗資料)が軽視されている印象が強い。この要因として、近世以来の見世物的興味や近代経済学の論理(希少性の高いものに付加価値が与えられる)が働いていることが想定される。空間軸は異なるが、時間軸を中心に見れば両者は同じ時期のモノであり、正しい歴史認識によって位置づけるならば並列関係にあり、どちらに価値があるかといった議論は学問的レベルとは別次元の問題であるはずだ。しかしながら、実態として両者の関連について明確な説明を加えた展示は稀である。

このようなモノの扱われ方の歪みは、見せる側と見る側との関心の相違に起因する部分もあるだろう。つまり、館の意図とは異なり、来館者をわざわざ館まで誘うのは、希少性というニュアンスの強い資料であるだろう。

また、いずれの資料についても互換性があるとはじめて、活用が可能となるのではなかろうか。つまり、全体として歴史の流れの中でののおよその位置づけを行い、各地域での様相がどのように異なるのかという整理が実施されていけば、資料の貸し出し・借入れなども円滑に進むのではないか。

美術品・工芸品は財宝として売買の対象となるが、これはモノそのものが持つ情報の売買ではなく、付加価値の売買である。これと類似して、日本における文化財の扱いは財宝とほぼ同義との解釈も成立する。経済人類学者ポランニーの言葉を借りるならば、歴史的に見ると財宝は他の貯蔵された富とは区別されるべきであり、「財宝は「高価品」や儀礼品を含む、威信用の財からなっていて、それを所有するだけで社会的な重さ、権威、影響力がその人に与えられるものである」(ポランニー 1975)。

マルクス主義的見地からは芸術は上部構造に位置づけられ、消費の対象とはならないものであった。しかし、現代日本の資本主義社会、こと、昭和時代末バブル経済期以降では、芸術は日々消費されている(岡本 1985)。

高度経済成長期以降、日本で求められる豊かさは「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を上まわった。戦後日本社会の第1のターニングポイントは、第1次オイルショックのおこった1970年代前半期にあり、90年代のバブル経済の破綻が第2のターニングポイントだと考えられる。第1のターニングポイントが高度経済成長の終焉を意味していたならば、第2のターニングポイントは、戦後日本社会を支えてきたさまざまな秩序の破壊を意味していると言える(友枝 1998)。高度経済成長期以前と以降で設立された、博物館・資料館では展示内容が異なると考えられる。民俗資料の場合は、高度経済成長期に多くが消失の危機にさらされたことから、とりあえず収集が開始され館に収蔵されたという経緯がある。しかし、その後は急激な社会変化から収集民俗資料の範囲を、近現代的資料にまで拡大していったものの、これら蓄積された資料の山と現代社会の関係を、研究者以外に積極的にアピールすることができなかつたため、収蔵の社会的意義を失っていったかのように見える。ただ、皮肉にもバブル経済崩壊後の平成に入ってから、若い世代を中心に昭和ノスタルジアブームや柳宗理などによるネオ民芸ブームが巻き起こった。

社会学者ブルデューのディスタンスシオン理念を、日本に応用しようと試みた石井洋一郎によると、「いわゆる「バブル」の全盛期、テレビや新聞に氾濫するコマーシャルは、こぞって視聴者の購買意欲を刺激すべく、他の商品との差異を繰り返し強調したが、その過程が反復されればされるほど、消費者のほうもしだいに刺激なれして、欲望は新鮮さを失っていく。他人との差別化をはかったところで、他人のほうも同じように差別化をもくろんでいるのであれば、差異だの卓越性だの言ってみても、しょせんはそれこそバブルみたいなものでしかない。(中略)「階級のない」日本社会が濃密な差別化の時代を経過したことは確かであり、そのことはそれなりの意義があったと言うべきだろう」(石井 1993)としている。前述の平成のノスタルジックブームは、バブル崩壊後

の新たなモノとの関わり方の模索とも考えられる。

考古学者富樫雅彦は、考古資料の普及啓発事業が思うように進展しない理由として、誰のための普及事業であるかを見ると、結局、担当者の満足を求めたものに陥っている点、普及事業が考古学成果を楽しむことにこだわりすぎている点、埋蔵文化財を様々な形で楽しめる個人・団体・指導者を育成してこなかった点から、住民サービスとしての質的評価は低いとする。このことから、富樫はスポーツマネジメントを参考にした、自主的活動の市民・団体の育成支援などを盛り込んだ、文化財活用マネジメント論を提唱する(富樫 2004)。普及事業と深く関連する保存と活用という二つの概念は相反するベクトルと考えられがちである。しかし、この問題が解決しなければ、真の普及事業は行えないだろう。富樫によれば資料活用における緊張関係を解消するためには、第1段階として「資料が壊されるのでは？」という利用者との緊張関係の管理、第2段階として利用者が正しい扱い方と重要性の理解できる積極的管理手法の確立、第3段階として埋蔵文化財(遺跡・出土品)の活用に関する協議会の設置(利用者、団体、管理者等の構成による協議会の設置・運営)といった階段的措置が必要であるとされている。このような形で、市民参加が実現すれば、社会的貢献を享受されることにより、参加者は楽しむことが可能となるだろう。こうした文化財活用マネジメントは考古資料に限ったことではなく、民族資料・民俗資料にも適応可能であると考えられる。館や自治体の協力が得られるならば、一日も早い実践が待たれる発想である。

##### 5. 最近の新聞記事より～まとめにかえて～

最後に近年の新聞記事に取り上げられた、近現代のモノの幾つかを紹介しながら、これからの近現代モノ学の展望を示しておきたい。

「室戸台風`証人`大量出土」『山陽新聞』2003.5.17 付朝刊記事(資料1)

「岡山県総合グラウンド(岡山市いずみ町)の地中から家屋材やがれきなどが大量に出土、十九三四年九月の室戸台風被害で出たごみの埋め立て地跡である可能性が極めて高いことが十六日、同県教委などの調査で分かった。関係者は「台風被害の実態や水害復旧の様子を知る発見」とし、資料保存に乗り出す方針。」 一帯は岡山県を代表する津島遺跡に相当する。国指定史跡地域から外れているものの、弥生～古墳時代の遺構も発見されている。近現代の資料は一部保存され、その他は廃棄されたという。考古資料はいつの時代も、墓に納められたモノとゴミであるといっても過言ではない。弥生～古墳時代のモノも語らせる歴史は多いだろうが、近現代のモノたちにも平等に語らせてやりたいものである。歴史的に連続した土層堆積の中で、近現代の部分だけが欠落しているというのも、未来より現在という過去を見た場合に異様な光景だろう。ただし、近現代のモノは軽視されることがほとんどであり、一部でも保存されるということは喜ぶべきことなのかもしれない。

「爆心地残ったすずり」『朝日新聞』2004.4.7 付朝刊記事(資料2)

「世界遺産の原爆ドーム(広島市)で被爆したすずりが、60年代のドーム保存工事に携わった同市内の元技術者宅で見つかり、近く広島平和記念資料館(原爆資料館)に寄贈される。被爆当時、ドームは広島県産業奨励館で、旧内務省や広島県の職員らが働いていた。だが、資料館はドーム内で見つかった個人の遺品は腕時計1点しか所蔵しておらず、「爆心地付近の被害のすさまじさを物語る極めて貴重な資料」と評価している。」 当資料は考古資料の範疇でも、民俗資料の範疇でも取り扱うことが可能である。底部には所有者のものと見られる銘も線刻されているという。戦争関係資料だけの特化は危険であり、あたかも近現代硯の資料的価値は、原爆ドームで見発見されたものに代表され、あたかもイデオロギー型の資料として位置づけられてしまう可能性もある。この議論の前提として近現代の一般的硯がどのような特徴を有しているかという補足説明が必要となる。

以上、見たように近現代モノ資料も、ネグレクトされることなく保存され、歴史的流れに沿った形で公平に説明され活用されることが望ましい。このような小さな試みの蓄積が近現代物質文化研究の大きな潮流を形成していくことを願ってやまない。

##### 【引用・参考文献】

石井洋二郎 1993 『差異と欲望』藤原書店。

内井惣七 2002 『科学の倫理学』丸善。

岡本慶一 1985 「劇場社会の消費民俗学」『記号化社会の消費』HBJ 出版局 pp100-147。

小泉和子 2000 『昭和のくらし博物館』河出書房新社。

沢田正昭 1997 『文化財保存科学ノート』近未来社。

角南聡一郎 2000 『『文化』財の政治性』『元興寺文化財研究』75 (財)元興寺文化財研究所 pp4-6。

段木一行 1999 「文化財保護法制定以前」『法政史学』52 法政大学史学会 pp4-11。

富樫雅彦 2004 「出土品の活用環境についてー文化財活用マネジメント論の確立に向けてー」『出土品の取扱いと活用』埋蔵文化財行政研究会 pp22-23。

友枝敏雄 1998 『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣。

ポランニー, カール (吉沢英成訳) 1975 「第三章 貨幣使用の意味論」玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』日本経済新聞社 pp59-76(Polanyi,Karl 1957The Semantics of Money-Uses Explorations1957-10)。

増澤文武 1985 「八 保存処理」『民具調査ハンドブック』雄山閣 pp194-206。

## モノと情報班 コメント寄稿

## Diffusion をめぐって

## －人類学と歴史について若干の補足－

山田 仁史（国立民族学博物館・外来研究員）

1990年代以後、人類学とその隣接諸科学においては、構造主義の衰退とちょうど呼応するように、《歴史への回帰》という傾向が見られる。それはたとえば、考古学においてである。

この現象をカリフォルニア大学の人類学者の Patrick Vinton Kirch とニュージーランドのオークランド大学の人類学者である Roger Green は、homology と analogy という言葉で説明している [Kirch & Green 2001]。たとえば二つの遺物が類似している時、ホモロジーとは、同じ系統にあるために似ているという説明原理である。それに対しアナロジーというのは、単に偶然類似しているというだけの場合をさす。

Kirch らによれば、1960年代から70年代、つまり構造主義の台頭と同じころ、少なくとも北米の考古学界では、ホモロジーという説明原理は価値が下がり、アナロジーという説明に取って代わられた。ここで盛んになっていたのは、ニュー・アーケオロジーないしはプロセス考古学と呼ばれる潮流で、移動 (migration) という説明原理を拒否し、土着の文化発展というのを重視する立場を取っていた。つまり、人が移動するのに伴ってモノが運ばれる、という可能性を非常に軽視していた。

この「移動」に再び注目を向けた、いわば流れを変えた論文は、1990年に発表されたアメリカの考古学者 David Anthony の論文で、「考古学における移動：赤子と産湯」という面白いタイトルがつけられていた。そこで彼は、ここ二十年の間、つまり1970年代から80年代にかけて、考古学者は「移動」という説明原理を不当に軽視してきた。これは産湯とともに赤子まで流すような行為である、と言って、紀元前四千年紀の東欧をモデル・ケースとしてヒトとモノの移動の動態を描いてみせた [Anthony 1990]。

これに刺激を受けた考古学者、たとえばハンブルク大学の Stefan Burmeister は、ヨーロッパからアメリカに移住した移民たちの家屋を研究し、外側から見ると同じような家でも、内部の家具などにはもともと住んでいた所の特徴が残る、といったことを指摘した [Burmeister 2000]。

こういう90年代以降の考古学界の変化は、一種の歴史への回帰ではないかと私は思う。歴史に関心を持たない考古学などあり得ない、という向きもあるかもしれないが、長いタイムスパンでの歴史に本当に目を向けるならば、移動とか伝播といった説明原理は避けて通れない。それを意識的に避けてきたのは、やはり歴史から逃げてきたことになるのではないか、と思われる。

ついでながら日本について見ると、やはり同じような歴史への回帰が見られるように思う。

筑波大学にいる考古学者の Mark Hudson 氏によれば、1980年代の後半までは、縄文人が発展して弥生人になったという、土着の文化発展を重視する見方が有力で、縄文人と弥生人の出会いを異なるエスニック・グループ同士のインタラクションとして見るような人はほとんどいなかった。ところが、この流れを変えたのは、やはり1991年に書かれた形質人類学者・埴原和郎氏の、日本人の二重構造モデルについての論文だった。

これは、もともと日本列島に縄文人が住んでいたところに大陸から弥生系の移住者たちが入ってきて、その混合によって、いわば重なり合って二重の構造ができて、今の本州人になり、他方ではアイヌや琉球の住民の間には、縄文人の形質的特徴が比較的強く残っている、という内容の論文。埴原氏が縄文人を南方型モンゴロイドと考えた点はその後修正されつつあるようだが、このモデルは大筋では認められている [Hudson 1999; Hanihara 1991]。

このように、日本の先史に関しても、「移住」への関心というのが90年代になって再び高まってきているように見える。

伝播 (diffusion) という現象に焦点をしばるなら、イノベーションの伝播に関する Rogers の古典的研究 [1995] のほか、分子人類学者の Cavalli-Sforza らが提出している “cultural transmission” (文化の伝達) という概念 [Cavalli-Sforza & Feldman 1981] もまた、伝播についての新たな理論的研究として注目される。

言語学においては、ハワイ大学の Robert Blust が1999年に発表した「狐の嫁入り」という論文の中で、天気

雨のことを「狐の嫁入り」とか、あるいはそれに類する肉食動物の結婚式・性交・誕生などと表現する地域がユーラシア大陸からアフラカにかけて広く見られることに注目し、その説明原理として、次のような三つを挙げている。

- A. convergence (帰一、輻輳) または independent invention (独立発明)
- B. diffusion (伝播)
- C. common inheritance (共通の遺産)

そして、文化要素の分布と、それについての説明のされ方について、次のような表を出している。(Natural は、世界の他の地域にも見られる、という意味)

Type	Linguistically Related	Continuous	Natural	Explanation
1	+	+	+	C, A/B
2	-	+	+	A/B
3	+	+	-	B/C
4	-	+	-	B
5	+	-	+	A/C
6	-	-	+	A
7	+	-	-	C
8	-	-	-	nonoccurring

つまり、言語的に関係がある場合には共通の遺産という可能性が必ず現れ、連続的分布を示す場合には必ず伝播の可能性があり、ナチュラルな、すなわち世界の他の地域にも現れる場合には帰一または独立発明という可能性が必ずある、ということである [Blust 1999]。

ちょっと図式的すぎる難点はあるが、伝播の可能性ということを経験的に示したことは評価できる。

よく出される批判の一つに、人間集団の移動と、神話も含めた文化の伝播がどの程度重なるのか証明できないではないか、という問題がある。これは、もっともな批判。たとえば、かつてドイツの Gustav Kossinna は先史遺物から確認される文化領域を民族領域として解釈した。また Heine-Geldern はオーストロネシア語族の移動について書いた時に、三種類の形の異なる石斧を、三つの言語集団と結びつけた。つまり、円筒石斧とパプア諸語、有肩石斧とオーストロアジア語族、方角石斧とオーストロネシア語族という具合である。

しかし、現在の考古学は遺物を人間集団に結びつけることには慎重になっている。同様に、神話などの文化要素も人間集団と結びつく場合とそうでない場合がある。ただ、この問題には、どんな場合でも説明できるような万能のモデルとか法則というのは存在しない。やはり場合に依って考えていかないといけないのである。

ともあれ、こうした《歴史への回帰》という状況を踏まえて書かれたのが、先ほど触れた Kirch と Green の共著の『ハワイキ』というポリネシアの先史についての本である [2001]。この本の副題は「歴史人類学の試み」となっていて、人類学における歴史、それもフランスの社会史学派のようなのではなく、もっとタイムスパンの長い歴史、longue dur 仔の歴史を扱おうという、一つのマニフェスト、宣言になっている。著者たちは「歴史人類学」ではなくて「新・文化史」(New Culture History) にしようか迷った、と前書きに書いているほどだ。

この本で試みられているのは、人類学の三つの分野の知識を総動員してポリネシアの過去を復原したらどうなるか、ということである。その三分野とは、一つは考古学、もう一つは歴史的言語学だが、面白いことに、三番目に入っているのは比較民族誌、つまり民族誌の記述の比較である。この民族誌の記述という中には、神話なども入ってくる。

たとえばカーチは別の本 [Kirch 2000: 97 ミ 98] の中で、ラピタ文化、つまりポリネシア人の直接の祖先となったと見られる、特殊な土器を持つ紀元前 1500 年ころにメラネシアに現れた文化の担い手について、その社会

構造を考えている。原オセアニア語の語彙の復原によると、この人々は恐らくキョウダイの長幼の序にとっても重きを置いていたらしい。

そしてしばしば長子に財産とか知識が渡される。そうすると、年下の弟は仕方がないので出て行って、別の島に新たな居住地を作る。これがポリネシアの植民において大きい役割を果たしたのではないか、ということを考える。そういう目で見ると、ポリネシアの神話には兄弟の争いというのがよく出てくる。これはそういう社会構造が背景にあるのではないか、とそういうことを言っている。これなど、海幸と山幸の争いなどを考える時にも参考になるのではないかと思う。

このように、90年代に人類学と隣接諸科学で始まった、学際的な、つまりさまざまな学問分野を横断する形での歴史への回帰という動きの中で、神話から解き明かされる、あるいはヒントを与えられるような問題というのは少なくないのではないか。

この学際性という流れの他に、国際性というのも90年代以降の人類学の一つの特徴になっている。

ノルウェーのオスロ大学の人類学者 Thomas Eriksen とデンマークのコペンハーゲン大学の Finn Nielsen [Eriksen & Nielsen 2001] が指摘するのは、この背景にはやはりソ連の崩壊がある、ということである。これによって、旧ソ連・東欧の学者たちと西側の学者たちの交流が前よりも盛んになり、ロシアでどんなことが研究されているか、ということも一層広く知られるようになった。

たとえば、エリクセンらは挙げていないが、大語族の研究もそうしたうちのひとつだ。大語族というのは、これまでの伝統的な分類におけるインド＝ヨーロッパ語族であるとかオーストロネシア語族のような語族同士のうち系統関係があるのではないかと考えられる者同士をくくった、より大きいまとまりである。

そういうものとしては、ノストラティックが有名である。これは旧ソ連で研究が進められていた大語族の一つで、アフロアジア、インドヨーロッパ、ドラヴィダ、ウラル＝ユカギール、アルタイといった、ユーラシア大陸のかなりの語族をリンクしてしまう。

以上のように、1990年代以来の人類学における長いタイム・スパン [longue durée] の歴史研究は、分子人類学や社会学・メディア論からの影響を受けてなされるか、それとも、20世紀における歴史言語学の発展をふまえて、言語のまとまりに重点を置く傾向がみられる。こうした研究方法に加えて、田口氏の言及されている、語族横断的な文化要素の分布にも注目する文化クラスターのような研究もまた必要ではないかと思われる。

#### 引用文献

- Anthony, David W. 1990. Migration in Archaeology: The Baby and the Bathwater. *American Anthropologist*, 92: 895-914.
- Blust, Robert. 1999. The Fox's Wedding. *Anthropos*, 94: 487-499.
- Burmeister, Stefan. 2000. Archaeology and Migration: Approaches to an Archaeological Proof of Migration. *Current Anthropology*, 41(4): 539-567.
- Cavalli-Sforza, L. L. & M. W. Feldman. 1981. *Cultural Transmission and Evolution: A Quantitative Approach*. (Monographs in Population Biology; 16). Princeton: Princeton University Press.
- Eriksen, Thomas Hylland & Finn Sivert Nielsen. 2001. *A History of Anthropology*. London: Pluto Press.
- Hanihara, Kazuro. 1991. Dual Structure Model for the Population History of the Japanese. *Japan Review*, 2: 1-33.
- Hudson, Mark J. 1999. *Ruins of Identity: Ethnogenesis in the Japanese Islands*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Kirch, Patrick Vinton. 2000. *On the Road of the Winds: An Archaeological History of the Pacific Islands before European Contact*. Berkeley: University of California Press.
- Kirch, Patrick Vinton & Roger C. Green. 2001. *Hawaiki, Ancestral Polynesia: An Essay in Historical Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rogers, Everett M. 1995. *Diffusion of Innovations*, 4th ed. New York: The Free Press.

「モノと情報」班 B

天理参考館収蔵のラオス標本と天理教ラオス伝道について  
— 1965年～1978年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡—  
吉田裕彦（天理大学附属天理参考館）

キーワード：ラオス標本、ラオス伝道、自動車修理工場  
サトウキビ栽培、巡回医療活動、教育支援  
調査場所：天理大学附属天理参考館、天理教名古屋大教会信者詰所

Laos Collection in Tenri Univ. Sankokan Museum and Laos Mission of Tenrikyo

Hirohiko YOSHIDA (Sankokan Museum)

Keywords: Laos Collection, Laos Mission, Car Garage,  
Sugarcane Cultivation, Medical Mission, Training Program

1. はじめに

昨年(2003年)夏、「モノと情報」班より担当者の勤務先である「天理大学附属天理参考館」<sup>1</sup>(以下、天理参考館、当館などと略称)に今回の研究プロジェクトへの協力要請が寄せられた。確か、日本国内の博物館がメコン川流域地域で収集した標本情報を、それぞれの館が独自に管理するだけではなく、総合地球環境学研究所(以下、地球研と略称)を含めた各館がその情報を共有することにより、メコン川流域の文化について新たな視点を見いだしていくことが可能となり、その一翼を天理参考館で担当して頂きたいという内容だったと記憶している。

2003年3月末時点で、天理参考館が収蔵する東南アジア標本は3,441点。決して多いとはいえない点数である。さらにメコン川流域と地域を限定していくとその数はさらに少なくなる。地球研「モノと情報」班の天理参考館に対する期待は、1930年創設という当館の沿革を鑑み、比較的収集年代が古い標本の活用であった。

検討の結果、当面はラオス標本に焦点を絞ることとし、ラオスに政変が起き、1975年から1989年にかけて鎖国状態となる以前に収集した標本もしくは1975年以前に使用されていたとみなされる標本情報を整理することから始めようということとなった。

2. 天理参考館収蔵のラオス標本

メコン川流域3カ国(ラオス、タイ、カンボジア)から収集された天理参考館の標本は、担当する学芸員が調査に出向いて集めたという例は少なく、国内研究者や天理教関係者の他、現地で収集活動を行ったコレクター達から一括して寄せられた標本が主となっている。1975年以前に使用されていたとみなされる標本を抽出するにあたり、それぞれの標本の収集経緯を考慮していくと、収集者の手元にある程度の期間、保管された後に天理参考館に寄せられた標本も相当数見受けられる。このような事情を考慮した上で、1986年までの収集標本を調査対象とすることとした。

天理参考館の標本管理は基本的に標本(資料)カードと台帳によってなされている。標本(資料)カードは地域(東南アジア、南アジアなど大地域分類)ごとに分類整理され、台帳は登録順に標本情報が書き込まれている。天理参考館では現在、標本情報のデジタル化作業が進行中で、中国や台湾、アフリカなど約半数の標本がデジタル・データ化されてきている。しかし、今回のプロジェクトで対象とするメコン川流域3国を含む東南アジア大陸部の標本情報については、デジタル化作業に着手されていなかった。

「モノと情報」班では作業効率を高めるために、まず、1986年までに収集された東南アジア大陸部の標本リストを作成するところから着手した。その結果、東南アジア大陸部の標本は全部で768点あり、うち、メコン川流域3国からはラオス標本35点、タイ標本576点、カンボジア標本49点がそれぞれ収蔵されていることが判

明した。

ラオス標本 35 点の詳細については次年度の報告に譲るが、標本収集に携わった人々とその時期を列挙すると以下ようになる。

当時、大阪市立大学教授であった岩田慶治氏から 1958 年に寄せられた 2 点が、天理参考館が初めて収集したラオス標本であった。1963 年石井健一氏収集の 1 点は第三次大阪

1958年	岩田慶治	2点
1963年	石井健一	1点
1965年	森井敏晴	8点
1968年	森井敏晴	4点
1969年	森井敏晴	1点
	佐藤善昭	1点
1971年	丸川仁夫	11点
	宮城忠	4点
1975年	森井敏晴	1点
1978年	森井敏晴	2点
計		35点

市立大学（カンボジア）調査団から寄せられたカンボジア標本に混入していた。そして、1965 年から 1978 年にかけて、5 度にわたり計 16 点の標本を寄贈した森井敏晴氏は、当時天理教名古屋大教会長の職にあって、天理教のラオス伝道に若き情熱を燃やした宗教家であった。1969 年にラオス標本を 1 点寄贈している佐藤善昭氏もこのラオス伝道の関係者である。また、1971 年に 11 点のラオス標本を寄せている丸川仁夫氏は森井氏の学生時代の指導教官であり、当時天理大学教授兼天理参考館民俗部長であった。丸川氏収集の標本は森井氏のラオスでの伝道活動を視察した際に収集したものである。宮城忠氏は当時、東京在住のコレクターで 1971 年にラオス標本 4 点を当館に寄せている。

天理参考館収蔵ラオス標本の年代別収集者

#### 天理参考館収蔵ラオス標本の年代別収集者

数少ないラオス標本であるが、その中で特に際だった存在感を見せているのが、森井コレクションである。1975 年に生じたラオス政変以前のラオス情報を国内博物館に収蔵する標本を通して読みとろうとした「モノと情報」班は天理参考館に寄せられたラオス標本から、1965 年から 13 年間に亘って天理教がラオスで展開していた伝道活動の存在に出くわしたのであった。

以下に天理教が展開したラオスでの伝道活動の概要を紹介し、今後の研究の課題を展望してみたい。小稿は、森井敏晴氏および、ラオス伝道にかかわった名古屋大教会関係者との面談で知りえた情報や提供していただいた資料（史料）をもとに構成している。

### 3. 天理教のラオス伝道

上に記したように、森井氏が天理参考館にラオス標本を寄贈した経緯は、自身のラオスでの伝道活動が発端となっていた。

森井氏がラオスで天理教の伝道活動を志したきっかけは、天理教名古屋大教会が経営していた「なごや幼稚園」の園医でもあった小川蔵太医師から天理教団による救援活動を求められたことから始まる。

小川医師は軍医として第二次世界大戦中ラオス戦線に従軍し、後、再度ラオスに赴き首都ビエンチャンで唯一の日本人医師として診療所を開設していた。が、困窮する現地の人々の状況に耐えかねて、天理教団による救済活動を仰いできたのだった。

1950 年代から 1960 年代にかけて、天理教団では広く海外へ雄飛すべき時局であることが打ち出され、教団をあげて海外伝道に取り組む姿勢が示されていた時期でもあった。当時の天理教代表者であった中山正善二代真柱による陣頭指揮の下、その氣勢は教内全体にいきわたっていたといっよいであろう。

そのような空気の下、森井会長は小川医師の救済要請を受けたのを機に、ラオスを名古屋大教会の海外での布教拠点とする決意を固めていったのであった。森井会長自身が現情視察という名目で、初めてラオスを訪れたのは 1968 年 3 月であった。この時、森井氏は現地での協力者と意見を交換し、今後の伝道活動の方策を検討して帰国している。そして 1970 年 9 月には、かねてより申請していた天理教の「布教認可」がラオス王国宗務省から下り、ラオスでの伝道活動に着手する道順が敷かれたのだった。

森井会長は、ラオスに赴いていきなり伝道活動を展開できると思うのは間違いで、いろいろな活動を通して結果的に伝道につながってくれば良しとするという考え方から、ラオス社会と関わっていった。その過程では、

ラオスの社会事情を学びながら、ラオスで必要とされる活動事業を探りつつ、さらに事業資金を捻出することまで考えていかなければならなかった。

### 1) 自動車修理工場 SILJA の設立

名古屋大教会からの資金持ち出しにも限界があるため、そこで考え出されたのが、自動車修理工場を核とする合弁会社 SILJA（ラオス日本産業株式会社 SOCIETE ANONYME DE DEVELOPPEMENT INDUSTRIEL LAO JAPONAIE）の設立であった。当時、名古屋市でガソリンスタンドや自動車工場などを手広く経営している「山本油店」社長の山本氏の母、山本さい氏による積極的な協力が、1970年12月に設立された SILJA の運営に大きな役割を果たすこととなった。2億円もの多額の資金を出資した山本油店は、ラオスでの布教経費を賄っただけではない。ラオス人青年を日本に招聘し、自動車修理技術を習得させる窓口であり、さらにラオスに帰国した彼らに就職機会を与える場として、SILJA がその受け入れ母体になるなど多大な貢献を果たしていた。また、当時のビエンチャンには、満足のいく自動車整備工場がないにもかかわらず、国内の輸送移動の手段は自動車しかなかったため、自動車修理の需要は大きかった。

### 2) サトウキビ栽培

ビエンチャンでの自動車修理工場 SILJA の運営が軌道に乗ってきた1974年、SILJA 内に農業開発部が設けられた。当時、ラオス国内で消費されていた精製白糖は、その全量を隣国のタイ等からの輸入に頼っていた。白糖の全量を国内自給で賄えるようにしたいとのラオス政府の意向、協力要請を受けて、SILJA では製糖工場設立を目標としたサトウキビ（甘藷）の育種栽培に着手していく。

当時のラオスは農業国とはいえ、素朴な一次産業の域を出ず、サトウキビ栽培に適した自然に恵まれながら、白糖製造に向けた本格的なサトウキビ栽培はなされていなかった。もっとも、ラオスには在来種で糖度の低い細茎種のサトウキビが見られ、それを用いた黒糖製造は行われていた。

SILJA では、在来種サトウキビおよび、沖縄県農業試験場の全面的な協力を受けて入手した11種類のサトウキビ種苗のテスト栽培を始めた。サトウキビ栽培のパイロットファームも、SILJA の庭から、ポントン農場およびバンホーン農場の開墾とそこでの本格的栽培へ、さらにバンマックナオ農場へと試験農場を広げていった。三年間をかけたテスト栽培の結果、糖度計のブリックスが25°を示したNCO系サトウキビが、ラオスの風土に最も適した製糖用のサトウキビだと判明した。SILJA の手がけたサトウキビ栽培は、森井氏の手足となって活躍した菅原親一氏や金森真一氏の存在が大きい。また、菅原氏はサトウキビ栽培の経過を詳細に記録した「菅原日記」を残している（資料-1, 2を参照）。

SILJA が作成した三年間の実験データと製糖計画に基づき、ラオス政府は1977年に日本政府に対して製糖工場建設の援助を要請している。この要請を受けた日本政府は、外務省と農林省共同による現地調査を実施し、その結果、製糖計画への日本の援助が確定した。森井氏をはじめ、ラオス伝道に携わった名古屋大教会の関係者の、この時の喜びは大きなものであった。だが、この時期のラオスは、ベトナム戦争のあおりを食っての内戦状態から、1975年の共産主義政権誕生へ、さらに内戦終結後に樹立された臨時連合政府が革命政府へと変わる、まさに激動の時代にあった。共産主義政権樹立後も、SILJA の実働部隊はビエンチャンのラオス布教所に残り、配給制度や強制労働への参加などで苦勞をしつつも、事業活動を続けていたが、突然の政策変更によって、1978年の3月1日に布教所所員の全員引き上げを通告される。こうして、砂糖製造計画はその開花を前に泡沫と期してしまった。

### 3) 巡回医療活動

森井氏がラオス伝道に携わった二年後、1970年1月から3カ年にわたり、天理よろづ相談所病院海外医療科の山本利雄医師を隊長とする部員5名が、ビエンチャンから70kmの地点に位置するバンクーンで医療活動を展開した。それは、天理教の教えに基づき、世界中の人間が自分たちと同じ兄弟との認識から医療の手の届かない人々を救いたいとの人道的な立場に立ってなされた医療活動であった。このラオス巡回医療隊は、現地の医療の手助けをする形で最新機器、薬品を携えて、難民キャンプを巡回した。上述の森井会長は、ラオス巡回医療隊派

遣を橋渡しした中心人物でもある。

ラオス巡回医療隊の活動は、1976年11月に約2週間の期間で送られた第8次隊まで続いた。巡回医療隊の活動とは別に、初代隊長の山本利雄医師は1974年10月に3週間ラオスに赴き、日本政府の今後の医療援助についての視察を行っている。また、巡回医療隊派遣の後半に隊長として陣頭指揮に立った天野博之医師もまた、1974年11月～1975年3月まで、タゴン医療センター<sup>2</sup>に滞在し技術協力を携わっている。革命後のラオスが諸外国に再び門戸を開いた1980年代後半以降も、天野博之医師はJICA専門家（ラオス国保健省保健医療協力計画アドバイザー）となるなど、ラオスとの関わりを保ち続けてきた。

天理教が1970年代に開始したラオスでの巡回医療活動の意義については、ラオスもしくは東南アジアにおける国際医療援助の歴史や今日までの展開とあわせて、むしろ「人類生態」班のかたがたにお教えいただければと考えている。

#### 4] 天理教の伝道活動と教育援助

森井氏を代表とする天理教名古屋大教会がラオスで伝道活動を展開するに当たっての方策の核として、先に述べた合弁会社SILJAの設立とその運営があったわけである。そして、SILJA設立と同時に着手したのが、ラオス人青年男女に対する教育援助だった。同時にそれが天理教伝道の主たる柱となっていった。

1968年、森井氏による最初のラオス訪問の翌年（1969年）には、ラオスからラオス人女子5名、タイ国籍の男子1名を招聘し、天理大学選科日本語科で日本語を習得させ、その後、女子5名は天理よろづ相談所病院で看護婦見習いとして研修させ、1名の男子は山本油店で自動車修理技術を習得させている。と同時に滞日中に天理教の教理も学ばせている。天理教の場合、天理教布教師としての資格は、本部が置かれている天理でしか受けることができないからである<sup>3</sup>。

以来、1972年までの間にラオスからの留学生は13名を数えている。後日、ラオスに赴いた巡回医療団の活動に看護助手として惜しめない協力を果たしたラオス人女性や、ラオス布教所長および布教所を支える要員、政変後には、フランスやアメリカ、オーストラリアに避難したラオス人コロニーで信仰を続けた人々も、これらの受け入れ留学生の中から輩出した。そして、その信仰は次の世代にも受け継がれており、1996年時点でのラオス人よふぼく（信者）は145名に上っている。

#### 4. 本研究の展望と課題

天理参考館にラオス標本を寄せたコレクターの来歴を辿る作業段階で、ラオス政変直前に展開していた天理教のラオス伝道の存在に出くわすこととなった。小稿では、天理参考館のラオス標本を中心とした東南アジア大陸部標本整理の進捗状況を報告すると共に、天理教名古屋大教会が行ったラオスでの伝道活動の概要紹介を試みた。

最後に、本研究を進めるに当たり、当面の展望と課題を簡単に検討し、小稿のまとめにかえることとする。

まず、天理参考館収蔵のラオス標本を含む東南アジア大陸部標本情報のデジタル・データを作成することを主眼にした標本写真の取り込みを行い、デジタル・アーカイブズの構築を目指す。今年度で作成した収蔵標本の基礎的データをもとにした一点ずつの写真撮影を予定している。そして、各標本を地域別や機能別に分類整理する作業と共に、標本写真を添付してデジタル・データを仕上げることであればと考えている。

そして、ラオス政変直前まで展開されていた天理教ラオス伝道の実態に焦点を当てて、当時ラオスに関わっていた邦人宗教家達の活動を浮き彫りにしていきたい。幸い、今年度の調査で、ラオス伝道に携わりその中心的な役割を担った天理教名古屋大教会に、当時の資料（史料）が多数保管されていることを確認することができた（添付資料参照）。次年度ではこれらの資料（史料）を繙くことにより、上に述べたそれぞれの項目「自動車修理工場SILJAの設立」、「サトウキビ栽培」、「巡回医療活動」、「天理教の伝道活動と教育援助」を裏付ける具体的な情報を提示していければと考えている。また、その資料（史料）整理を進めていく中で新たな活動項目が出てくる可能性も秘められているであろう。

さらに、その伝道活動の項目に含まれているサトウキビ栽培や巡回医療活動などは本プロジェクト他班の研究領域ともリンクする可能性があり、より詳細な情報の発信に努めていきたい。

また、担当者自身がラオスで展開した天理教の伝道活動の現場を踏査し、名古屋大教会が保管していた資料（史

料)の裏付けを確認したいと考えている。併せてラオスでは、担当者の本業である博物館標本の収集に携わることももくろんでいる。当面の目標とする収集標本対象および調査対象は、昨秋担当者が執筆した「祖霊像・精霊像の坐り方についての一考察」[吉田 2003]の中で取り上げた「両膝立て坐り」の坐像表現を生み出す背景ともみなされる身体表現を取る時に使われている「背の低い椅子(尻突き椅子)」である。現地での坐り方の実態や坐るモノの変化などの観察から、新たな議論の展開が期待できるかもしれないと考えている。

#### 参考文献

天野博之 2002「第6章 保健と医療」西澤・古川・木内編『ラオスの開発と国際協力』めこん。

山本利雄 1971『メコンの渇きーラオス巡回医療班の記録ー』講談社。

天理大学おやさと研究所編 1997『改訂天理教事典』天理教道友社。

天理大学附属天理参考館編 「事業概要」2003『天理参考館報』No.16。

吉田裕彦 2003「祖霊像・精霊像の坐り方についての一考察」『天理参考館報』No.16

天理大学附属天理参考館

#### 注

<sup>1</sup> 天理参考館は世界の生活文化と考古美術を扱う人文系の博物館である。創設は1930年で、海外に渡り、天理教を広めようとする人々が、諸外国の生活習慣や歴史などの知識を深めることを目的に天理外国語学校(現、天理大学)内に設けられた。創設者は中山正善天理教二代真柱。2001年の秋、現在の建物に移転。

<sup>2</sup> 革命以前に実施された、タゴン農場開発プロジェクトに呼応しての同地域住民の保健医療に貢献した中小病院運営プロジェクトが、タゴン医療センタープロジェクト(1968年4月～1975年3月)である。ラオスにおける日本の保健医療分野での援助のうち、プロジェクト方式の技術協力として、上記のタゴン医療センタープロジェクト以降では、公衆衛生プロジェクト(1992年10月～1998年9月)、小児感染症対策プロジェクト(1998年10月～2001年9月)などがある[天野 2002:20-21]。

<sup>3</sup> 現在は、ラオス語に翻訳された教典と、天理教教会本部で行われる別席を聴講するラオス人を対象としたラオス語の録音テープがラオス人信者のために用意されている。

## 資料－１：【天理教ラオス伝道活動関係資料】

ファイルのタイトル		内容メモ
「砂糖キビ栽培」菅原日記 1・2	昭和50年(1975年)	*No.1:記録帳 memo Sugawara S.50.1.1 *No.2:記録帳 memo すがわら S.50.9.19
「砂糖キビ栽培」菅原日記 3・4	昭和51・52年 (1976・77年)	*菅原親一 S.51.3.3 *S52～
「砂糖キビ栽培」菅原日記 5・6・7	昭和50年(1975年)	*給与支払帳、農業開発部 *写真 1) SILJA 農場 2) プォントン農場 3) バンマックオ農場 *3月20日撮影
砂糖プロジェクトに関する 提案書	1976年8月?	津留田ファイル 「砂糖プロジェクトに関する提案書」、 Sugar project in Laos, Nissei Sangyo Co.LTD, 砂糖キビ農園での試験栽培等の資料
ラオスに於ける砂糖キビ成 育記録	1977年1月	・「ラオスにおけるさとうきびの成育記録と資 料」日晴産業株式会社 ・Ministere De L'Agriculture des Forets et de L'irrigation による統計資料など
糖業計画(和文)	1976年8月	「砂糖プロジェクト・・提案書」等と内容は同 じ
糖業計画(英文)	同上	
合弁計画書	昭和49年12月 (1976年)	尾張旭市霞ヶ丘町南210 (株)日晴、代表取締役 森井敏晴 黒糖、タピオカ・チップス、シトロネラ香料油 製造などの計画について
海外医療対策委員会記録Ⅰ		1970～75年の5年間ラオス 医療薬品一覧、委員会名簿 こんご医療伝道の資料も含む
海外医療対策委員会記録Ⅱ		昭和47～53年までの議事録
海外医療対策委員会記録Ⅲ		コンゴ憩いの家の閉鎖および移管について
La Mission du Laos 1909(明 治42年)		1881年よりのフランス・カトリック教会による 布教活動の記録(de la Sociee des Etrangeres de Paris

「光は現れた」－東北タイとラオス伝道の歴史－	Claudius BAYET (クワディウス・バイエ) 元タイ・ウボン司教、1981年	訳 津留田正昭 2003年8月
ラオス人民民主共和国視察記録	8月29日～9月17日	ラオス撤退から11年後の再訪 森井、金森など。 現地関係機関との折衝
『天理教海外伝道の一形態－伝道地ラオスとの十年－』	平成14年7月10日(2002年)	森井敏晴著、私家版 論文の一部？
ラオスにおける薬品植物の開発	平成14年3月27日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラオス薬用植物事業（現状に関する事情調査のまとめと、事業計画）</li> <li>・「医療安全総合研究推進（普及啓発）事業」シンポジウム・プログラム「ミャンマーにおけるケシ代替植物の開発」（H14年2月28日、@虎ノ門、発明会館）：厚生科学研究推進事業「ミャンマーにおけるケシ代替植物の研究班」＜日本薬剤師研修センター理事山本章、同センター佐竹元吉＝NPO MSMP、ナチュラルリスト萩巣樹徳</li> <li>・ツルニンジン栽培法</li> <li>・The Pharmaceutical Development Centerのちらし</li> <li>・今井－森井、金森のファックス</li> <li>・ラオス保健省、The Pharmaceutical Development Center（'96,10,30）の薬品リスト資料</li> <li>・語学センターの入学申込書</li> <li>・Medicinal Plants in Lao People's Democdratic Republic Survey Reports (No.2)</li> <li>・中国語の薬用植物事典？コピー</li> <li>・「ラオス人民民主共和国の薬用調査報告書（第II報）」</li> <li>・List of Medicinal Plants of Lao PDR</li> <li>・「ラオス産民間薬リスト」（入手2001年6月、ビエンチャン）</li> <li>・「ラオス産民間薬リスト（追加項目）、情報を</li> </ul>

		<p>文献と照合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ラオスの生薬（2001 年今井正治氏購入）」</li> <li>・地図「タイ～ラオス～中国（雲南）ルート」</li> <li>・名刺類コピー</li> </ul>
United Nations International Drug Control Programme	Sept.200～Aug.2004	2001 年～2004 年の 3 年間の国連プログラムの計画書
ラオスの宗教事情調査	平成 13 年 8 月 (2001 年)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「金森理事ラオス報告」（1993 年 8 月 28 日～9 月 12 日）</li> <li>・「ラオス事情と日・ラオス関係」（H13 年 4 月、在ラオス日本大使館）</li> <li>・「ヴィエンチャン案内」（2001 年 5 月、在ラオス日本大使館）</li> <li>・VT:11236（ラオスで活動する NGO に関する規則）（1999 年 7 月 8 日、副首相兼外務大臣ソムサワット・レンサワット）</li> <li>・旧「SILJA」株主会議（2001 年 7 月 11 日）など、株式譲渡に関わる関係資料</li> <li>・ラオス宗教事情に関する 8 月 2 日～15 日までの聞き取り調査メモ、それをまとめた「ラオス報告」、「拠点設立に関する情報」、建築資材</li> <li>・「メコン河」（文・写真：鎌澤久也）『エクセレントワールド』より切り抜き</li> </ul>
「ラオスの開発と国際協力」天野博之	・2002 年 2 月	天野博之（ラオス国保健省保健医療協力計画アドバイザー、JICA 専門家）「ラオスの開発と国際協力 第 6 章 保健と医療」
「教育と開発－ラオスの教育開発－」瀧田修一	・2002 年 7 月 27 日	瀧田修一（ラオス国立大学教育学部所属研究員、国際交流基金派遣フェロー）「教育と開発－ラオスの教育開発」@ラオス研究会でのレジュメ
「ラオス人民民主共和国の動静」	ラオス人民民主共和国の動静－主として、過去 3 ヶ年の政治、社会経済①2001	<ul style="list-style-type: none"> <li>①山田紀彦「安定を模索する党指導部」</li> <li>②山田紀彦「揺らぐ安定神話」</li> <li>③木村哲三郎「強力な引き締め策でインフレ鎮静」</li> </ul>

	年、②2000 年、③1999 年	
--	----------------------	--

## 資料－２：砂糖キビ栽培関係（写真）

「砂糖キビ栽培」菅原日記 6・7 内

農場	撮影日	品種	入手先	入手者、その他
SILJA	S.50.10.31	RK68-156	沖縄	久貝氏
	S.50.10.31	NC310,POJ2726, F146,F148,Q76, H56-7209,RK65-37, RK68-368	沖縄	岡本氏 (NC310 のみ穂 が出る)
	S.50.10.31			9 月 植 え は NC310、 11 月 NC310、RK は全部穂が出る
SILJA 庭シ トロネラ	S.50.10.31		台湾	西岡氏、金森氏
プonton 農場	S.50.10.30	CO 系、H 系	ノンカイ	SILJA 農業開発部
	S.50.10.30	品種名を SILJA とす る	インドネシア（東京 経由）	岡本氏
	S.50.10.30	そば粉の種	日本より	SILJA 農業開発部
バンホーン 農場	S.50.11.2	CO 系,H 系 計 4602 本 写真は 8 枚	ノンカイ	SILJA 農業開発部
バンマック 農場	S50.10.26	CO 系,H 系 NC0310, RK68-6,RK68-32, RK68-142,RK68- 155BOK（ウドン） 写真 11 枚	バンホーン農場、 SILJA 黍ストック農 場	SILJA 農業開発部
	3 月 20 日 撮影	キビ新植予定地 写真 22 枚		

## 「モノと情報」班 C

**原野農芸博物館のラオスコレクション**  
**小島 摩文（鹿児島純心女子大学）**

キーワード：原野農芸博物館、ラオスコレクション、原野喜一郎、馬と道具

**The History of Harano Agricultural Museum and Its Laos Collection**

**Mabumi, KOJIMA (Kagoshima Immaculate Heart University)**

Keywords: Harano Agricultural Museum, Laos collection,  
 Kiichiro HARANO, Material Culture with Horse

## 1. はじめに

「モノと情報」班の全体報告でもふれられているように、原野農芸博物館のラオス・タイ資料は国立民族学博物館の同地域収集資料をしのぐ点数となっており、国内のこの地域のコレクションとしては欠かすことのできない資料となっている。

私は 1994 年から 1997 年まで原野農芸博物館に学芸員として勤務しており、タイの民具調査・収集にも参加し、また原野農芸博物館退職後も、民具収集の中心メンバーである山崎久勇氏・澤田氏のラオス調査に同行した。こうした経緯から、小稿では原野農芸博物館の沿革やコレクションの背景・意義について報告したい。

## 2. 原野農芸博物館

原野農芸博物館の母胎は、原野喜一郎が昭和 33（1958）年に大阪府豊中市に開いた原野農園である。これは農業を経営しながら、一般に敷地を開放してレジャー施設とした農園である。

昭和 39（1964）年には、門真市の葛岡亨氏より江戸時代に建造された家屋の寄贈を受け、一年がかりで原野農園に移築し、この旧葛岡邸の中に農具や民具などを展示して服部農業博物館として開館した。折しも日本人の生活様式が大きく変る時期にあり、農具や民具を集めるにはまたとない機会であった。

昭和 43（1968）年には原野農芸博物館と改名。後に組織を財団法人として「財団法人 原野農芸博物館」となる。当時、大阪市立博物館の学芸員であった岩井宏實氏の編集により『原野農芸博物館図録 第 1 集 日本の民具 - 農具編 -』（1968）、『原野農芸博物館図録 第 2 集 日本の民具 - 衣食住編 -』（1969）を発行。その後 1969 年から 1978 年にかけて図録を第 11 集まで発行する。また、1977 年には第 1 回近畿民具学会総会が原野農芸博物館で開催され、関西の民具研究の中心的役割を果たした。この十年は原野農芸博物館の黄金時代ともいうべき時期であろう。さまざまなブレンを迎えて充実した活動を行っていた。

この間、原野喜一郎は奄美大島、沖縄に興味をむけ、さらに海外へと博物館資料の収集地域を広げていく。1975 年には中国雲南省の西双版纳を旅行し、中国の少数民族と日本との関係に関心を寄せるようになった。

さらに、昭和 63（1988）年より鹿児島県奄美大島住用村に博物館を移設、平成 4（1992）年には、財団法人奄美文化財団を設立し、原野喜一郎が理事長に就任する。翌年には財団を運営母体として原野農芸博物館を登録博物館とする。こうして原野農芸博物館は、歴史系の博物館として鹿児島県で唯一の登録博物館となった。同館の礎を築きあげた原野喜一郎は 2001 年 7 月 22 日に 94 歳で逝去した。

## 3. ラオスコレクション

原野農芸博物館のラオスコレクションは、原野喜一郎の長男でもある現館長の原野耕三氏が中心に収集した資料である。1988 年の大阪から奄美大島への博物館移転作業が一段落すると、耕三氏は博物館の資料の充実を図るために、海外資料収集を計画し、次第に収集対象地域を広げていく（以下の表-1 を参照）。



#### 4. 展望

原野農芸博物館のラオスコレクションは、生活道具全般に渡ってまんべんなく集められているので、さまざまな研究に利用することができる。モノと情報班による「道具の検討会」と絡めれば、漁具、カゴ類、狩猟道具、利器（農具、大工道具その他）など、それぞれに、同じ用途で用いられる道具を取り上げて見ても、豊富な資料数ゆえに微細な地域差の比較研究などが可能であろう。

私は、原野農芸博物館在任中に会ったメコン河流域地域の馬具についても独自に研究を進めてきた。生態史プロジェクトのなかで、同地域内での馬具利用に関する情報を、広く集めていければと考えている。写真や名称、使役されている馬の性別、馬の入手先など、簡単なデータでも、広範囲に情報を集めれば、これまで見過されてきた馬の利用のあり方を、資源管理という観点から明らかにできると考えている。

「モノと情報」班C

黎明館川野資料の成立背景とその内容－漁具を中心に－

橋村 修 (国立歴史民俗博物館外来研究員)

キーワード：川野和昭、民具、ラオス、竹の焼畑、漁具、

**The feature of KAWANO Kazuaki' s collection and the view point of Classification of Fishing Techniques**

**Osamu HASHIMURA (National Museum of Japanese History,)**

Keywords: KAWANO Kazuaki, Material Culture, Laos,  
Slash-and-Burn System with Bamboo, Fishing Techniques

1. はじめに

戦後のラオスの生業を軸とした民族調査、民具収集は、岩田慶治らによる稲作民族文化調査団調査が大きな成果として知られている。しかしながら、国内情勢の変化で80年代から90年代前半にかけて、村に入っただけの収集調査が思うようにできない空白の時期が続いた。そうした中で1990年代後半から鹿児島県歴史資料センター黎明館の川野和昭氏（以下敬称略）は精力的にラオス北部の山村を中心に焼畑や竹、生業、儀礼の各種調査を行い、約600～700点にもものぼる民具類を収集した。川野の蒐集したモノ資料は、稲作文化調査団に続く大きなコレクションとして評価されている。

本稿では、川野が90年代後半以降にラオス関連のモノ資料（以下では川野資料と記す）を何故蒐集するようになったのか、その研究遍歴と研究視座を概観しながら検討を進める。あわせて、川野資料の内容に関して、執筆者が関心を持つ漁具と漁法を取り上げ、漁具から歴史性を読み解く方法、また執筆者の今後の調査方針などについて展望していく。

2. 川野のラオス資料収集調査までの研究の遍歴と視座

まず、川野和昭がラオス調査に到るまでの研究履歴について概観する。川野は1949年鹿児島県曾於郡志布志町四浦の生まれで鹿児島宮崎両県境の山中の自然の中で育った。高校では機械科に学び、大手電機メーカーに就職した。川野のモノの構造、製作工程を詳細に把握する眼はこの時期に培われたといえる。在職中に國學院大學第Ⅱ文学部（夜間部）に入学し国文学、民俗学を専攻した（指導は白田甚五郎教授）。1973年、鹿児島県高等学校教員として採用され奄美大島へ赴任した。そこで、山下欣一らと出会い南西諸島の民俗研究を、また、小野重朗、村田熙を中心とした鹿児島民俗学会に参加し、とりわけ小野からの影響を大きく受け [川野 2002]、生業や農耕儀礼に関する研究を進め、その民俗分布とその差異をとらえる方法を会得していった。川野は小野を生涯の師と仰ぎ、小野の諸説を発展的に乗り越える研究を進めているといえる。

1980年には、鹿児島県歴史資料センター黎明館開館準備室に配属され、民俗展示を担当した。1985年から教育現場に戻るが、その間、坪井洋文によるイモ正月の抽出、稲作単一文化論の再考の議論に多くの影響を受けながら、南九州から九州山地（五木など）、トカラ列島での焼畑調査研究を進めている。川野が近年、赤坂憲雄らと共に提唱している雑穀文化や山の文化を基軸にした日本文化の多元性（「ひとつでない日本」）の議論は、坪井からの影響を大きく受けているといえよう。執筆者は、高校時代の1989年頃に川野の授業（古文）を受講していた。高校生だった我々に、日ごろから五木村採訪のデータを坪井の諸説と重ねて講義していた川野が、坪井急逝の知らせを涙ながらに語っていたことを鮮明に覚えている。1990年代後半に「日本でない南九州や南西諸島」の文化の淵源を求めてラオスをはじめとした東南アジアへ旅立った川野の研究姿勢は、坪井洋文の存在を抜きにして語ることはできないといえる。

1994年には再び黎明館へ復帰し、特別展『鹿児島・竹の世界－環シナ海の視座から－』を担当、竹の重要性

についてアジアを視野に入れた調査研究を本格的に進め始めた [川野 1995]。それを契機にして、1996年3月に自費でラオス調査を開始し、その後も1996年12月～1997年1月、1997年10月～11月、1998年5月～6月、1999年4月～5月と5回に亘って調査を重ねている（2003年12月～2004年1月は地球研からの派遣）。このように川野は、ラオスで得た竹の焼畑の知見や各種蒐集資料を南九州・南西諸島と比較分析しアジア世界の共通性を見出している。また、自身の研究姿勢も南九州から南西諸島の民俗学から比較民俗学、農学などの隣接分野などとの交流へと広く展開している。なお、一連のラオス調査の成果の一部は、平成10年の『海上の道』展として公開されている [川野 1999]。

川野のラオス調査の方法は、一村を定点的に長期間にわたって調査する文化人類学者の手法とは異なり、南九州から南西諸島の民俗文化を精査した眼差しで一村を2日から3日程度の短期間で調査しながら広域的に歩き、できるだけ民俗分布を把握することにつとめることを特徴としている。そして、ラオス調査で得た生業、民具、儀礼などの内容を、常に南九州、南西諸島へフィードバックしながら検討している。また、竹の焼畑に関する一連の調査成果は、民俗学や文化人類学の枠を超えて熱帯農学や林学の分野からも注目されている。

### 3. 漁具への眼差し—ラオス漁具と近世近代日本の漁具との比較と展望—

#### 1] 漁具から歴史をよむ方法

ここでは川野資料から読み取れる諸問題のうち、特に漁具について、その見方も含めて検討していく。川野は南西諸島とラオスの共通性をモノの類似性からとらえ、稲の道や海上の道などの文化伝播の可能性を見通している。その見通しは南西諸島と東南アジアの交流史の一齣ともいえる。しかし、その方法は地域差をとらえることに主眼をおいているため静態的な把握にとどまり、モノから歴史的な展開をどう読み取るのかについては川野自身も課題であることを述べている。では、モノからどのようにして歴史を見出せるのだろうか。これまでも考古学の遺物データと民具との比較研究が進んでいたが、近年では中世や近世などの文献史料や絵画資料を用いた研究が進みつつある。この動きには、澁澤敬三のもと宮本常一らがまとめた『日本常民生活絵引』の刊行や80年代の網野善彦を中心とした社会史の隆盛が背景にあった。

漁具や漁業技術の歴史的な展開については、真鍋篤行 [真鍋 1997] に代表されるように考古資料と中世近世の文字史料、絵画史料を組み合わせた方法が示されている。つまり、絵画史料は、明治期の『日本水産捕採誌』や各県の明治期水産図誌（明治16年水産博覧会で作成）と近世浦方史料、近世漁場争論図を比較すると、近世期⇒明治期⇒現代の漁具の変化を読み取ることができるのである [藤塚 1998]。

戦前の台湾、中国、東南アジアでこうした手法でモノの歴史をみるためには、南洋協会やフランス、イギリス統治時代の各種資料を用いることになるが、基本的に無文字社会で記録を残す習慣のない地域が多いため、地元の人々自身による記録資料は皆無に等しい。しかし、ラオスなどでは伝統的な漁撈を残している内水面漁業が展開していることから、現状把握や聞き書きを徹底して進めると、過去60年程度のモノの歴史を復元することも可能である。その際、聞き取り内容と日本の近世近代の伝統漁具や漁法、漁場利用慣行を描いた図説や史料を参照することで日本とラオスの共通性や違いについて具体的な姿をとらえる可能性もある。

#### 2] 調査の視点と川野資料

ここでは漁具を調査する視点について、川野資料や川野の調査記録と関わらせながら述べていきたい。

##### (1) モノをみる—漁具材質の変化—

漁具をみる視点を列挙していく [日本学士院日本科学史刊行会編 1959] [渋沢 1962]。釣糸の場合は、糸→絹麻→テグス輸入と応用からナイロン製糸への変化をおさえていく。また、漁具の材質に関して木製（竹）から近年ではプラスチックへと変化している点について、どの漁具がプラスチックに変化しやすく、また漁具は竹製のままだ注目する必要がある。これは網の材質の変化（つる網（中世）苧麻網・藁網⇒化学繊維）も然りである。これまで多かった延竿（一本竹竿）から持ち運びに便利な継竿に変化していく傾向もある。つまり大型漁具を分解して持ち運びやすくし、村外に出て移動漁業（遠出の漁が進展）をすることも容易になる。これは、竿だけでなくいろいろな道具にも応用できる。また、川舟調査ではその形態から地域差（急流に強い舟、ヒラタ舟など）

をとらえることが可能である。日本近世の川舟の構造の地域差に関する豊富な研究蓄積から、メコンの本流、支流などの川舟の構造に関する地域差を考えることができるのではないか。舟大工への取材と、その造船工程についてビデオなどで記録していきたい。こうした漁具や関連するモノ資料の変化は、単線的な展開でなく地域差異、あるいは漁業規模による差異などに注目しながら検討する必要がある。

## (2) モノの所有—「個人」の漁具、「共同体」の漁具—と地域社会

モノ研究の展開の可能性について述べていきたい。モノの所有についてかつて小野重朗は、筥やひびを規模の小さな漁具として個人所有の民具、石干見、大敷網などといった規模の大きな漁具を共同体（村、網組、釣組）所有の民具として区別して、モノから社会構造をとらえる視点を提示している [小野 1969]。これは近年のコモンズの議論にも通じる。

筆者はこうした視点で柴漬け漁業に注目して調査したいと考えている。川野は、タイラオ族の柴漬漁業（ラック）を記録している。川野によると、ラムカーン川の淀みから急流に変わるいわゆる瀬の部分に2～3つのラックと呼ばれる柴漬けが設置されていた。これは12月から2月の乾季に柴を積んだものを設置し、魚を捕るときは網を建てめぐらして外に魚を出していたという。漁は1週間から2週間おきに行われていた。その利用や所有関係、柴漬けの装置、構造や所有利用関係の地域的な違いなど、今後調べる課題は多岐にわたっている。これまで柴漬け漁業は河川のみならずむしろ海において回遊魚の集魚装置（FAD）として東南アジアから東アジア（対馬暖流域）に広く分布する漁法として注目されてきた。柴漬け漁業の発生が、河川からなのか、あるいは海からなのか、ラオスのメコン川本流支流の調査を通じて、何らかの見通しを得られるかもしれない。なお海における集魚装置は、シイラ漬木などの原初的な形態の漁具から沖縄のパヤオのような巨大な「漁業構造物」まで多種多様である。また、竹製だった漬木にビニルパイプを束ねたものが使われる変化の傾向もみられる。メコン流域ではここまでの変化はみられないと思われるが、何がどう変わったのか記録する必要がある。また、柴漬を入れる時期に何らかの行事が行われる可能性もある。例えば、村共同体による柴漬け設置の場合は、籤引で入れる者や使用者グループを決める場合もある。こうした事例は、雨季から乾季への変化の中での河川漁撈のあり方をとらえていくことにもつながる。東南アジアの漁具と南九州と南西諸島漁具の比較を進める上でも、川野が示した筥、魚籠（「海上の道」展）と共に柴漬け漁は注目すべきテーマといえる。

また、モノと地域社会、すなわち、漁法・漁具の変化が地域社会に与えた影響についても検討する必要がある。たとえば、新規の漁具・漁法が漁村社会へ与える影響など、日本近世ではマグロ大敷網の導入・捕鯨の導入が既往の漁法を駆逐し従来の漁業秩序を変化したことが示されている [中野 1996]。河川漁撈の場合、そうした変化を見出しにくいかもしれないが、モノの変化が村や地域に与える問題を検討してみたい。

## (3) モノづくり、モノ売りの人々—漁具作り、漁具売りの人々—

日本国内では、特定の集団によってテグス作りとテグス売り（阿波、淡路の限られた村の職人が行う [勝部 1990]）、釣針売り（西脇釣針職人が瀬戸内海から四国、九州まで [播州釣針協同組合 1989]）が行われてきたことが知られている。また、釣竿職人の系譜についても究明されている。付言すれば、現在ではその制作自体が非常に貴重な作業となったため、実用から趣味の嗜好品へと変化している。このように日本では文書資料（顧客名簿や明細帳）が多く残っているため、職人（移動民、漂泊民、竹細工職人）の仕事内容や系譜の歴史的な復元が可能となり、漁具作りの人々の詳細が究明されている。これらの方法はラオス研究に当然有効となる。川野和昭は、魚籠をラオスの竹細工職人に作らせて、その経過を詳細に記録している。今後は、釣針や舟などを作らせて、ビデオや写真撮影、時間経過のメモをとりながら、モノ作りのプロセスを克明におさえていきたい。そのプロセスを指標にして各地と比較することが可能となる。

## 4. まとめ

本報告では、黎明館川野資料の前提となる川野和昭の研究遍歴と視座を概観し、あわせて川野資料や調査記録から得られた様々な問題のうち、漁具漁業関係について、その調査研究方法やモノ資料を歴史時代にどう遡及させ位置づけていくか、展望も含めて議論を行った。

付記 本稿は平成15年7月14日の地球研モノと情報班勉強会（漁具の会）で報告した内容を含んでいる。当日参集の方々に有益なご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。また川野和昭氏のラオス調査データ（未公開分）については川野氏の許可を得て使用した。

#### 参考文献

- 小野重朗 1969 『南九州の民具』 慶友社。  
勝部直達 1990 『テグス文化史』 溪水社。  
川野和昭 1995 『鹿児島・竹の世界一環シナ海の視座から一』 黎明館特別展図録。  
川野和昭 1998 『海上の道一鹿児島文化の源流をさぐる一』 黎明館企画特別展図録。  
川野和昭 2002 「小野重朗の民俗学 その挑戦的継承のために」『東北学』6：285－295。  
Gordon Claridge, Thanongsi Sorangkhoum and Ian Bairdn eds. 1997 COMMUNITY FISHERIES IN LAO PDR: A SURVEY OF TECHNIQUES AND ISSUES.: IUCN-The World Conservation Union.  
渋沢敬三 1962 『日本釣漁技術史小考』 角川書店。  
中野卓 1996 『鰯網の村の四〇〇年一能登灘浦の社会学的研究一』 刀水書房。  
日本学士院日本科学史刊行会編 1959 『明治前日本漁業技術史』 日本学術振興会。  
播州釣針協同組合 1989 『播州針一播州釣針協同組合50周年記念誌一』。  
藤塚悦司 1998 「明治期成立の水産絵図と『日本水産捕採誌』『民具研究』117：1-25」。  
真鍋篤行 1997 「瀬戸内海地方の漁網業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』10。

「モノと情報」班 C

建築研究の可能性

—家屋・モノ・人間—

清水郁郎（総合地球環境学研究所・技術補佐員）

キーワード：東南アジア、建築、家屋、人間、モノ

調査期間と場所：国内、2003年9月～現在

**Possibility of the Study on Architecture in “Material Culture and Digital Archives” Research Group: House - Things - Human Being**

**Ikuro SHIMIZU (Research Institute for Humanity and Nature, Technical Assistant)**

Keywords: Mainland Southeast Asia, Architecture, House, Human Being, Things

Research site and period: Domestic, 9/2003-

要旨

この報告書では、おもに東南アジア大陸部を含めた諸社会の建築を対象とした研究について、学説史の簡単な整理と現在の到達点を示す。つぎに、「モノと情報」班において近い将来おこなうラオスでの調査に向けて、建築研究の文脈におけるモノ研究の位置づけと可能性について考察する。

1. モノ班における調査

秋道プロジェクト内の研究グループ「モノと情報」班（以下モノ班）は、ラオスを中心とするメコン河流域諸社会の物質文化を広く扱う。本稿の目的は、筆者がモノ班においておこなう建築、とくに家屋を対象とした調査・研究に先立ち、建築を対象としたこれまでの研究の見取り図を示すこと<sup>1</sup>、建築研究の文脈とからめたモノ研究の可能性を検討することである。

ある社会における建築の分析は、そこに生きる人びとやその社会を理解するうえで有効である。それにもかかわらず、これまで建築研究における共通の問題意識は熟成されてこなかった。一地域あるいは一社会の建築や建築空間を対象としたすぐれたモノグラフもいくつか編まれてきたという事実はあるにしても、家屋もしくはより幅広い意味での建築は民族誌の一部として扱われるのみで<sup>2</sup>、中心的な問題ではなかった。

一方、建築学においては、近年になって、国外のさまざまな社会の建築を対象とした研究がおこなわれてきた。しかし、その多くにはいわゆるデザイン・サーヴェイの姿勢が共通しており、計画手法の抽出と保存におもな関心が向けられたことは否定できない。

こうした問題意識にもとづいて、筆者はモノ班において、家屋を主要な研究対象としていく。以下では、最初に、広く建築を対象にしたこれまでの人類学的研究で家屋がどのように扱われてきたのか、また、社会的、「文化」的にみて家屋がどのように問題とされてきたのかを概観する。

2. 人類学における建築研究の動向

1) 家屋の意味

これまで人類学では、家屋と人間の関係をとらえるためにさまざまなアプローチが取られてきた<sup>3</sup>。最初に取り上げるのは意味作用の側面から家屋と人間の関係を分析したもので、オランダの構造人類学やいわゆる象徴論研究としてくくられる視点がこれに該当する。

オランダの人類学者は、インドネシアの諸社会にみられる分類体系と空間の関係を人類学議論の俎上にあげた<sup>4</sup>。いわゆる「構造化された空間」の議論である。それは後に家屋分析の方法として多くの論考を生み出すもと

になった。「構造化された空間」として家屋を分析する視点は、家屋内部に見出される二分原理と住み手の双分観や社会の双分制の関係を探る方法、人間が空間を分割する方法が他のカテゴリーの分割と結びついていることをあきらかにする方法の二通りに分類される [佐藤 1989a: 118, 130]。分析上のこうした特徴は、たとえば、プルム（チン）の社会構造を家屋空間の分析を援用して論じたニーダム [Needham 1958, cf. ニーダム 1993: 64-72]、アトニの家屋を詳細に分析し宇宙論的な観点から社会とのかかわりを述べたカニンガム [Cunningham 1973]、北タイの民家において空間の配列と婚姻可能範囲、動物の食用禁忌との相互関係を分析したタンバイアらの各論考にみられる [Tambiah 1973, cf. リーチ 1976]。また、家屋そのものではないが、ボロロにおいて社会構造と村落空間の相互関係を構造的に分析したレヴィ＝ストロースの視点なども、「構造化された空間」の議論に含まれるだろう [レヴィ＝ストロース 1977b] <sup>5</sup>。

「構造化された空間」の議論では、家屋が主要な分析対象となり、家屋の象徴的側面すなわち家屋の分析から得られる象徴の意味やその全体的な体系が分析されてきた <sup>6</sup>。ニーダムは、ある社会における象徴体系を理解するために構造分析をおこなう意義を強調し [ニーダム 1993: 64, cf. Needham (ed.) 1973; デュルケーム 1980; 吉田 1983]、そうした分析において家屋の空間組織や各空間でおこなわれる儀礼的行為などに表象される諸概念が主要な対象であることを、プルムの家屋分析において示した [ニーダム 1977: 126-138]。とくに家屋空間は構造分析を可能にする素材のひとつとして中心的に扱われており、右や左、公的や私的といった空間にかかわる多様な分類観が、社会組織や自然観と並んで宇宙論的な秩序を構成すると考えられた [ibid.: 138]。

家屋空間の分析から抽出された二項対立的な諸概念が、全体としてより大きな宇宙的な概念（「文化」の総体）に包摂されるといった視点は、後に家屋の象徴的な側面に焦点を絞った研究で数多くみられるようになった。もちろん細部は異なるとはいえ、それらの研究ではおおむね、家屋は、社会に通底する宇宙（コスモス）的な秩序と住み手のあいだを媒介する小宇宙（マイクロコスモス）ととらえられてきたといえるだろう [e.g. Cunningham 1973; Fox 1973; Bourdieu 1973; Barnes 1974; Feldman 1977; 1979; 関根 1979; Kana 1980; Forth 1981; Izikowitz and Sørensen (eds.) 1982; Traube 1986; 鏡味 1987; Waterson 1990: 91-114]。

このように隆盛を誇った象徴論的な家屋分析だが、方法論的批判として、象徴の取り扱いに関する懐疑が提示されるようになった [佐藤 1989b: 93-94, 108-109, cf. スペルベル 1979]。たとえば、ウガンダやケニアにおいて家屋の象徴性を分析した長島は、その論考の中で自身の主観が混入する度合いを問題にしており、さらに空間概念を解釈するさいの判断基準の妥当性にも言及している [長島 1974; 1977, cf. 長島 1972]。ヌアウルの家屋を構造的に分析したエレンは、より端的に象徴の取り扱いについて注意を促している [Ellen 1986]。エレンは、観察者によって恣意的に選択された象徴を、過度に固定化して家屋と関連づけることに疑問を提示する。そして、整合化された宇宙論的イメージとは裏腹に、家屋の中では、現実には多様な象徴が並存していることや、それらが必ずしも整合性をもたないで全体性を保っていることを指摘した <sup>7</sup>。

たしかに、二項対立の組み合わせを喚起するような象徴は、ある脈絡における組み合わせを抽出したにすぎない。「二元的象徴分類 (dual symbolic classification)」のかたちには要約できる宇宙論的なモデルを、家屋の分析から過度に描出すれば、そのモデルに適合しない多くの脈絡が捨象されるのは当然であった [杉島 1988: 200-202, cf. Needham 1973; Waterson 1990: 168]。こうした方法論的懐疑を経て、家屋の象徴論的分析はその有用性を残しつつも表舞台から消えていった。

一方、家屋空間の象徴分析から、家屋と人間あるいはその身体との相互作用へと向かった視点もある [Bourdieu 1973; プルデュ 1990: 211-231; Moore 1996]。その嚆矢は山口のリオに関する論考にみられる。山口は、住み手の諸行為を演劇的出来事に見立てながら、読まれるべきテキストとしての家屋という視点を提示する [山口 1983, cf. 山口 1985a, b]。山口によれば、個人が世界を解釈する手がかりとして編まれた記号群としての文化（テキスト）は、親族構造、村、家屋、経済、神話、踊り、儀礼神事といった多様な垂テキスト群から構成されており、個人は、これらの垂テキストを意識的、無意識的な行為を介し、身体の直接性を通して解釈する [山口 1983: 26-27, cf. 山口 1974]。家屋は、人間がそうした行為をおこなう場のひとつに他ならない。山口によれば、人間は、宇宙論的な劇中において演じる（家屋を読む）ことによって、自らのアイデンティティを支える枠組みを再確認する [山口 1983: 27]。

山口の視点では、家屋は住み手によって一方的に読まれる対象物にすぎない。これを、身体との相互作用

という点まで引き上げたのは、ハビトゥスの論理にもとづいてベルベル人の家屋について論じたブルデュである。ブルデュは、居住空間としての家屋を無意識的に読まれる書物にたとえ [Bourdieu 1977: 90; ブルデュ 1988: 123]、象徴的形態へとかたちを変えた諸関係を、人間は家屋に住むことによって暗黙のうちに読み取ることを指摘した。ブルデュは、身体の運動や移動などの「極度に微細な描写」と、象徴の諸体系の系統的な観察から、家屋の二項対立的な象徴が現実にもどのように習得され、使われるのかに目を向ける [Bourdieu 1973; ブルデュ 1990: 211-231]。ベルベル人の家屋空間は、男性の外側への動き／女性の内側への動き、乾／湿、上／下、光／闇、昼／夜、受精させる／受精するというような一連の諸対立の総体にしたがって組織されている。しかし、このような対立項は、家屋全体と世界の他の部分とのあいだにも確立されている。男性の公共的な場所である集会所やモスク、カフェ、畑、市場などに対するときには、家屋は女性の世界となる。家屋という内部世界から周囲の自然環境までを含めた外部世界の構造が、このようなかたちでベルベル人に馴化され、身体化されてゆく。家屋はハビトゥス<sup>8</sup> 産出原理が客観化される特別な場所 [ブルデュ 1988: 123]、すなわちハビトゥスが具体的な行為となって表出する場所となり、人間の知覚や評価の基軸までもが人間と家屋とのこうした相互作用によって形成される [ibid.: 123-124, cf. 平井 1995; 1998: 21-22]。

最近ではムーアが、このようなブルデュの議論を受けて、マラケットの家屋空間について分析している [Moore 1994; 1996]。ムーアは、個人の実践によって生起する個々の文脈に沿って空間の意味作用が呼び起こされることを主張する [Moore 1994: 71-85; 1996: 201]。そして、こうした観点からマラケットの家屋空間を「テキスト (space as text, あるいは spatial text)」 [Moore 1996: 87] ととらえて解釈の対象とし、住み手による空間への能動的な働きかけ (戦略) を、空間と社会経済的な状況との動的な関係を視野に入れて論じた。

また、山口と同じくリオの家屋を分析した杉島は、異なる文脈で異なる人びとが多様な行為をおこなう「舞台装置 (set)」のように家屋をとらえる視点を提示し、家屋をミクロコスモスにたとえる視点を批判的に論じた [杉島 1988: 202-203, cf. 杉島 1986]。杉島は、家屋のシンボリズム (symbolism) は、現実には、住み手にとっても多様な解釈を許容する謎として存在しているが、それは家屋のシンボリズムが、住み手の行為との相互作用に依拠しているためであることを指摘する [杉島 1988: 209]。杉島の論点は、エレンにみられる文脈の多様性にあるのではなく、むしろ、家屋とその内部でおこなわれる行為とのあいだの相互作用にある。杉島は、「舞台装置」論によって、家屋のシンボリズムとさまざまな行為との相互作用により、家屋のシンボリズムに関する多様な解釈が生まれる可能性を指摘している [杉島 1988: 214]。

## 2) 集団としての家屋

家屋の意味作用に関する視点とは別に、社会における物質的、非物質的資産の継承に着目し、その権利と義務の主体となる集団としての家屋を分析する視点もある。レヴィ＝ストロースの「家社会 (house society, あるいは house-based society)」の議論であるが、近年では、それを踏まえて家屋に対する新たな視点が提示されてきた [Lévi-Strauss 1982: 173; Carsten and Hugh-Jones 1995: 6-21, cf. Lévi-Strauss 1987]。

レヴィ＝ストロースは、社会集団の特徴を分析するために、家屋をめぐる組織される集団、いわば社会単位としての「家」について論じる。クワキウトルに関する 1982 年の論考で、レヴィ＝ストロースは、ボアズの初期の研究では父系を指向すると考えられていたクワキウトルの集団が、現実には父系と母系の双方の側面をもつと考えられる点に着目した [Lévi-Strauss 1982: 164]。さらに、レヴィ＝ストロースは、クワキウトルに加えて、クローバーのユロックに関する研究の見直しや中世ヨーロッパの貴族階級の分析から、ある社会においては社会集団としての「家」が存在する可能性があることを指摘した。

レヴィ＝ストロースによれば、このような社会では、人間はときと場合にしながら「家」の保持する利益を最大に、損失を最小にするために、ふたつの異なる現象<sup>9</sup> を同時に、戦略的に使用してきた [Lévi-Strauss 1982: 183-185]<sup>10</sup>。こうした観点から、レヴィ＝ストロースは、従来的人类学では相互に対立的、排他的と考えられてきた諸現象を再統合したり、超越したりするような社会制度の焦点として、「家」が存立することを指摘した。

「家」を中心に組織される社会、すなわち「家社会」では、必然的に「家」の保持する地位を明確化、類別化する資産が重要となる。それはまた、「家社会」であるかどうかを判別する指標のひとつである。「家」は、資産

をめぐる社会的な地位の差異化や富と権力をめぐる競争を、養取や縁組を駆使して繰り広げ、また場合によっては仮想的な親族関係を用いるなどの戦略を取って繰り広げる<sup>11</sup>。

レヴィ＝ストロースの「家社会」の議論が事例を階層化された社会に限定しているのに対して、明確に階層化されていない社会でも、資産や権力、称号などの確保と継承という「家社会」の特徴がみられるとする視点もある [Waterson 1995: 51]<sup>12</sup>。たとえば、ウォータソンは、社会が階層化されているか平等的であるかどうかに関係なく、「家」が社会組織の焦点として重要な役割をになっている点を重視して、「家社会」概念をより広義に解釈していこうと試みている [Waterson 1995: 53, 55, 67]。

ウォータソン、カーステンとヒュー＝ジョーンズらは、こうした「家社会」の議論や象徴論的研究など、家屋を対象としたこれまでの人類学的研究を総括しながら、家屋をはじめとする建造物と人間との多様な関係の分析へと向かっている [e.g. Carsten 1987; Fox 1987; Fox 1993a, b; Fox (ed.) 1993; Carsten and Hugh-Jones (eds.) 1995; Carsten 1997; Joyce and Gillespie (eds.) 2000]。たとえば、カーステンとヒュー＝ジョーンズは、家屋の物理的、形式的な側面を取り上げ、建設過程や形式の変化などの家屋の動的な側面と、家族や世帯、親族などの社会集団の動的な側面との関係に注意を向けている [Carsten and Hugh-Jones 1995: 36-42; Carsten 1995; 1997, cf. Bloch 1995]。カーステンのランカウイの事例では、親は、子供の成婚時に家屋の増改築に着手することが多く、また、子供の結婚後の居住場所も頻繁に変わる [Carsten 1995: 107]。一方、子供の誕生や死亡で世帯が再編されたり、新たに世帯を興したりする場合、あるいは土地が売買されたりする場合などには、家屋は隣人や近親の男性たちによって、新たな立地場所へ持ち運ばれる [ibid.: 107-109]。家屋と集団はそれぞれに動的であり、その相互の関係もまた動的であることが示される。

ウォータソンらはまた、特定の「家」に霊的な力や資産が集約されること、精緻に飾られた家屋の外貌が住み手のアイデンティティや富、権力の表象として利用されること、家屋が神話的に正当化された権力や特権への追想を強く促す「紋章装置 (heraldic devices)」として働くことなど、社会のヒエラルキーの形成と維持、制度やイデオロギーを、「家」との関係で分析する視点を提示している [Carsten and Hugh-Jones 1995: 12]。

### 3) 表象の統合

近年の家屋研究におけるもうひとつの重要な視点は、家屋と文化的に構築された自然との関係である。集団としての「家」に関する議論と微妙に重なりながら、ウォータソンは、人間がどのように周囲の自然環境を含めた世界を理解し、家屋にもその理解を当てはめているのかを分析する。ウォータソンは、ある種の「生命力 (vital force)」や魂は生物のみが保持するのではなく、社会によっては家屋などの無生物も保持すると考えられ、それが家屋が「生きた実体」になる源泉となっていることを、東南アジアの島嶼部でみられる家屋の人格化、生物化の事例を多数提示しながら指摘する [Waterson 1990: 115-137, cf. ウォータソン 1997]<sup>13</sup>。家屋の「生命力」の源泉は多彩であり、自然の木の生命力や自然界の霊的な力の転化などと考えられ、その他に祖霊との関係でとらえることもできる。また、住み手にも影響力を及ぼすその「生命力」は、人間が家屋に住むことを通して再生産され続ける。「生きている家屋 (living house)」というイメージはまた、ときに人間の身体との相互的な隠喩関係としてとらえられ、家屋の各部に身体イメージが付与されることによって追認されてゆく [Waterson 1990: 129]<sup>14</sup>。さらに、家屋の人格化、生物化の最たる局面として、「生命力」を保持するようになった家屋にはなんらかのかたちで病気や死がおとずれる<sup>15</sup>。

東南アジアという地域に限られているけれども、ウォータソンは、これまでのところもっとも綿密かつ広範囲に家屋の意味を精査したといえる。その論述は、家屋そのものの物理的特徴とそこに住む人びとの活動だけではなく、心的特徴、すなわち人びとの心の様式への理解がなければ家屋を理解することができないことを端的に示している。家屋は、物理的構造と住み手の心性が結合した実体として立ちあらわれているといえるだろう。近年、スパークスらは、「家社会」概念の再検討とともに家屋のこの側面を対象化しようと試みている [Sparkes and Howell: 2003]。そこで扱われるのは、物理的構造と人間の心性が結びついて組織された「house」という概念である。ある社会において、人間の居住空間として立ちあらわれる「house」なるものが、どのような意味作用をもつのかは千差万別である。スパークスらは、そうした個別の社会において、「house」が日常性やモラリティの形成にどのように関与するのか、また、それが社会経済的変容の渦中でどのように変化するのかを議論して

いる。スパークスらの議論は、建築を対象とした研究に新たな視点を加えたといっただろう

### 3. 家屋の本性

「構造化された空間」の議論から出発した家屋の意味作用に関する分析視点は、最近になって統合されるよりもむしろ分散している。それは、人間と家屋のかかわりが本質的に多様であり、家屋が発する（家屋が帯びる）意味も決して一元化されないことを端的にあらわしているといえるだろう。このように認識したうえで、以下では、ラオスでの家屋研究における留意点を述べておく。

象徴論的研究に代表される従来の家屋研究では、分析者の目の前に投げ出された家屋は、「文化」の全体像を現実の生活の中で反映させた鏡像としてとらえられていた。分析者は、その家屋をモデル化し、そこから「文化」の全体像へ接近することが可能になると考えられていた。そうした家屋の意味作用の分析は、文化的装置としての家屋の重要性をあきらかにした。しかし、同時に、家屋の背後には、変化しない「文化」の総体があらかじめ想定されていたことは否定できない。それゆえに、そうした分析では、住み手を取り巻く現実の社会変化や個々の住み手の多様で複雑な行為、あるいは家屋が変化したとき、家屋の形式や意味がどのように解釈されるのかという問題をとらえる視点が捨象されてきた。家屋研究の出発点として、まずこの点に留意する必要がある。

家屋の意味作用の扱いにおいては、だれがそれを解釈するのかが問われた。この問題は、他者表象や異文化理解という近年の人類学の議論とも関連する。しかし、この姿勢を突き詰めれば、家屋の解釈は不可能になり、分析者が家屋をどのように理解したかを他者に伝えることもまた不可能になる。よって、方法的・認識論的な意義と重要性を認めつつも、ラオスの調査では、この点について深く省察することはしない。それよりもむしろ、家屋のもつ意味を住み手自身がどのように解釈するのか、また、その意味がどのように第三者に伝えられるのかということのほうに重点を置くことにしたい。分析者が家屋を解釈することとは別に<sup>16</sup>、住み手もまた、目の前に投げ出されている家屋を解釈する。この視点を保持しなければ、現実フィールドで起こっている家屋の変化をとらえることはできない。家屋が変化する局面を人びとはどのように解釈しているかが重要な課題になる。

「家社会」の議論では、家屋をめぐる組織される集団間の関係をとらえる新たな視点が提示された。それは、家屋の意味作用が中心的に議論されてきた建築の研究において、集団の様態、人びとの諸活動を家屋と結びつけたという点で大きな意味をもっていた。しかし、「家社会」の議論では、枠組みとしての家屋とそこに生きる住み手の双方が存在することが前提とされ、住み手と家屋との対応関係も静態的に想定されてきたことは否定できない。ここに象徴論が陥ったのと同じ問題がある。

一方、最近の研究では、必ずしも十分に扱われてこなかった家屋の形式上の特徴と家屋の動的な側面に着目する傾向がみられる<sup>17</sup>。それらの研究では、家屋が形式を変えゆく過程を対象化する。あるいは、ウォータソンに顕著なように、家屋を生きた実体ととらえたうえで、家屋形式の変化の過程と社会集団や住み手の変化の過程の相互関連性を分析するところに特徴がある。

家屋研究は、家屋と住み手とのこのような複合的で相互的な関係を視野に入れる必要があるだろう。両者のそうした関係において、家屋の住み手がどのように決まってくるのか、住み手が家屋の形式をどのような理由で変えるのか、住み手との関係で家屋の形式がどのように決められるのかという側面をとらえていくことが肝要になる。ここから、人びとと家屋との相互構築のモデルを示していくことが可能になるだろう。モノ班における調査・研究では、本稿で整理したアプローチの方法とその限界を踏まえながら、家屋と住み手の両者およびそれらの背後にある「文化」や社会との対応関係を無前提に想定しないで、家屋を扱うことに留意したい。

この項の最後に、モノとしての家屋に対する筆者の立場をあきらかにしておきたい。山口やブルデュらがいうように、家屋がアイデンティティを確認する枠組みや諸関係を習得する場になることも含めて、住み手がなんらかの意味を意識的、無意識的に家屋から読むことが可能なのは、家屋が形式（空間の組織や構法）をもつからである。そうした特徴があるからこそ、家屋は解釈を越えて、あるいは解釈の影響を受けながらも、繰り返して伝えたり、変化していくことが可能になる。いわば、物質としての家屋に対するこうした視点が、人びとの創造の場としての家屋を提示することにつながると筆者は考える。

#### 4. ラオスにおける調査について

これまで筆者は、おもにタイの山地社会において研究をおこなってきた。モノ班における調査でも、ラオスの山地社会をおもな研究対象とする予定である。とくに、タイにおける調査との関連から、アカをはじめとする漢・チベット語のチベット・ビルマ語派口語群に属する集団のあいだで現地調査をおこないたい。具体的な調査地は、今年度におこなう予定の予備調査において選定するが、おおまかな目安としては、ラオス北部のルアン・パバーンやポンサリ周辺の山地を考えている。調査期間は現地の情勢や秋道プロジェクトとモノ班全体の動向とのバランスを考慮しなければならないが、家屋や空間の実測をとまなう調査の性格上、ひとつの村落に一月間ほどの滞在を数度繰り返すというかたちを考えている。

##### 1) 先行研究

ラオスにおいては、筆者がタイで継続しておこなってきた漢・チベット語系の集団を含めた山地社会を対象とした民族誌的、人類学的研究の数は限られている。無論、かなり以前からいくつかの集団の存在は報告されたり概要が述べられたりしてきたが、近年になってようやく比較的詳しい情報が公にされるようになった [Chazée 1999; Schliesinger 2003; Mansfield 2000]。

一方、建築や居住文化に関する研究も多くはない。ラオ系の人びとの家屋に関してはクレマンをはじめとするいくつかの研究があるが [Clement 1982; Charpentier 1982; Charpentier, S. and P. Clement; 川本他 2004]<sup>18</sup>、山地社会の家屋についての研究は報告的な内容のもの以外みられないというのが現状である<sup>19</sup>。

こうした点から、ラオスの山地社会をおもな対象とし、人類学的・建築学的観点から論じる余地は多分にあるといえるだろう。

##### 2) ターゲット

つぎに、ラオスにおいて家屋を中心とする建築を研究対象とするうえで、先に述べた先行研究の流れと現在までの到達点を踏まえて、いくつかの調査目標を設定しておく。しかし、その前に、モノ班としておこなうラオス調査における当面の問題設定、モノ調査の可能性について述べておく。

##### (1) モノ調査の行方

本稿の前半で述べたような、いわゆる「伝統社会」における建築調査の目的は、建築を通して当該社会とその背景にある「文化」を理解すること、換言すれば、その社会に生きる人びとを理解することにある。こうした問題意識は、象徴論的建築研究の展開に目を向ければたちどころに知ることができる。単線的な理解は困難であること、還元主義の落とし穴があることを踏まえつつもあえて述べれば、家屋は個人と「宇宙」をつなぐ媒介項であるからこそ、家屋を調査することで個人と社会の双方を理解することができると考えられたわけである。ただし、その前提として、なにかしら集合表象的な意識—単一の集団イメージや一枚岩的な「文化」イメージとしてあらわれる—が、その社会に生きる人びとに、多くの場合無意識的に共有されていなければならない。

ところで、こうした考えとそれにもとづく調査方法は、現代社会においてほとんど意味をもたない。それは、我々が生きる現実、すなわち日本の都市における居住の様態を想起してみれば容易に想像できる。日本の都市においていくら家屋を調べてみても、そこからは集団化の論理、たとえば地縁集団や血縁集団の特徴をあきらかにすることは困難であるし、現代の「日本人」に共有された集合意識を知ることができない。むしろ、同じようなつくりの家屋や部屋であるにもかかわらず、その内部に組織される集団やそこに生きるひとりひとりの多様性が強調されることになるだろう。

方法論上のこうした問題と現代の都市居住の特徴を踏まえて、人類学的方法論をベースにした最近の建築研究ではモノに着目するようになった。家屋の中にあるモノ、空間を占めるモノから、そこに生きる人びとを理解し、ひいては現代社会の多様な生き方や価値観、つまり人間の多様性を理解しようとするわけである [cf. INAX ギャラリー企画委員会 2002]<sup>20</sup>。

筆者がラオスにおいて展開しようとするのは、建築研究とからめたモノ研究であるから、この点について吟味しておく必要があるだろう。つまり、このようなモノ研究の視点が、ラオスの山地社会において適用できるだろ

うかという問題である。

「伝統社会」における建築研究を通過して、現代の建築研究はモノ研究に到達した。その前提になるのは、一枚岩的な「文化」や均質な社会のイメージではなく多様性であり、「伝統社会」の建築研究とは対極にある考え方である。人びとの価値観も生き方もさまざまに分かれ、すでにその全体像を想起することが不可能に近い現代社会である。即断は避けなければならないが、ラオスの山地社会は当然のことながら「伝統社会」に近いことが予想される。ここに、ラオスの山地社会において建築研究との関連からモノ研究をおこなうために、乗り越えなければならない壁があるわけである。

そのためのひとつの方法として、「伝統社会」と「現代社会」という分類自体をカッコに入れるということが考えられる。もちろん、これらを検討するにはラオスの調査を経験しなければならないというジレンマがあるが、ここではそれを承知で筆者の現在の考えを述べておきたい。

幸いにして筆者は過去に、建築を切り口としたタイでの調査において、この問題に関して検討したことがある。一枚岩的な「文化」をもつように見える—それゆえに表面的には同じ形式の家屋をもつように見える—集団の内部においても、家屋についての考え方や解釈の仕方が多様であることや、集団内では決して同じ家屋とは考えられていないことを北タイのアカの事例から示したものである〔清水 2001〕<sup>21</sup>。北タイのアカの家屋は、物質としてはきわめて簡素でほとんど同じつくりのように見えるが、意味の側面から考えるとじつに多様である。さらに、アカが自分や他のアカの家屋をどのように考えているかを知れば、家屋をさまざまに分類することが可能であることがわかる。家屋は、祖先との紐帯をどれほど強く保っているのかをあらわす指標になる。アカの社会は政治的な側面からこれまで平等主義的で静態的と考えられてきたが、家屋に対する人びとの考えは、そのようなイメージに疑問を投げかけるものである。家屋の細部に対するこだわりやつくりへの美的な執着は一樣ではないし、だれの家屋がきれいでだれの家屋はきたないとか、どの人の家屋は客をもてなすに値するといったように、個人や集団に関するある種の社会的評価を家屋と結びつける例は多様にある。我々がそうであるのとまったく同様に、人びとは家屋を通して自身に関するなにごとかを表明しようとするのが可能なのだし、自身を取り巻く社会経済的、政治的状況を表明するのに家屋はじつに便利なものなのである。

また、別稿で述べたこととも関連するが〔清水 2004〕、山地社会がこれまでにたどってきた歴史や人びとが体験したこと—戦争、越境、移住、国家との関係など—を考慮すると、たとえひとつの村落に住む集団でも、その内部においては多様な価値観や生き方が生起している可能性は十分にある。ここから、ラオスの山地社会を「伝統社会」ととらえること自体をカッコにくくることができるのではないだろうか。現在のところは、暫定的ながらもこのような考えのもとに、山地社会でのモノ研究を進めていきたい。以下に具体的な調査の構想について述べる。

## (2) 家屋を含めた居住空間全般の把握

モノ班のラオス調査においては、家屋、屋敷、村落およびその周囲の自然環境、畑地など、人びとの日常生活が組織される場としての居住空間全般の把握が最初の調査事項とする。具体的には、これら居住空間がどのように組織されているのかを、俯瞰的にあきらかにすることが最初の手続きとなる。そのうえで、各空間において人びとがどのような活動をしているのかを民族誌的に落とし込んでいくという流れになるだろう。

とくに調査の中心的な対象となる家屋については、空間の組織、構法（構造と工法）、部材に使われる樹種、木材の加工法といった物質としての特性の把握に加えて、空間の使用法、家屋をめぐる組織される集団の様態、家屋を舞台にしておこなわれる儀礼的行為などをあきらかにしていく。

## (3) モノ調査：モノに刻まれた記憶、経験、歴史

上記(2)は、いわば、建築を対象とした調査の最初の手続きである。そこからの展開として、モノとからめた調査を進めたい。そのさいの視点はふたつある。ひとつは、個人の日常を組織している時空間を家屋内外に存在するモノから再構築すること、もうひとつは個人の生きてきた歴史をモノの存在からあきらかにすることである。

前者は、モノそのものを対象にするというよりも、(2)においてあきらかにした居住空間の俯瞰図に、モノ

を配置したりそのモノをめぐる人びとの行為を記述したりすることが目的である。そして、人びとの生活世界が時間的、空間的に分節されるときにどのようなモノがいかなるかたちで関係するのかをあきらかにしていきたい。

後者は、あるひとりの個人を取り巻くモノ世界全般が対象になる。あるモノの来歴を詳細に聞き取ったり、そのモノに込められた意識やそのモノをめぐる個人はどのような経験をしてきたかを調べたりする。これによって、個人のライフ・ヒストリーをモノから構成すること、人びとの生き方や価値観の多様性をあきらかにすることを旨とするものである。

そのための対象となる具体的なモノに関しては、現地調査を経ていない現在、詳しく述べることはできないのが実情である。考えられることとしては、儀礼的なモノ—さまざまな儀礼において使われるモノを含む—があるが、それに加えて、日常生活において使われるモノも幅広く対象とし、調査していく必要があるだろう。儀礼的なモノは、個人の人生の節目におこなわれた儀礼のようなイベントに使われるので、時空間の記憶と結びつきやすい。また、個人がたどってきた人生において印象づけられた人への追想や過去への憧憬を強く促すものとなる。しかし、個人の生活世界においては、日常なにげなく使われているモノの中にも、個人の生きてきた歴史と強く結びつくものがあるはずである。そうしたモノについて、だれからどのように入手したのか、その個人にとってどのような点でそのモノが価値をもっているのかを探っていくことになる。

そして、このような調査から、山地社会におけるモノ研究の可能性を広げるとともに、静態的で変化に乏しく、均質な「伝統社会」という見方や前提そのものを再考する契機を得たいと考えている。

Summary: This paper firstly aims to make brief theoretical and historical review of the study on Architecture, especially on the houses in Mainland Southeast Asian societies and shows arrival points of the study until the present. Following that part, possibility of the study on things in context of architectural study is considered toward the field research in Lao P.D.R. in the near future. The points at issue in the review part are as follows;

1. Meanings of the house
2. The house as group
3. Symbolism and Nature

#### 引用文献

浅川滋男

1994 『住まいの民族建築学—江南漢族と華南少数民族の住居論—』 建築資料研究所。

Barnes, R. H.

1974 Kédang: A Study of the Collective Thought of an Eastern Indonesian People, Oxford: Clarendon Press.

Bloch, M.

1995 The Resurrection of the House amongst the Zafimaniry of Madagascar, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), About the House: Lévi-Strauss and Beyond, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 69-83.

Bourdieu, P.

1973 The Berber House, in M. Douglas (ed.), Rules and Meanings: The Anthropology of Everyday Knowledge, Harmondsworth: Penguin Education, pp. 98-110.

1977 Outline of a Theory of Practice, R. Nice (trans.), Cambridge: Cambridge University Press.

ブルデュ, P.

1988 『実践感覚1』 今村他訳 みすず書房。

1990 『実践感覚2』 今村他訳 みすず書房。

Carsten, J. and S. Hugh-Jones (eds.)

1995 About the House: Lévi-Strauss and Beyond, Cambridge: Cambridge University Press.

Carsten, J. and S. Hugh-Jones

1995 Introduction: About the House-Levi-Strauss and Beyond, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), About

the House: Lévi-Strauss and Beyond, Cambridge: Cambridge University Press.

Carsten, J.

- 1987 Analogous or Opposites: Household and Community in Pulau Langkawi, Malaysia, in C. Macdonald (ed.), *De la hutte au palais: sociétés <<à maison >> en Asie du Sud-Est insulaire*, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 153-168.
- 1995 House in Langkawi: Stable Structure or Mobile Homes? in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 105-128.
- 1997 *The Heat of the Hearth: The Process of Kinship in a Malay Fishing Community*, Oxford: Clarendon Press.

Charpentier, S.

- 1982 The Lao House: Vientiane and Luang Prabang, in Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.), *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press, 49-61.

Charpentier, S. and P. Clement

- 1990 *L' Habitation Lao dans les regions de Vientiane et de Louang Prabang Vol.1*, Paris: Peters Press.

Chazée, L.

- 1999 *The Peoples of Laos: Rural and Ethnic Diversities*, Bangkok: White Lotus.

Clement, P.

- 1982 The Spatial Organization of the Lao House, in Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.), *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press, 62-70.

Cunningham, C. E.

- 1973 Order in the Atoni House, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, University of Chicago Press, pp. 204-238. [1964 *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 120: 34-68]

P. E. デ=ヨセリン=デ=ヨング他

- 1987 『オランダ構造人類学』宮崎恒二他編訳 せりか書房。

デュルケーム, E.

- 1980 『分類の未開形態』小関藤一郎訳 法政大学出版社。

Ellen, R.

- 1986 Microcosm, Macrocosm and the Nuaulu House: Concerning the Reductionist Fallacy as Applied to Metaphorical Levels, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 142(1): 1-30.

遠藤央

- 1986 「<イエ>概念の可能性—東インドネシアの事例を手がかりとして—」『社会人類学年報』12: 55-85。

Feldman, J. A.

- 1977 *The Architecture of Nias, Indonesia with Special Reference to Bawömataluo Village*, Columbia University Ph.D. Thesis.
- 1979 The House as World in Bawömatalua, South Nias, in E. M. Bruner and J. O. Becker (eds.), *Art, Ritual and Society in Indonesia*, Ohio: Ohio University Center for International Studies, pp. 127-189.

Forth, G. L .

- 1981 *Rindi: An Ethnographic Study of a Traditional Domain in Eastern Sumba*, The Hague, Martinus Nijhoff.

Fox, J. J. (ed.)

- 1993 *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study.

Fox, J. J.

- 1973 On Bad Death and the Left Hand: A Study of Rotinese Symbolic Inversions, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 342-368.

- 1987 The House as a Type of Social Organization on the Island of Roti, in C. Macdonald (ed.), *De la hutte au palais: sociétés <<à maison >> en Asie du Sud-Est insulaire*, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 171-178.
- 1993a Comparative Perspective on Austronesian Houses: An Introductory Essay, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 1-29.
- 1993b Memories of Ridge-Poles and Cross-Beams: The Categorical Foundations of a Rotinese Cultural Design, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 140-179.
- 平井京之介
- 1995 「家を化粧する：北部タイの女性工場労働者と消費」『民族学研究』59(4): 366-387。
- 1998 「発展する家」佐藤浩司編『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』学芸出版社, pp. 9-26。
- Hobart, M.
- 1978 The Path of the Soul: The Legitimacy of Nature in Balinese Conceptions of Space, in G. B. MILNER (ed.), *Natural Symbols in South East Asia*, University of London: School of Oriental and African Studies, pp. 5-28.
- Howe, L.
- 1983 An Introduction to the Cultural Study of Traditional Balinese Architecture, *Archipel* 25: 137-158.
- Hugh-Jones, C.
- 1979 *From the Milk River: Spatial and Temporal Processes in Northwest Amazonia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hugh-Jones, S.
- 1979 *The Palm and the Pleiades: Initiation and Cosmology in Northwest Amazonia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 1985 *The Maloca: A World in a House*, in E. Carmichael et al., *The Hidden Peoples of the Amazon*, London: Museum of Mankind, pp. 78-93.
- 1995 Inside-Out and Back-to-Front: The Androgynous House in Northwest Amazonia, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 226-252.
- Humphrey, C.
- 1988 No Place like Home in Anthropology: The Neglect of Architecture, *Anthropology Today* 4(1): 16-18.
- INAX ギャラリー企画委員会
- 2002 『普通的生活—2002年ソウルスタイルその後 李さん一家の3200点—』INAX 出版。
- 板橋作美
- 1989 「象徴論的解釈の危険性あるいは恣意性」吉田禎吾編『異文化の解説』平河出版社, pp. 3-53。
- Izikowitz K. G. and P. Sørensen (eds.)
- 1982 *The House in East and Southeast Asia: Anthropological and Architectural Aspects*, London: Curzon Press.
- Joyce, R. A and S. D. Gillespie (eds.)
- 2000 *Beyond Kinship: Social and Material Reproduction in House Societies*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 鏡味治也
- 1987 「宇宙と調和する住まい」『季刊民族学』42: 63-71。
- 1994 「バリ島の住居と世界観」『環中国海の民俗と文化第4巻 風水論集』凱風社, pp. 400-424。

Kana, N. L.

- 1980 The Order and Significance of the Savunese House, in J. J. Fox (ed.), *The Flow of Life: Essays on Eastern Indonesia*, Cambridge: Harvard University Press, pp. 221-230.

河本順子・シツテイワン ソムチット・吉田勝行

- 2004 「ラオス中部における農山村住宅の形態変遷」『日本建築学会計画系論文集』577: 89-96。

栗原伸治

- 1998 『建築と文化・社会との相互作用—中国黄土高原の窑洞住居・集落を対象として—』総合研究大学院大学平成10年度学位論文。

Lea, V.

- 1995 The House of the Mebengokre (Kayapo) of Central Brazil-A New Door to Their Social Organization, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 206-225.

リーチ, E.

- 1976 「言語の人類学的側面—動物のカテゴリーと侮蔑語について—」諏訪部仁訳『現代思想』4(3): 68-90。  
1981 『文化とコミュニケーション—構造人類学入門—』青木・宮坂訳 紀伊国屋書店。  
1991 『社会人類学案内』長島信弘訳 岩波書店。

Lévi-Strauss, C.

- 1982 The Social Organization of the Kwakiutl, in S. Modelski (trans.), *The Way of the Masks*, Seattle: University of Washington Press, pp. 163-187.  
1987 Clan, Lineage, House, in S. Willis (trans.), *Anthropology and Myth: Lectures 1951-1982*, Basil Blackwell, pp. 151-194.

レヴィ=ストロース, C.

- 1977a 『悲しき熱帯』(上) 川田順三訳 中央公論社。  
1977b 『悲しき熱帯』(下) 川田順三訳 中央公論社。

Mansfield, S.

- 2000 *Lao Hill Tribes: Traditions and Patterns of Existence*, New York: Oxford University Press.

宮崎恒二

- 1980 「オランダ構造主義と分類体系研究」『民族学研究』45(1): 52-59。

Moore, H. L.

- 1994 *A Passion for Difference: Essays in Anthropology and Gender*, Cambridge: Polity Press.  
1996 *Space, Text, and Gender: An Anthropological Study of the Marakwet of Kenya*, New York: The Guilford Press.

村武精一

- 1984 『祭司空間の構造—社会人類学ノート—』東京大学出版会。

長島信弘

- 1972 「<脱穀場を清掃する>儀礼—ウガンダ、北部テソ社会におけるエタレ儀礼—」『季刊人類学』3(4): 38-97。  
1974 「住居の象徴性—パラ=ナイル語四社会の比較—」『アフリカの文化と言語』月刊言語別冊1: 50-67。  
1977 「遠似値への接近—右と左の象徴的分類に関するニーダムの所論をめぐって—」『一橋論叢』77(3): 315-323。

Needham, R.

- 1958 A Structural Analysis of Purum Society, in *American Anthropologist* 60: 75-101.  
1973 Introduction, in R. Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, Chicago: University of Chicago Press, pp.xi-xxxix.

Needham, R. (ed.)

- 1973 Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification, Chicago: University of Chicago Press.
- ニーダム, R.  
1977 『構造と感情』 三上暁子訳 弘文堂。  
1993 『象徴的分類』 吉田・白川訳 みすず書房。
- ラボポート, A.  
1987 『住まいと文化』 山本他訳 大明堂。
- ルドフスキー, B.  
1984 『建築家なしの建築』 渡辺武信訳 鹿島出版会。
- 佐藤浩司編  
1998 『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』 学芸出版社。
- 佐藤浩司  
1989a 「民族建築学／人類学的建築学」(上)『建築史学』12: 106-132。  
1989b 「民族建築学／人類学的建築学」(下)『建築史学』13: 93-115。  
1990 「始原の小屋 (primitive hut) の発見—民族建築学の射程—」『民博通信』49: 35-62。  
2004 「家の中の物から見えてくるもの—<2002年ソウルスタイル>展から—」野島・原田編著『<家の中>を認知科学する—変わる家族・モノ・学び・技術—』新曜社, pp.////。
- Schliesinger, J.  
2003 Ethnic Groups of Laos Vol.4: Profiles of Sino-Tibetan- Speaking Peoples, Bangkok: White Lotus Press.
- 関根康正  
1979 「ロングハウスをめぐる空間構造：イバン族の場合」『季刊人類学』10(2): 54-107。  
1995 『ケガレの人類学—南インド・ハリジャンの生活世界—』東京大学出版会。  
1997 「境界に立つ<住まい>—ケガレの創造力—」小西正捷編『アジア読本・インド』河出書房新社, pp. 113-122。  
1998 「他者と対面する住まい」佐藤浩司編『シリーズ建築人類学世界の住まいを読む④ 住まいにいきる』学芸出版社, pp. 229-248。
- 清水昭俊  
1979 「家」『ふおるく叢書9 仲間』弘文堂, pp. 13-97。  
1987 「日本の家の文化的構成」清水昭俊著『家・身体・社会—家族の社会人類学—』弘文堂, pp. 201-221。  
1989 「序説—家族の自然と文化」清水昭俊編『家族の自然と文化』弘文堂, pp. 9-60。
- 清水郁郎  
2001 『北タイ・アカの家屋に関する研究—家屋の形式とその変化への視点から—』総合研究大学院大学学位請求論文。  
2004 「東南アジア大陸部諸社会の文脈からみたモノ研究の可能性—<モノと情報>班ワーキング・セミナーの活動を通して」『秋道プロジェクト全体報告書』総合地球環境学研究所。
- Sparks, S. and S. Howell(ed.)  
2003 The House in Southeast Asia: A Changing Social, Economic and Political Domain, London: Routledge Curzon.
- スペルベル, D.  
1979 『象徴表現とはなにか』菅野盾樹訳 紀伊国屋書店。
- 杉本尚次  
1987 『住まいのエスノロジー』住まいの図書館出版局。
- 杉島敬志  
1986 「フローレス島・リオ族・リセ地域における伝統家屋の建築構造」『物質文化』47: 60-79。  
1988 「舞台装置としての家屋—東インドネシアにおける家屋のシンボリズムに関する一考察—」『国立民族学博物館研究報告』13(2): 183-220。

- 1990 「リオ族における農耕儀礼の記述と解釈」『国立民族学博物館研究報告』15(3): 573-846。  
1997 「承認と解釈—プラクティスとしての儀礼と社会のかかわり—」『岩波講座文化人類学9 儀礼とパフォーマンス』岩波書店, pp. 241-268。

Suzuki, P. T.

- 1984 The Limitations of Structuralism, and Autochthonous Principles for Urban Planning and Design in Indonesia: The Case of Nias, in *Anthropos* 79: 47-53.

Tambiah, S. J.

- 1973 Classification of Animals in Thailand, in M. Douglas (ed.), *Rules & Meanings: The Anthropology of Everyday Knowledge*, Harmondsworth: Penguin Education, pp. 127-166. [1969 *Animals are Good to Think and Good to Prohibit*, *Ethnology* 8(4): 424-459.]

豊田信幸

- 1982 「タイ北部山地民の家屋とその構造—ヤオ族とアカ族の事例—」『リトルワールド研究報告』6: 23-66。

Traube, E.

- 1986 *Cosmology and Social Life: Ritual Exchange among the Mambai of East Timor*, Chicago: University of Chicago Press.

Turton, A.

- 1978 Architectural and Political Space in Thailand, in G. B. MILNER (ed.), *Natural Symbols in South East Asia*, University of London: School of Oriental and African Studies, pp. 113-132.

若林弘子

- 1986 『高床式建物の源流』弘文堂。

Waterson, R.

- 1990 *The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia*, Oxford: Oxford University Press.  
1993 Houses and the Built Environment in Island South-East Asia: Tracing Some Shared Themes in the Uses of Space, in J. J. Fox (ed.), *Inside Austronesian Houses: Perspectives on Domestic Designs for Living*, Canberra: The Australian National University, Research School of Pacific Study, pp. 221-235.  
1995 Houses and Hierarchies in Southeast Asia, in J. Carsten and S. Hugh-Jones (eds.), *About the House: Lévi-Strauss and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 47-68.

山口昌男

- 1974 「家屋と世界観—アフリカの円環的世界—」『アフリカの文化と言語』月刊言語別冊 1: 44-49。  
1983 「家屋を読む—リオ族（インドネシア・フローレス島）の社会構造と宇宙観—」『社会人類学年報』9: 1-28。  
1985a 「ひとの棲処—インドネシア・フローレス島リオ族の場合（1）—」『國學院大學日本文化研究所報』123: 1-8。  
1985b 「ひとの棲処—インドネシア・フローレス島リオ族の場合（2）—」『國學院大學日本文化研究所報』124: 2-7。

吉田禎吾編

- 1989 『異文化の解読』平川出版社。

吉田禎吾

- 1983 「象徴的分類と比較研究—ロドニー・ニーダムの所論をめぐって—」『宗教と世界観—文化人類学的考察—』九州大学出版会, pp. 251-264。  
1984 『宗教人類学』東京大学出版会。

注

<sup>1</sup> ある社会の建築を対象とした調査・研究は幅広く、たとえば建築学や地理学、あるいは環境との関わりにおい

て家屋を分析する研究も数多い。それらのすべてをここで俎上にあげることにはできないが、いくつかの例をあげるとすれば、それらの研究には、起源論や形態の比較研究 [e.g. 杉本 1987]、形態の特徴を環境や気候条件の側面から分析する研究 [e.g. ラポポート 1987] などがある。

<sup>2</sup> 例外として、たとえばコロンビアのバラサナにおける神話的事象や儀礼と構造化された時空間の関係を分析するヒュー＝ジョーンズらの研究 [e.g. Hugh-Jones, C. 1979; Hugh-Jones, S. 1979; 1985; 1995]、ケニアのマラクエットにおけるムーアの家屋空間の研究 [Moore 1996]、ランカウィにおける家屋と集団の相互関係を分析するカーステンの研究 [Carsten 1997] などがある。建築学と人類学または民族学の境界領域では、民族建築学を標榜して、おもに中国の少数民族の建築を対象とする浅川の研究 [浅川 1994]、黄土高原の建築を社会的、文化的な側面から分析する栗原の研究などがある [栗原 1998]。

<sup>3</sup> 1980年代後半までの建築を対象にした研究の学説史的な整理は、佐藤が詳細におこなっている [佐藤 1989a, b]。

<sup>4</sup> オランダの構造人類学者は、インドネシアの空間分類、すなわち空間構造と社会構造に共通する原理の解明を、すでに1920年代から問題にしていた [佐藤 1989a: 119, cf. 宮崎 1980; P. E. デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング他 1987]。

<sup>5</sup> 象徴分析をおこないながら、その導かれる点がまったく異なる家屋の研究として、タートンの論考は特筆されるべきだろう。タートンは、ローカルな文脈と考えられてきた家屋の建築儀礼の分析から、より強大な外部の政治構造の影響がうかがえることを、北タイの事例から示した [Turton 1978]。

<sup>6</sup> ここでいう象徴とは、リーチの定義するような性格をもつ事象ととらえておく [リーチ 1981]。リーチは、「AがBをあらわし、かつ、AとBとの関係に本質的でぬきざしならぬ絆がない場合、つまり、異なる文化的脈絡にAとBが属する場合」に標号が象徴になるという [ibid.: 34]。標号とは、それが意味するものとの連合が文化的約束事にもとづくものと定義される [ibid.: 30]。

<sup>7</sup> ヤップ島の家屋に関する象徴論的分析を検証した板橋は、構造的分析から整合化された図式を描出する方法論としての象徴論的解釈そのものへの懐疑を、一層明確に表明している [板橋 1989]。

<sup>8</sup> ハビトゥスは、「規則に適った即興」 [ブルデュ 1988: 91]、すなわち、「客観的に『調整を受け』 (régulé)、『規則的で』 (régulier) ありうるが、いかなる点でも規則 (règle) への従属の産物ではない」実践が生まれる母胎である [ibid.: 84]。また、「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造 (structures structurantes) として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造 (structures structurées)」とも定義される [ibid.: 83]。

<sup>9</sup> たとえば父系出自 (patrilineal descent) と母系出自 (matrilineal descent)、親子関係 (filiation) と居住 (residence)、ハイパガミー (hypergamy) とハイポガミー (hypogamy)、系譜的な近親者との結婚 (close marriage) や地理的に遠距離にある者との結婚 (distant marriage)、世襲される権利 (heredity) と選挙によって与えられる権利 (election) などといったものがあげられる [Lévi-Strauss 1982: 184]。

<sup>10</sup> このような「家社会」の特徴を、遠藤はつぎのように端的に表現する [遠藤 1986]。「つまり、基本的な社会単位として<イエ>という枠組みが設定され、つぎにそこへヒトを補充する規則を考える… (中略) …その規則は「出自」以外ののものであっても不都合はないはずである」 [遠藤 1986: 57]。

<sup>11</sup> レヴィ＝ストロースの「家社会」概念の特徴は、そうした社会が親族が基盤となる平等的社会 (基本構造) と社会的地位が基盤となる階層的な社会 (複合構造) 双方の特質を併せ持つ、複合的で過渡的な状態にあるという点にも認められる [Fox 1993b: 7; Carsten and Hugh-Jones 1995: 9-10, cf. Lévi-Strauss 1987]。

<sup>12</sup> この点に関してウォータソンは、「高度に平等主義的 (highly egalitarian)」なロングハウスをもつボルネオのイバンやブラジルのカヤボなどの例を指摘している [Waterson 1995: 51, cf. Waterson 1990: 140; Lea 1995]。

<sup>13</sup> ウォータソンは、サクッディの村でシェフォールドが遭遇したつぎのようなフィールド体験を取り上げて、「生命力」を保持する家屋について述べる [Waterson 1990: 117]。村に到着した後、シェフォールドはロングハウスを訪れる。彼はそこでスケッチと実測をして過ごす、数日後にマラリアにかかる。それは、ロングハウスが彼にもたらしたものだ。私 (シェフォールド) の探検はマラリアの暴力的な攻撃によって終わった。村人は、この攻撃は私が過度に驚嘆したことへの家屋からの反応であると説明した。私がかつてあれほど賞賛し、触れ、

実測したことで、家屋に影響を与えて邪魔をしてしまった。家屋は結果的に私を怪しみ、いらいらをつのらせた。そしてついに私に力を集中して私を病気にした。感情を害された家屋を鎮めるための儀礼がおこなわれた」[ibid.]。

<sup>14</sup> 家屋などの建造物では、人間の身体イメージとの象徴的な関係が顕著である [cf. Hobart 1978; Howe 1983]。たとえば、バリ人の家屋では、男性の世帯主の人体各部の寸法が家屋の寸法や屋敷の配置寸法の指標となる [鏡味 1994]。また、バリ人の考えでは、家屋は人間のように頭（家族の聖廟）をもち、さらに腕（寝所と談話用の小屋）、へそ（中庭）、生殖器（門）、脚（台所と穀倉）、肛門（ごみを捨てるための後庭の穴）をもつ [Waterson 1990: 130, cf. Kana 1980]。

<sup>15</sup> ウォータソンは、トラジャにおいて、火災によって家屋に死がもたらされた場面を記述している。全村 24 戸のうち 14 戸を焼いたその火災では、2 戸の貴族階級の家屋が焼失した。被災者はそこで水牛を供儀したが、その儀礼は焼けた家屋の葬式であるという [Waterson 1990: 135]。家屋の生死の局面だけでなく、ウォータソンが提示する東南アジアの事例では、家屋と住み手それぞれの健康状態が密接な関係にあることが示される [ibid.: 132-135]。たとえば、ボルネオのイバンのあいだでは、人間の健康状態を表現する言葉がロングハウスにも適用される。ロングハウスが健康な状態は「冷たい」とされ、悪霊のたぐいや住み手をも脅かす伝染性の病気にさらされるような場合には「熱を出す」と表現される [ibid.: 135]。

<sup>16</sup> 佐藤は、「住居じしんの文化的な重要さは、言葉による理解が限界を有するにもかかわらず、住居が意味作用をもつ体系として我々の手のとどくところに実在し、再生産されているという事実のほうにもとめるべきだとおもわれる」と述べて [佐藤 1989b: 98]、家屋がもつ意味を分析することの意義を表明しているが、本稿も同じところに意義を認める。

<sup>17</sup> 前掲書 [Carsten and Hugh-Jones 1995; Carsten 1995; 1997; Bloch 1995]。

<sup>18</sup> クレマンらは、ヴィエンチャンとルアン・パバーン周辺のアオ人の家屋について、その空間の組織や方位観について詳細に報告している [ibid.]。

<sup>19</sup> チャズイーは、ラオス全域の諸集団の文化的、社会的特徴を網羅したその著書の中で、言語グループごとの家屋について、その特徴を述べている [Chazée 1999]。

<sup>20</sup> モノ研究と呼べる分野は、かつても現在も建築研究に関連してある。その代表的な例は CDI（商品科学研究所）がおこなった生活財調査である [商品科学研究所 1980]。しかし、ここで明確にしておかなければならないのは、前記のような問題意識を持つに至った人類学的フィールドワークからの建築研究とそうした研究におけるモノへの視点、およびそこから展開は大きく異なることである。CDI では、住居形態と家族構成、年収などの似通った家庭をピックアップし、そうした家庭の中にある生活財の分析を通して、日本人に共有された生活スタイルをあきらかにしようとするものであった [佐藤 2004: 92-95]。つまり、「伝統社会」における建築研究を通過したモノ研究とは、そもそも問題設定の当初から異なるベクトルを向いているのである。

<sup>21</sup> 私たちの日常がそうであるように、家屋に関する事ばかりではなく、社会に生起するほぼすべてのことに関しても同様であることは言うまでもない。

## 「モノと情報」班 C

## ミャオ族の民族衣装が結ぶ文化

## —モノ研究の視点から—

宮脇千絵（総合地球環境学研究所「モノと情報」班）

キーワード：ミャオ族、民族衣装、中国雲南省、ラオス、流通

## Culture Connected by Miao Clothes

## — From the Viewpoint of Study on Things —

Chie MIYAWAKI (Research Institute for Humanity and Nature)

Keywords: Miao, Clothes, Yunnan Province, Laos, Distribution

## 1. はじめに

モノは私たちに様々な情報を与えてくれる。例えばひとつのモノからでも、その形状や材質、素材の入手法や製作方法・過程、使用法（いつ・誰が・どこで・どのように）、売買や交換、流通、分布、時代など多様な側面からアプローチすることができる。

近年、グローバル化の視点からモノを見つめなおす試みが起こってきている〔内堀 1997〕。これまで、モノはひとつの文化内で捉えられることが多かった。しかしそこに留まらず、文化の枠を飛び越えて世界的規模で流通するようになった状況の中で、モノをいかに議論するかという問題が浮かび上がっている。

筆者自身、モノを単にモノとして扱うだけでなく、モノを通して社会や人々をみることに興味を持ち、またモノがどのような状況で文化の枠を飛び越えているのかということに着目してきた。本稿では、ミャオ族の民族衣装というモノを事例に取り上げ、これまでの研究をまとめる。

## 2. ミャオ族の民族衣装の既製品化と流通

修士論文〔宮脇 2003a; 2003b〕では、中国の雲南省紅河ハニ族イ族自治州屏辺ミャオ族自治县（以下、屏辺<sup>ビンビエン</sup> 県）におけるミャオ族の民族衣装売買について取り上げ、モノ研究の視点から、モノがグローバルな規模で移動する状況について論述した。

屏辺県はベトナムとの国境から約 100km のところに位置し、自治県名が雲南省唯一のミャオ族のみが構成主体となっている自治地域<sup>1</sup>である。総人口約 13 万人のうち、ミャオ族の人口比は約 38% であり（1990 年）<sup>2</sup>、ミャオ族のみならずイ族、ヤオ族などでも多くの女性が、現在でも普段から民族衣装を着用している。だが、ミャオ族の民族衣装は他地域のミャオ族の民族衣装と比べて、明らかに新しさを感じる。昔ながらの技術を受け継いで作られた民族衣装を期待していた私にとっては、薄化粧の布やカラフルなプリント、科学染料の糸での刺繍、蛍光色のプラスチックビーズがとても異色なものとして映った。この屏辺県では、他のミャオ族居住地域ではみられない民族衣装に関する新たな現象が起こっている。

屏辺県の県城である<sup>ユービン</sup>玉屏鎮の町では、従来、家庭内で製作・消費されていたミャオ族の衣装が、1980 年代から徐々に町の商店で製作・販売され始めている。その商店の多くはミャオ族女性の経営で、2002 年の時点で十数軒あった。雲南省では、定期市の日に露店で既製の民族衣装が売られている光景をしばしば目にする事ができる。しかし、玉屏鎮のように専門の店が建ち並ぶというのは珍しい。玉屏鎮に住むあるミャオ族の男性の話によると、既製の民族衣装を扱う商店は、この屏辺県と隣の文山チワン族ミャオ族自治州でしかみられないという。

もともとミャオ族の衣装製作は、麻の栽培から始まり、収穫、糸紡ぎ、織り、ロウケツ染め、刺繍などと多数の工程に渡った〔顔 2001: 11-19〕。そして衣装製作は、家事や労働の合間に行う女性の重要な仕事であり、一枚のスカートを製作するのに約 10 ヶ月かかっていたという。だが玉屏鎮で新しく製作されるようになった民

族衣装は、化繊の布や機械刺繍、チロリアンテープやプラスチックビーズなどを使用し、ロウケツ染め風にプリントを施し、ミシンで縫製される。多くの商店では、女性たちが店先に並べたミシンで次々とスカートや上着を縫い上げていく。中には家族経営の小規模な工場があり、そこでは布の裁断、ロウケツ染め風のプリント、ミシン、ビーズ縫いを分業にしている。

商品となったミャオ族の衣装の流通経路は多様である。週に一度の定期市の日には、県内の村落から買い物に来たミャオ族の女性たちが客となる。また近隣県からは、ミャオ族の衣装売買を生業としている人が仕入れに来ることもある。北京などの都市へ土産物や記念品として流通していくものもある。さらに工場では、アメリカに在住するミャオ（モン）族<sup>3</sup>の人々とも電話やFAXで取引をしている。工場のオーナーの夫の話によると、1992年にアメリカ在住のミャオ（モン）族の人々が、雲南省に同胞を訪ねる旅行に来たのがきっかけだという。取引された衣装は、アメリカを経由してさらにラオスのミャオ族にまで流通しているという。

### 3. 文化を結ぶ民族衣装

注目すべきは、屏辺県におけるこれらの既製の民族衣装がいわゆる観光客向けの工芸品ではなく、あくまでミャオ族自身が消費する実用的なものだという点である<sup>4</sup>。貴州省のミャオ族は、民族衣装を含む少数民族文化を観光資源として変容させてきた〔曾 2001〕。しかし屏辺県は、貴州省の場合とは異なり、観光化されず他者からの「まなざし」を受けてこなかった。だからこそ製作者や消費者の要望によって、民族衣装の素材や製作工程の合理化・簡略化が進み、デザインも自由に変化しているのである。

屏辺県で製作されたミャオ族の衣装の特徴として、「まなざし」に左右されない実用品として、近隣の村や県のみならず、アメリカやラオスにまで流通している点を指摘することができる。

雲南省はラオスと国境を接しているにも関わらず、もともとミャオ族同士の少数民族レベルでは国境を越えるの関係性がとても薄かった。その理由として2点考えられる。まず、新中国成立以来、社会主義建設のために求められたのは、漢族との関係であり、国外の同一の民族集団ではなかったということである〔谷口 1992 : 141〕。そして、1990年に国境貿易が推奨されてから、国境貿易の拠点が各地にできているが、実際に直接的利益を得るのが主に漢族だということがある〔松村 2000 : 110-111〕。筆者が屏辺県のある男性に、なぜラオスと直接取引をしないのかと尋ねたときも、ルートや方法が分からないからだという答えであった。

この事例では、ミャオ族の民族衣装は、アメリカを経由してラオスに渡っている。そして、ラオスからはアメリカを介してVCDが屏辺県にもたらされている。このVCDは、アメリカ在住のミャオ（モン）族の人々が、ラオスを訪れた際に撮影したもので、ミャオ語のドラマやミャオ族の歌や舞踏などが収録されている。直接的な関係性が薄かったにも関わらず、屏辺県の民族衣装製作に関わっている人たちは、ラオスのミャオ族の情報を得られるようになったのである。衣装というモノによって両者の関係が結ばれているからこそ、屏辺県のミャオ族は、ラオスのミャオ族に衣装や言語、文化などの一致あるいは類似から親近感を得るようになったと言えるだろう。

### 4. 今後の課題

このように、衣装というモノがひとつの文化の枠を飛び越え、文化間関係を結んでいる状況についてみてきた。しかし、修士論文では雲南省の事例しか言及できず、屏辺県で製作された衣装が、アメリカやラオスのミャオ族の人々にどのように受け入れられてきたのかという課題が残った。自由の国アメリカと社会主義国家であるラオスでは、ミャオ族の人々の位置づけとともに、衣装の受容のされかたが大きく異なることが推測される。アメリカ在住のミャオ族の間では民族衣装が、ある種政治性を帯びた特別なエスニック・シンボルになっている可能性がある〔乾 1998〕。一方ラオスでは、普段着のレベルで屏辺県の衣装が受け入れられているといっても、国内に散在するミャオ族の集落においてどのように受容され利用されているのかを詳細にみていく必要がある。つまり、単に同じ民族だから同じモノ（衣装）を使用しているという前提だけでは捉えきれない状況が展開しているのだ。モノの分布を単に地図上に示すだけではなく、分布の過程や背後の詳細についても検討する意義は大きい。グローバルな分布の様子から、ローカルな社会や人々の動きまで読み取ることができるのである。

筆者はこれまで博物館で資料点検の仕事に携わってきたこともあり、博物館に収められている民族資料の形状

や材質について、数多くとは言えないまでもある程度、実際に手にとって観察する機会を得てきた。この経験を生かしつつ「モノと情報」班では、個々のモノが持つ情報を多角的に引き出し、社会や人々の変化を知る手がかりとなる情報へと膨らませることができればと考えている。生態史プロジェクトの対象地域となる雲南省から東南アジア大陸部にかけてのメコン河流域地域は、起源を同じくするとされる民族が数多く散住する地域である。そのような地域で、モノが文化や国境を越えて分布している状況や背景を体系的に捉えていきたい。

#### 参考文献

乾美紀

1998「故郷を失ったモン族」『季刊民族学 84号』財団法人千里文化財団

内堀基光

1997「もの与人から成る世界」『岩波講座文化人類学第3巻「もの」の人間世界』岩波書店

曾士才

2001「中国における民族観光の創出—貴州省の事例から—」『民族学研究 第66巻第1号』

谷口裕久

1992「「ミャオ」カテゴリーのアイデンティティの位相」『社会学雑誌 9』神戸大学社会学研究会

宮脇千絵

2003a「衣服というモノの多様性・可変性・オルタナティブ—中国雲南省のミャオ族の事例から—」神戸大学大学院総合人間科学研究科

2003b「ミャオ族の衣服の商品化と流通—雲南省屏辺ミャオ族自治県の事例から—」神戸大学国際文化学編『国際文化学第9号』

松村嘉久

2000『中国・民族の政治地理』晃洋書房

<sup>1</sup> 雲南省にはミャオ族が構成主体となる民族自治地方が他に、文山チワン族ミャオ族自治州、録勸イ族ミャオ族自治県、金平ミャオ族ヤオ族タイ族自治県があるが、屏辺ミャオ族自治県以外は、複数の少数民族が構成主体となっている。

<sup>2</sup> 屏辺県の人口比は漢族約41%、ミャオ族約38%、イ族約18%、チワン族約2%である（1990年）。

<sup>3</sup> ラオスのミャオ族は、ベトナム戦争時にアメリカ軍のゲリラ部隊として組織されたが、アメリカの敗戦後、共産主義の中に置き去りにされ迫害されるようになった。そこでタイに逃れ、アメリカ、カナダ、フランス、オーストラリアなどに難民として移住するようになった[乾1998:105-106]。

<sup>4</sup> 筆者の取り上げた事例の中には、工芸品として北京などからの注文を受けている商店もあったが、その場合は従来の方法で製作された民族色の強い伝統的な衣装が好まれている。そのような商店は、現在でも手織りの麻布、ロウケツ染め、手刺繍の民族衣装を製作している村を知っており、注文が入った時に仕入れている。昔ながらの民族衣装は、希少価値があり、高く売れるのだという。

「モノと情報」班A

竹の焼畑と稲作儀礼ー竹林文化論への試みー  
川野和昭(鹿児島県歴史資料センター黎明館学)

キーワード：竹、焼畑、竹細工、混合林、再生の森、儀礼、雑草、焼米

1. はじめに～現地調査のねらい～

今回の調査は、ラオス北部ルアンパバーン及びウドムサイ地域を対象にして、そこに生きる人々との竹と関わり合いを探ることにあつた。具体的には、竹を重要視する焼畑に焦点を当て、対象とする森と竹、その竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、雑草、収穫、焼米、森の再生過程等に関する伝統的技術を聞き書きの手法で記述することであつた。

それは、これまで筆者がトカラ列島、大隅半島、九州山地で進めてきた「竹の焼畑」と比較するという意図が含まれているものである。特に竹の再生力を生かした持続可能な焼畑ということを明らかにしようとするところにねらいがあつた。それが、これまでの焼畑の研究で見落とされてきた重要な問題であると認識しているからである。さらに、日本列島のなかでも、南九州や南西諸島という地域のローカルな問題だと思われがちな竹の焼畑が、アジアというグローバルな文化として浮かび上がってくるのが期待されるのである。また、それは人と森との関わり方のモデルを示すことにつながっていくという見通しも予感されるのである。

2. 竹の焼畑の事例

以下では今回の調査で得た、竹の利用に関する調査地の人々の技術・認識について、焼畑の対象とする森と竹、竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、雑草、収穫、焼米、森の再生過程の順に、聞き書きの成果を述べる。

1) 焼畑の対象とする森

- ①竹と木の混合林
- ②木だけの山は水分がない。平坦な場所がなく、岩場で高い山なので焼畑に向かない。
- ③木だけの山を焼き、竹の山を保護するモン族の焼畑の棲み分け

2) 焼畑に適する竹の順位

以下では村ごとにそこで利用される竹の種類(番号を付した)をあげ、またそれぞれの竹についての現地の評価を記述する。

(1) コクナン村・タイルー族

- ①マイヒヤ：竹の皮が薄いので全部を燃やせる。肥料が多いので茎が大きく伸びて穂も良く出揃うが、川や谷沿いにあるので日陰になり、穂が大きくなる。
- ②マイライ：根が深く、あちこちに小さな塊として広がっているので水分の持ちが良く、山の尾根筋や高い斜面にあるので日当たりも良い。分蘖は少ないが穂も大きく米も美味しい。
- ③マイホック：根株が大きいため根株の周囲は良く燃えるので、肥料が多く稲も良く出揃い育ちも良い。しかし、根株と根株との間が離れすぎていて、良く燃えていないので肥料が少なく稲の生長も良くない。
- ④マイサン：土が乾いているので余り良くない。雨の多いときはよい。

(2) シブンハー村・モン族

- ①マイボン：焼いても水を溜めているから、雨が無くても稲が育つ。最初の年は根っ子まで焼けないので、次の年は竹の子が出てくる。

(3) ドウン村・カム族

- ①パーノーコム：地下茎で延びる竹で、畑全体に水分があるのできれいな稲が良く穫れる。

②パーノーラム：株立ちの竹で、これもきれいな米がよく穫れる。

※父母の時代（話者が15歳くらい）までやっていたが、現在は竹を保護するため余りしていない。焼畑には竹ばかりの山が一番適している。次に、竹と木の混じり合った山がよい。木ばかりの山は水分がないので雨の多いときはよいが、焼畑としては良くない。

(4) ラットエン村・ラオ族

①マイヒヤ：この竹が生長するところはミミズもたくさんいて土が良く水分も多い。

②マイホック

③マイライ

④マイサン：土が乾いているので余り雨が少ないときは良くない。大株の株立ちの竹で、竹の大きさはコップぐらいの大きさである。

※焼畑にはマイヒヤと普通の木の混じり合った山がよい。竹ばかりの山は雑草が多く生えて焼畑としては良くない。また、木だけの山は土が乾いていて収穫が良くない。

(5) テンケーン村・ラオ族

①大きな木だけの森。

②竹時が混じっている森。

③竹だけの森。

※ウー河を挟んで、村側は木だけの森が多く、竹の山は対岸にあり、村側では村から遠いところにある。

(6) ホワイコン村・カム族

①マイホック：株が大きく、土に水分があるから良い。

②マイヒヤ：土に水分があるから良い。

③竹だけの森。

※焼畑は、雨が多ければ方角は問わないが、雨が少なければ北と南がよい。東は午後になると日陰になり、西は午前中が日陰になるからである。

(7) ハッサプーイ村・カム族

①マイヒヤ

②マイソッド

③マイラン

④マイコンム

※木だけの山は無い。山は皆竹と木が混じり合っている。

(8) ナムコンム村・カム族

①マイボン

②マイサン

③マイヒヤ

④マイホック：株が大きいからあまり良くない。

(9) ナムレーン村・カム族

①マイタネック（マイホック）：この竹だけが生えているところは、水分が多いので稲が良く実る。木と混じると良くない。

※マイヒヤとマイソツは、生えているところと、生えていないところがあるが、マイホックはどこでも生えている。去年、マイタネックに花が咲いて、実がなって鼠が大発生して実を食べ、モグラは幹を食べてしまったので大きな竹が無くなってしまった。

(10) サナンピー村・カム族

①マイホック

②マイヒヤ

③マイボン

※一抱えあるような木と竹とが混じっている森が、米が良く穫れる。その理由は、水分があって土がよい。竹の

方が伐りやすく燃やしやす。さらに、竹の方が成長が速く、元の森に戻りやすい。

※木は1 疔ぐらいの高さのところから伐り倒すのがよい。ひこばえが出て再生するからである。根元から伐るとひこばえが出て稲の生長の邪魔になり、燃やしたときに死んで再生しない。よいが、焼畑としては良くない。

(11) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイヒヤ
- ②マイソン
- ③マイライ：マイホックより根株が小さいが、燃やすと灰が多く出て肥料が多い。
- ④マイホック：根株が大きいので水分がある。
- ⑤マイサン

3] 竹細工に適する順位

(1) ハッサプーイ村・カム族

- ①マイヒヤ：カユルー（篩：皮が薄いからへぎが取りにくい）、家の壁板、屋根葺き材、床板
- ②マイホック：ピアルー（バラ）、カユルー（篩：皮が厚いからへぎが取りやすい）、ヤン（背負い籠）、ご飯入れ籠、床板

(2) サナンピー村・カム族

- ①マイボン：畑の柵結い紐、ヤン、ピアルー、竹マット、飯入れ筒等の竹細工
- ②マイヒヤ：竹壁、フアツ（飯蒸し籠）、屋根葺き材、ピアルー、トリユール（篩）
- ③マイサン：床板、水筒、飯入れ筒、丸太の柱

(3) ホワイレンム村・カム族

- ①プリタラ（マイヒヤ）：家の壁板、カブン（籾運び籠）、米蒸し籠
- ②タネック（マイホック）：畑の柵の紐、屋根葺き茅の綴じ紐、ヤン（背負い籠）、カブン（籾運び籠）、ドーン（バラ）、クーン（篩）、床板
- ③マイサン：畑の柵の柱、床板、家の垂木、根太
- ④マイライ：畑の柵の紐

(4) ナムコンム村・カム族

- ①プリタラ（マイヒヤ）：家の壁板、カブン（籾運び籠）、米蒸し籠
- ②タネック（マイホック）：畑の柵の紐、屋根葺き茅の綴じ紐、ヤン（背負い籠）、カブン（籾運び籠）、ドーン（バラ）、クーン（篩）、床板
- ③マイサン：畑の柵の柱、床板、家の垂木、根太
- ④マイライ：畑の柵の紐

(5) ラットエン村・ラオ族

- ①マイヒヤ：家の壁板、フォアー（米蒸し籠）、サイ（筥）、コーン（魚籠）

(6) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイホック：ガドン（バラ）、クーン（篩）、モーン（筥）、ヤン（背負い籠）、コーン（魚籠）
- ②マイサン：竹床、ガドン（バラ）、クーン（篩）、モーン（筥）、ヤン（背負い籠）、コーン（魚籠）
- ③マイヒヤ：家の壁板（肉が薄くてやりやすい）、屋根葺き材、ガドン（バラ）、クーン（篩）

(7) ノンタオ村・カム族

- ①マイヒヤ：ヤン（背負い籠）、ドン（バラ）、クーン（篩）、床板、家の壁板、屋根葺き材、ブン（籾入れ籠）・・・節間が長く（1 疔ぐらい）、丈夫である。
- ②マイホック：食台笊、床板
- ③マイライ：屋根葺き材、畑の柵を縛る紐、屋根葺き材の茅を縛る紐、
- ④マイサン：柵の横木、屋根葺き材

4] 竹の子の美味しさ

## (1) ノンタオ村・カム族

- ①ノーライ：6月～9月
- ②ノーサン：6月～9月
- ③ノーホック：①、②よりやや早め～9月
- ④ノーコン：12月～6月
- ⑤ノーヒヤ：6月、肉が薄いので余り食べないが、まだ土の中にあるうちに掘って食べる。繊維質が多くて食べない。

## (2) コクナン村・タイルー族

- ①ノーライ：7月～8月
- ②ノーサン：4月～5月
- ③ノーヒヤ：7月～8月
- ④ノーボン：3月～4月
- ⑤ノーホック：7月～8月

※以下の二種類の竹はウドムサイに行く途中のソンチャー村にある。

ノーコン：株立ちではなく地下茎の竹で1本1本離れて生える竹。竹の子は苦い。

ノーマン：甘い竹の子

## (3) ドウン村・カム族

- ①マイノーワン：6月 ※甘い竹の子
- ②マイノーコム：12月～6月 ※地下茎で伸びる竹
- ③マイノーホック：8月～9月
- ④マイノーラン：4月～5月 ※親指大の小さい竹で香りがよい
- ⑤マイノーパイ：8月～9月 ※家の近くにあり大きな株立ちの竹

## (4) ナムコンム村・カム族

- ①マイホック：5月～6月
  - ②マイボン：2月～3月
  - ③マイサン：5月～9月
- ※マイヒヤ・・・何故か分からないがあまり食べない。

## (4) ラットエン村・ラオ族

- ①マイヒヤ：6月の1ヶ月だけ。美味しい竹の子。

## (5) サナンピー村・カム族

- ①ノーボン
- ②ノーホック
- ③ノーソッ
- ④ノーワン：竹の子を採るために植える。

## (6) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイライ：6月～10月
- ②マイホック：6月～10月
- ③マイサン：6月～10月
- ④ノーコンム：12月～3月

## (7) ハツサプーイ村・カム族

- ①ノーコンム：1月～6月
- ②ノーワン：3月～6月
- ③ノーラン：3月～5/6月
- ④ノークッド：5月～7月
- ⑤ノーソッド：6月～9月

⑥ノーヒヤ：6月～9月

5] 調理法

(1) ホワイレンム村・カム族

- ① パヌイ：ノーホックを皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日で干して保存する。食べるときは水に戻して食べる。市場で売ることもある。
- ② ノーソン：皮をむいて生のまま割いて、塩を漬けて揉んで壺に入れて、発酵させる。10日間で食べられるようになる。スープにしたり、野菜炒めに入れて食べる。
- ③ ノーヘオ：生のまま皮をむいて割いて、壺に入れて6日～7日経って酸っぱくなったら、天日に干して保存する。

(2) テンケーン村・ラオ族

- ① ノーヘオ：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日で干して保存する。食べるときは水に戻して、炒めて食べる。
- ② ノーソン：皮をむいて生のまま割いて、塩を漬けて揉んで壺に入れて、発酵させる。10日間で食べられるようになる。スープにしたり、野菜炒めに入れて食べる。
- ③ ノーカー：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、煮て塩味を付けて、再び焼いて食べる。

(3) シブンハー村・モン族

- ① チンジュアノー：皮付きのまま焼いたり、灰の中で蒸し焼きにして、皮をむいて辛子味噌を付けて食べる。
- ② ウアジュアコー：皮をむいて生のまま割いて、壺に入れ水を加えて発酵させて、それを天日に干して乾燥させて保存する。
- ③ キージュア：ウアジュアコーを外の野菜や肉と油炒めにして食べる。

(4) ナムコンム村・カム族

- ① スープ：皮付きのまま焼いて皮をむき、割いてスープにする。
- ② 発酵：生のまま割いて、塩を付け壺に入れて発酵させる。

(5) ティーンタイ村・タイルー族

- ① ノーカー：皮のまま火で焼いて、皮をむいて、煮て、塩味を付けて再び焼いて食べる。
- ② ノーヘオ：生の竹の子の皮をむき、割いて、臼に入れて杵で搗いて、竹筒に入れて発酵させ、3日間ぐらいして筒から出して天日で乾燥させ保存する。
- ③ ケーン：スープ

(6) ノンタオ村・カム族

- ① ケーン：スープ
- ② 焼き：ノーコンムとノーランは、皮の付いたまま火で焼いて、皮をむき唐辛子味噌を付けて食べる。
- ③ 煮る：煮て唐辛子味噌を付けて食べる。
- ④ 発酵：生のまま皮をむいて割き、水で洗って水切りをし、塩を付けて壺に1週間入れて発酵させて食べる。
- ⑤ 乾燥：皮をむいて生のまま割き壺に入れ、さらに水を口まで入れて、3日間して酸っぱくなってから、水を切って煮て、水を絞って天日に干して乾燥させて保存する。食べるときはケーンにしたり、辛子味噌に付けて食べたり、炒め物にしたりして食べる。

(7) ハッサプーイ村・カム族

- ① タバンタルワール：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日に干して乾燥させて保存する。食べるときは水に戻して食べる。
- ② タバンチャット：皮を剥いで割いて、塩を付け竹筒や壺に入れ、水を加えて10日間ぐらい発酵させる。その竹の子を取り出し、香辛料で味付けしたものをチョタバチャット（漬け物・竹の子・酸っぱい）と呼ぶ。
- ③ ポクタバン：皮付きのまま焼いて食べる。（焼く・竹の子）
- ④ ケーン：生のを割いてスープにして食べる。

## 6] 伐採に関わる儀礼及び信仰

畑地の選び方を確認した。これは森の乱伐を防ぐシステムとして評価できる問題である。(1) ノンタオ村・カム族・・・《リヤップハレット（始める焼畑）》

- ①蜂の巣があったらだめ：「お前らは死ぬよ」という霊の知らせ。木の枝に蜂の巣がかかっている形は死人を選ぶ形であるから。
- ②木の上にアリの巣があったらだめ：「お前らは自分の頭を切るのと同じだよ」という霊の知らせ。アリの巣は人間の頭の形であるから。
- ③二つに分かれる木があったらだめ：お前らは家族の中から死人が出て水牛、豚などを殺さなければならないよという霊のお告げ。二股の分かれ木は、肉を焼くときに挟む二つ割りの竹と同じであるから。
- ④山刀で木を伐ってみて、鳥、虫、鹿が鳴く畑にしてはならない＝お前人も人が死んで泣くことになるよという霊の知らせ。
- ⑤米が穫れるかの占い：鳴かなかつたら、竹か木を丁度一尋切って“これから占いをさせてもらいます。もし、米が穫れる土地だったらこの竹か木を伸ばしてください。米の穫れない土地だったら短くしてください”と言って、地面に突き立てたり、森の中に投げ入れたりして、もう一度計ってみる。
- ⑥夢のお告げ：最後に畑にして良いか、良くないかを夢で知らせてくださいと唱えて家に帰る。「伐って良い」という暗示の夢は、川が洪水になっている所で泳いでいる夢。もしくは夢を見ない。「伐って悪い」という夢は、舟に乗ってどこかに行く夢（＝舟はお棺であるから）。車に乗ってどこかに行く夢（＝車はお棺を運ぶものであるから）、人が動物（豚、水牛）を殺している夢（＝死あるいは葬式の予兆であるから）、月とか太陽の夢（＝死人を焼く“火”を連想させるから）。

## (2) ホワイレンム村・カム族・・・《クロンハレット（始める焼畑）》

- ①砥石、唐辛子、貝殻虫の巣と山刀による占い：いい日を選んで畑に伐ろうと思うところに行く。焚き火をして、その周りを掃除する程度に少し伐って、砥石を横に置き、家から持ってきた生姜をスライスして、唐辛子、貝殻虫の巣とともに串に刺し、1 畝ぐらいの枯れ竹の先を割って中に入れて焚き火で焙りながら、“ここで焼畑をしたい。もし、悪ければ今のうちに山刀の刃が外れて怪我をさせて知らせてください”と唱えながら、周囲を少し伐る。
- ②唐辛子、貝殻虫の巣による蜂や悪霊の祓い：生姜、唐辛子、貝殻虫が燃えている1 畝ぐらいの枯れ竹を、周囲の森に振りかざしながら“蜂や悪い霊は逃げてください。”と唱えてから、木に括り付ける。この臭いを悪い霊は怖がると言い、したがってこの臭いの及ぶ範囲は畑にすることができる。
- ③夢のお告げ：最後に畑にして良いか、良くないかを夢で知らせてくださいと唱えて家に帰る。「伐っても良い」という意味の夢は、大きな洪水の夢、山に行き石灰岩の崖を登る夢（＝稲が高く伸びることになるという霊の知らせ）。草が良く出る夢（＝川の貝を採る、網で魚を採ることになるという霊の知らせ）。「伐って悪い」という夢は、自分の家族が薪を運んでいる夢（＝死体を運ぶことになるという霊の知らせ）、鍛冶屋が火をおこす夢（＝土を掘って死体を埋めることになるという霊の知らせ）。

## (3) ティーンタイ村・タイルー族・・・《マイハイ（印を付ける・焼畑）》

- ①いい日を選ぶ：いい日を選んで伐らないと怪我をする。
- ②印を付ける：自分の畑にする範囲が決まったら、その範囲を他人に知らせるために、木に刻みを入れて柴を刺しておく。

## (4) サナンピー村・カム族・・・《伐り始めの儀式（特に呼び名はない）》

- ①唐辛子、貝殻虫の巣（による蜂や悪霊の祓い）：畑にしようと思うところを決めたら、家から砥石、唐辛子、貝殻虫を持って行く。砥石を置いて、火を焚き、唐辛子と貝殻虫を燃やししながら、“ここを畑にしたいと思います。もし良ければ良い夢を見させてください。もしダメだったら悪い夢を見させてください”と唱える。砥石はそのままそこに置いて帰る。砥石は伐り終わってから持ち帰る。
- ②夢のお告げ：「伐って良い」という夢は、洪水の夢か何も夢を見ない。「伐って悪い」という夢は、野生の動物を殺して肉を運んでいる夢。大きな丸太を運んでいる夢。蜂の巣の夢。切り株の根っ子を掘ったりし

ている夢。

(5) ナムコンム村・カム族・・・《ボンケーイ》⇒稲魂の継承を想わせる儀式

①いい日を選んで畑に行く。このとき必ず新しい鉋を作るか、古いものは刃の打ち直しをして持っていく

②畑にする場所に行き“ボンケーイ”を行う：C B A と先ず地面に形を鉋で描く。

A・B・Cの地点に、前年の“刈り初め”で刈り取って高倉の内側の壁に差しておいた穂を持ってきて、Aには穂の下の部分、Bには穂の真ん中、Cには穂先を刺す。同じようにバナナの木、砂糖きびの上中下を刺す。“稲の穂が前年の刈り穂のように、

稲の茎が砂糖きびのように強く、稲の穂がバナナのようにたくさん着くように“

\*奄美のニャーダントイとの関連予兆

③焚火を燃やして、唐辛子、貝殻虫の巣を燃やして“これから木を伐りますので、ここにいる霊、虫、蜂、動物は外に（どこかに）行って（逃げて）ください。ここは私の畑にしますので”と唱えて、家に帰る

(6) ティーンタイ村・タイラー族・・・《マイハイ（印を付ける・焼畑）》

①自分の畑に伐る範囲が決まったら、その範囲を他の人に知らせるために、立ち木に刻みを入れて、そこに柴を刺しておく。そこが2度目の場所だったら、前回伐った人の了解を得なければならない。もし、その人が伐ると言った場合はその人の権利となる。

(7) ナムレーン村・カム族・・・《リッコンハレツ（儀式・選ぶ・焼畑）》

①家から塩、唐辛子、貝殻虫の巣、水竹筒、山刀、砥石を持っていく。道中は絶対に喋ってはいけぬ。また、後ろを振り向いてもいけぬ。これは、自分が霊（ピーー）を怖がらない態度で歩いていることを示す意味がある。

②畑の予定地に着いたら、水筒を置き、その森が人を土葬しているような所であれば厳しい霊がいるので、四つんばいになって口で薪を集める。その薪で火を焚き、塩、唐辛子、貝殻虫の巣を混ぜて焼くが、この時野生の鳥の鳴声がかきこえたら焼いてはならない。聞こえなかったら早めに火を着ける。その煙が森に広がると、森にいる霊がその臭いを恐がって逃げ出す。その後、周りの森を少し払って、竹の水筒と砥石は塩、唐辛子、貝殻虫の巣を焼いた跡に置いて家に帰る。2、3日後に伐りに行く。

7] 焼き始めの儀式・焼き方

(1) ティーンタイ村・タイラー族

①特別にないが、いい日を選んで畑に行き、伐った畑の中にある霊や生物に“この中にある霊はどこかに逃げて下さい。”“今日は畑を焼きますので良く燃えて良い畑になりますように”と祈る。

②下側から2人で左右にわかれて脇を上に移動しながら火をつけていく。風の方向を見ながら、風頭の人が火をつけ、風下は遠慮しながらつけまわす。

(2) ナムレーン村・カム族

①死者を土葬している森だったら、森から霊を追い出すために呪詞を唱えてから火を着ける。

8] 種蒔き始めの儀式

(1) ノンタオ村・カム族・・・プレク（始める）チュボン（突く）ハレツ（畑）の手順

①作小屋の右上の所に“トゥプ ハール”という片葺きの小屋を建てる。

②竹水筒を柱の根元に斜めに付ける。

③この下に種籾を入れたヤン（竹籠）とルン（突き棒）とを小屋の中に入れる。

④一匹のバツタを掴まえてきて、はねと尻とを火で焼いた後に、畑の中に芽を出している草や木の芽をとってきて、小屋の所で燃やす。“今日はこれから種まきをします。まく種子は少なくても収穫が多くなりますように”と祈って、バツタを放す。虫害がないように雑草が出ないようにという意味。種子まきが早く終わりますようにという意味もある。

⑤トゥプハールの周辺に数株をまく。株の数は決まってない。それが終わったらルンを畑の中に放り投げる。その後、ヤンの種籾をその穴の中にまく。

⑥この儀式が終わったら畑全体の本格的な種子まきを始める。

⑦畑全体の種まきが終わったら“トウプハール”は壊して家に帰る。壊さないと芽がよく出なくて稲の出来もよくなる。“稲の芽が良く出ますように、雨が降り土地に水分が十分ありますように”と唱えながら壊す。

(2) ハッサプーイ村・カム族

9] 蒔く種子の種類・・・多様さと早稲種の意味

(1) ハッサプーイ村・カム族

①早稲→ゴツラヨイ、ゴツラハン、ゴツプヌルルー、ゴオチャガール 9月初(ゴツパー)

②中間→ゴツライルー、ゴツタム、ゴツグラン 10月始 (ゴツアンドルック)

③晩稲→ゴツナン、ゴツチェルトレッツ、ゴツヒヤン、ゴツチャオ (うるち) 11月始

黒 粳米

10] 種籾と一緒に畑にまく種子

(1) ホワイレン村・カム族

①タレオの中に鶏頭の花を蒔く

②キウリ、インゲンは稲とまぜて蒔く

11] 稲以外で畑に種籾とはまぜずにまく種子等

(1) ホワイレン村・カム族

里イモ、糸瓜、カボチャ、キャッサバ、サツマイモ、ひょうたん、はとむぎ、なすび、とうがらし、ごま(白・黒)、冬瓜。特に、はとむぎとごまは道と畑の際にまく。また、里イモは竹の株のよく燃えた所、アリの巣の焼けた所に植える。

(2) ナムレーン村・カム族

プアツ(里イモ：少し窪みのあるところに植える)、糸瓜、キャッサバ、サツマイモ、ひょうたん、はとむぎ、なすび、とうがらし、ごま、冬瓜、生姜。特に、ルランルロン(鶏頭の花)は、小屋の周りに植えて、収穫の時に小屋をきれいに飾る。

12] 人間を愚弄する雑草

(1) ティーンタイ村、タイルー族・・・〈人間を愚弄するニャーカッピー〉⇔九州山地の人間を脅迫する紫露草との共通性が見られる

川の近くの畑は、ニャーパッカップが生える。この草は蔓のように這う草である。太陽の光の多いところには蔓も白く花も白いものが、太陽の光の少ないところには蔓も紫で花も紫のものが生える。この草は、もし俺を抜いて石の上に置いたら、畳のようないいところに座れるねと言い、俺を抜いて切った切り株の上に置いたら、俺は馬の背中に乗っているみたいで気持ちがいいよと言って、本当は死ぬくせに気持ちがいいと言って人間を騙す。また、俺を抜いて水に流しても、舟に乗っているみたいで、どこか岸に立ち寄って、また増えていくよと言い、俺を抜いて大きい穴を掘って埋めても少し根が残ってまた増えていくよと言って、人間を脅迫する。

(2) コクナン村、タイルー族

焼畑で一番困る草はトウゴーンという草で、稲が死んでしまうこともある。この草は、人間に嘘をつく。人間が抜き取って切り株に置こうとすると、私をここに置くともっと増えますよと言い、私を土の上に置けば死にますよと言う。

(3) ドウン村、カム族

ニャーカッピーは人間をだます。もし俺を切り株の上に置いたら馬に乗った気分になる(涼しくて気持ちがよい)。もし俺を火に燃やしたら3月の太陽ぐらいに寒い気分になる(本当は熱くて死ぬ)。

(4) ラットエン村・ラオ族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという節で増えていく草で、抜いたら袋に入れて腐るのを待って捨てる。二番目に困る草はニャーカッ、三番目はニャーキューという草である。人を騙す話はない。

(5) テンケーン村・ラオ族

焼畑で一番困る草はサンカラヨルンという節が増えていく草で、二番目に困る草はサオンウー、三番目はクルンソツという草である。人を騙す話はない。

(6) ナムレーン村・カム族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという節が増えていく草で、もし俺を抜いて切り株に掛けると馬に乗っているようにいい気分であると言って、人間を騙す。

(7) ナモン村・ラオ族

コロンプアーは人間をだます（おどす）。もし俺を土の上に置けばもっと増やします。もし俺を伐り株の上に置けば花を咲かして実になって下に落ちて散って、もっと増やします（本当は枯れて死んでしまう）。もし俺を谷や川沿いの所に置けば死にます（本当はもっと増える）。

(8) ナムコンム村・カム族

焼畑で一番困る草はチットサンカラヨンという草で、二番目に困る草はチットハッウーという草である。チットサンカラヨンは、もし俺を抜いて切り株の上に置いたら死なないよ、穴を掘って埋めたら死ぬよと言って人を騙す。

(9) ハッサプーイ村・カム族

焼畑で一番困る草はパラセック（鹿児島ホトケイグサである）という草で、二番目に困る草はチンカイヨルという草で、薄赤い花を咲かし、節が増えていく花である。チンカイヨルは、もし私を抜いて切り株の上に置いたら花を咲かして実になって増えます。私を下（地面）に置いたら死にますと言って人を騙す。

(10) サナンピー村・カム族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという草で、二番目に困る草はニャーメンという草である。ニャーカッピーは、もし私を抜いて石の上に置いたら、太陽が当たったように温かい気分になる。また、私を切り株の上に置いたら、馬の背中に乗っているように涼しい気分だと言って人を騙す。

(11) ティーンタイ村・タイラー族

ニャーカッピーは、最初木の上に生えていたがなかなか土まで下りてこれなかった。そこで、人間に向かって“木の上においたら増やしますよ。土の上においたら死にますよ。”と嘘をついた。人間がそれを信じてそのとおりにしたら、死なずにいっぱい増えた。だから、根まで抜き取って丸めて切り株の上に置いたりする。

(12) ノンタオ村・カム族

焼畑で一番困る草はタゴンという草で、二番目に困る草はプレツという草である。タゴンは、もし私を抜いて石の上に置いたら、地面に落ちてまた増えますよ。また、私を下（地面）に置いたら死んでしまいますよと言って人を騙す。

13] 稲の刈り初めの儀式

(1) ホワイレンム村・カム族・・・ブロン（一緒に）ティー（日）ホット（粃をすごく）

①この儀式の最中はどんなことがあっても畑を出てはならない。

②家の女主人が美しく着飾り（家に伝わる遺産…ブレスレット等）を身につけて行く。この女主人をマゴー（稲の母）と呼ぶ

③作小屋をきれいに掃除し、粃を置く（収納する）竹マットを敷き、入口や柱にラングロン（鶏頭の花…ランマンゴ、ランマーゴ）を飾る。

花魂 稲 花 母 稲 ⇨鹿児島陸稲の中の鶏頭の花

④竹マットの上には前年の古い米を入れる。古い米が新しい稲の魂を迎えるという意味がある。

⑤ラングロンをラトゥンという葉で包む。これをラパックという。これをウコンの周囲の三株を集めて、穂の直下をまいて、その中心に供える。その前に三株の粃は収穫してはならない。

⑥小屋の周辺の粃を“今日は収穫の日です。稲の魂は集まってください。”と唱えながら、一粒ずつ全粒ベン（粃入れ籠）に一杯入れる。

⑦それを小屋の入口に一握りずつ全部を小屋の米倉（竹マットを敷いた所）に投げ入れる。これを3回繰り返す。

返す。

- ⑧ 4回目は森に行く道の上側（左上）の所の籾をベン一杯扱いて米倉に投げ入れる。
- ⑨ マゴーはA、B、Cのエリアが刈り終わる来年の種籾の一種類を刈り取るまでは何も食べてはいけない。
- ⑩ 畑全体が刈り終わってもウコンの周辺の三株を刈り取ってはならない。協同している家全部の家の畑が刈り終わって、それぞれの家の“三株”を刈り取る。そうしないともし早く終わった人が三株を刈ったら、まだ終わってない人の家の稲の魂は逃げてしまうからである。“三株”の籾は作小屋の米倉の中に投げ入れる。三株の籾を混ぜることはしない。

#### 14] カオハン（青米の焼米）⇔鹿児島焼米との共通性

##### (1) ホワイレンム村・カム族

マプルウップ：青い籾を扱き取ってきて蒸して天日に干して乾燥させて、精米して、再度蒸して食べる。今年は米が足りない、新米を食べたい時にする。早稲の種をする。鍋で炒めることはない。早稲は木を横に並べて晩稲畑とは区別して植える。儀式とは関係ないという意味である。

##### (2) シブンハー村・モン族

キンブレイ：青い籾を扱き取ってきて蒸して天日に干して乾燥させて、精米蒸す稲して、再度蒸して食べる。今年は米が足りない、新米を食べたい時にする。早稲の種をする。鍋で炒めることはない。

##### (3) ナンマオ村・モン族

キーンブレイ：青い籾を扱き取ってきて鍋で炒って、天日に干して乾燥させて、炒る稲精米して、再度蒸して食べる。まだ籾が青いから最初に炒らないと米が潰れるため、固めるに炒る。最初に蒸すことはしない。

##### (4) ノンタオ村・カム族

ゴプルウップ：早稲の青い米を穫って、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。早稲は儀礼がない。食べるとき少し水を加えて、ベタベタならないでいどに柔らかくして、蒸して食べる。去年の米が足りなくなったらゴプルウップを作る。また、美味しく、香りが良いので作って食べる。

##### (5) サナンピー村・カム族

ゴプルウップ：刈り始めの儀式に関係なく、その前に早稲の青い米を穫って、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。それを竹の筒に入れて焼いて食べる。

##### (6) ナムレーン村・カム族

ゴパラウップ：昔は、飯米が足りなくなったとき、ルイツ（泥棒）をしに行くといって畑に行き、正式な畑の入口とは違うところから畑に入り、早稲のまだ中途半端で青い米を穫ってくる。家に帰ってきて家の中に持ち込まず、家の外に置く。先祖たちの霊に見られないように、知られないように、家の外で脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。食べるときは、家の中で食べる。ゴパラウップは少量ずつ何回も作り、年によっては早稲の稲をすべて食べ尽くすこともある。

##### (7) ドウン村・カム族

マプルウップ：早稲が黄金色になる前に籾を収穫して、蒸して、天日に干して、搗いて精米して、再度蒸してご飯にして食べる。

##### (8) ハッサプーイ村・カム族

カオハン：刈り始めの儀式とは関係なく、畑の四隅に植えてある早稲種の（ラオ語）まだ中途半端で青い籾を刈り穫って、脱穀して、蒸して、天日で干して、蒸してご飯にして食べる。ヤン（背負い籠）で2～3個分ぐらい作る。初めて収穫したときには、先祖にも食べさせ、自分たちも食べる。去年の米があるなしにかかわらず作る。去年の米が足りなくなった時に、カオハンを食べる。

##### (9) ナモン村・タイラー族

カオハン：現在の水田稲作になってからはしないが、昔焼畑で稲を作っていたときには、飯米が足りなくなったときに畑に行き、畑の周囲のまだ青い籾を盗んで帰ってきて、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。太陽がないときは、代わりに鍋で炒って、少し冷まして、精米して、蒸して食べる。

##### (10) コックナム村・タイラー族

カオハン：青い米のうちに触ると、米の魂に悪いことをすることになるから、カオハンを作らない。

(11) ラットエン村・ラオ族

カオハン：ピチーフットカオ（儀式・扱く・米）という収穫初めの儀式の前に、「稲の霊が知らないうちに泥棒してやる」といって、早稲の糯種の籾を畑から穫ってきて、蒸して、天日で干して、臼で搗いて、食べる。米の足りない人は、「他人の米を借りるよりカオハンをする方がましだ」といって、飯米の代わりにご飯に炊いて食べる。お米が足りている人は、香りがよいから楽しみにココナツのミルクと炊いて食べる。

(12) ナーニャンタイ村・タイル族

カオハン：まだ熟し切っていない早稲や中間種の糯の籾を畑から穫ってきて、蒸して天日で干して、臼で搗いて、食べる。ピティヘッキヨ（儀式・始める・刈る）という刈初めの儀式の前にカオハンをやるときは、「稲の霊が知らないうちに泥棒する」といってやる。

カオマウ：作り方は、カオハンと同じであるが、小さい米をカオマウといい、そのまま食べるものである。

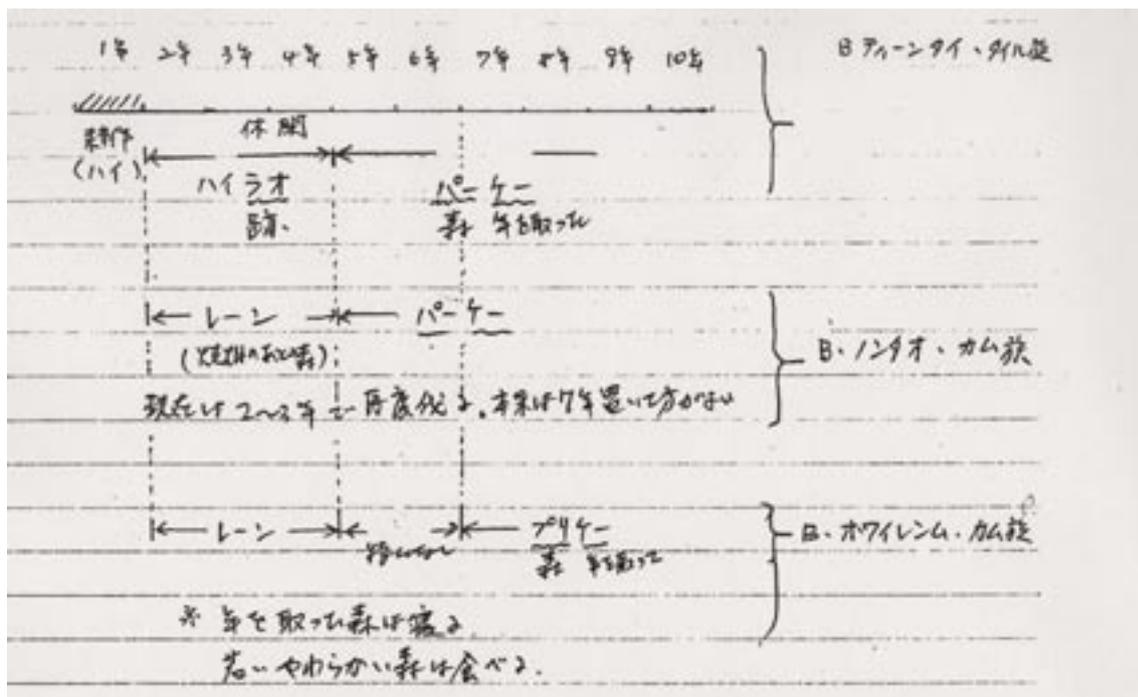
15] 焼畑その後—焼畑民の森の観念

(図を参照)

「年を取った森は寝る。若いやわらかい森は食べる」(B・ホイルム・カム族)

(1) サナンピー村・カム族

マイトンコップという木は、燃やしても種が死なないので、最初に芽生える。しかし、成長が早いので草取



りのとき芽が出ていても除去することはない。その後、1年くらいに伐った木のひこばえが出る。竹は小さいのが出て竹の子は採取できるようになり、2～3年目には大きく成長し、5～6年ぐらいうると竹細工に利用できるようになる。また、6～7年ぐらいで木を追い抜く。

3. 若干の考察

これまでの事例を通して、この地域の人が焼畑の適地として竹と木との混交した森を対象にしていることが明確になった。その大きな理由として水分の存在を挙げている。また、竹の再生が木の再生をも助けることにつながることもその基準の一つである。

その後に芽生える竹の子は、重要な食材となり伝統的調理法を生み出し、豊かな食文化の背景を形成している。さらに、成長した竹は竹細工の材料として用いられ、豊富な竹の生活道具を生み出している。サナンピー村（カ

ム族)の「マイトンコップという木は、燃やしても種が死なないので、最初に芽生える。しかし、成長が早いので草取りのとき芽が出ていても除去することはしない。その後1年くらいに伐った木のひこばえが出る。竹は小さいのが出て竹の子は採取できるようになり、2～3年目には大きく成長し、5～6年ぐらいうると竹細工に利用できるようになる。また、6～7年ぐらいで木を追い抜く。」という伝承や、ホワイレンム村(カム族)の「年を取った森は寝る」「若いやわらかい森は食べる」という伝承は、そのことを雄弁に物語っている。こうした竹に対する認識は“一年目はアワヤマ(粟の焼畑)、二年すれば竹の子畑、三年すればもとの竹山、十年すればまたアワヤマという”、鹿児島郡十島村悪石島の竹の焼畑の伝承と深くつながる。

こうしてみるとラオスの焼畑民にとって、「原始林」・「原生林」が「森」なのではなく、竹と木の混じった再生の森こそが「森」であり、人間にとっての“生きた”環境であると言えるのではないかと思われる。そして、このことが、中国の雲南やタイ北部、ミャンマー北部など周辺の回復不可能な赤肌の露出した山を生み出してきたことへの反省につながり、ラオスの森をそうしたことから回避する道筋を示しているように思える。

今後の調査に於いては、さらに事例の積み重ねを行い、南九州及び南西諸島との比較検討を加えていきたい。また、今回の報告からは省いたが、竹の生活道具の製作技術を具体的に記述し、併せて実物資料の収集を進め、その機能と変遷とを明らかにしていきたい。

稲作の儀礼についての考察に関しては次回の報告に譲ることにしたい。ただ、焼米のことについて若干触れておきたい。焼米の対象となるのは早稲種であり、カム族やモン族とタイ族系とはいささか差異がある。カム族やモン族においては、早稲は木を横に並べたり、畑の四隅に区画して、中間種や晩稲とは区別して植え、刈り始めの儀式とは関係ないという認識が窺える(ただし、ナムレーン村・カム族のゴパラウップ事例は、さらに注意深く検討する必要がある)。これに対してタイ族系民族のカオハンは、稲の魂から盗むという罪悪感を伴う。これは、日本列島の二つの焼米、つまり、柳田国男が主張した田の神への供物としての聖なる焼米と、川野が指摘する日常食の補給米としての鹿児島の焼米の差は、こうした文脈の中で理解するのが妥当であるかも知れない。焼米の議論の新たな展開が可能になるとともに、日本の文化の多様性あるいは多文化という構造を議論する民俗文化としての要素になりうる可能性があるということを指摘しておく。